

長峰地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 6

岸田遺跡 1

— 第1次調査1区の報告 —

2015

福岡市教育委員会

岸田遺跡

1

— 第1次調査1区の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1256集

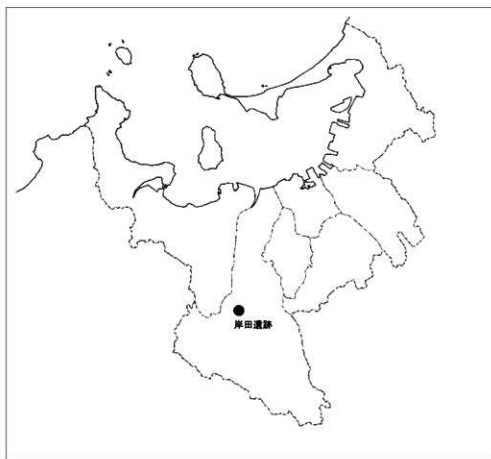
二〇一五

福岡市教育委員会

長峰地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 6

岸田遺跡 1

－ 第1次調査1区の報告 －



遺跡略号 KID-1
遺跡調査番号 0930

2015

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現在に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回、長峰地区土地改良事業を行うに当たり、松木田遺跡・内野熊山遺跡・岸田遺跡・長峰谷口B遺跡の発掘調査をおこない、多くの貴重な成果をあげることができました。本書は、岸田遺跡の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解を深める一助となると共に、学術研究にも貢献する資料となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、福岡市長峰土地改良区の皆様をはじめとした地域の方々、そして関係各位のご理解を賜り、多大なるご協力をいただきましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

例言

1. 本書は、長峰地区土地改良事業に伴い、福岡市教育委員会が平成21～23年度に早良区早良地内において実施した発掘調査のうち、岸田遺跡第1次調査1区の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸・名取さつき・坂口剛毅・松尾奈緒子が行った。
3. 遺物の実測は大庭智子・中尾佑太・立石真司・濱石正子・福藪美由紀・山口朱美・山口謙治・松尾が行った。
4. 製図は大庭・松尾が行った。
5. 写真は長家・松尾が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から6°西偏し、真北から6°18'西偏する(調査時点)。
なお、座標は特に断らない限り世界測地系を使用している。
7. 遺構は、堅穴住居をSC、掘立柱建物をSB、ピットをSP、性格不明遺構をSXと略号化して記述した。
8. 本書に関わる遺物・記録等の全資料は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて保管・公開される予定である。
9. 本書の執筆と編集は、松尾が行った。

また、附論として、九州大学大学院比較社会文化研究院地球変動講座 足立達朗氏・小山内康人氏による出土石材の分析を掲載している。なお、この分析に際しては、執筆者以外に、九州大学比較社会文化研究院の田中良之先生・溝口孝司先生・田尻義了先生・石田智子氏にもご指導をいただいた。

10. 古墳時代の土器群の時期決定は、以下の文献によった。

久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究XIX』庄内式土器研究会重藤輝行 2010 「北部九州における古墳時代中期の土器器編年」『古文化談叢』第63集

岸田遺跡第1次調査

遺跡名	岸田遺跡	調査回数	1次	調査略号	KID-1
遺跡調査番号	0930	分布地図図幅名	一ツ家	遺跡登録番号	0788
開発総面積	19ha			総調査面積	5775㎡
総調査期間	平成21年10月27日～平成22年10月19日			事前審査番号	19-1-38
調査地	福岡市早良区早良4丁目				

本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経緯	1
2	調査体制	2
3	各調査地点概要	2
4	調査地点の立地と環境	3
II	岸田遺跡第1次調査1区の記録	9
1	概要	9
2	遺構と遺物	11
	(1) 竪穴住居	11
	(2) 掘立柱建物	90
	(3) 土坑	90
	(4) そのほかの遺構と遺物	94
	(5) 小結	99
附編	岸田遺跡第1次調査出土の「赤色岩石」について	
	(九州大学アジア埋蔵文化財研究センター 足立達朗・田尻義了)	
	(九州大学大学院比較社会文化研究院 中野伸彦・小山内康人)	
	(福岡市経済観光文化局 松尾奈緒子)	105

挿図目次

第1図	調査地点の位置と周辺遺跡 (1/75,000)	4
第2図	事業地内調査区位置図1 (1/3,000)	折込1
第3図	事業地内調査区位置図2 (1/3,000)	折込2
第4図	1区基本層序模式図	9
第5図	1区南壁土層図 (1/50)	10
第6図	1区上面全体図 (1/200)	折込3
第7図	1区下面全体図 (1/200)	折込4
第8図	SC01・03実測図 (1/40)	12
第9図	SC01出土遺物実測図1 (1/3)	13
第10図	SC01出土遺物実測図2 (1/1・1/2・1/3)	14
第11図	SC02・05実測図 (1/50)	17
第12図	SC02出土遺物実測図1 (1/3)	18
第13図	SC02出土遺物実測図2 (1/1・1/2・1/3)	19
第14図	SC04実測図 (1/40)	22
第15図	SC04出土遺物実測図1 (1/3)	23
第16図	SC04出土遺物実測図2 (1/1・1/2・1/3)	24
第17図	SC06・07・08実測図 (1/40)	26
第18図	SC06・07・08出土遺物実測図1 (1/3)	27
第19図	SC06・07・08出土遺物実測図2 (1/1・1/2・1/3)	28
第20図	SC09実測図 (1/40)	31
第21図	SC09出土遺物実測図 (1/3)	31
第22図	SC10実測図 (1/40)	33
第23図	SC10出土遺物実測図1 (1/1・1/3)	34
第24図	SC10出土遺物実測図2 (1/3)	35
第25図	SC11実測図 (1/40)	36
第26図	SC11出土遺物実測図1 (1/3)	38
第27図	SC11出土遺物実測図2 (1/2・1/3・1/4)	39
第28図	SX12・SC13・14実測図 (1/50)	41
第29図	SX12・SC13・14出土遺物実測図1 (1/3)	43
第30図	SX12・SC13・14出土遺物実測図2 (1/3)	44
第31図	SC15実測図 (1/40)	45
第32図	SC15出土遺物実測図1 (1/3)	46
第33図	SC15出土遺物実測図2 (1/1・1/3)	47
第34図	SC16実測図 (1/40)	49
第35図	SC16出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)	50
第36図	SC20実測図 (1/50)	51
第37図	SC20出土遺物実測図1 (1/3)	53
第38図	SC20出土遺物実測図2 (1/3)	54

第39図	SC20出土遺物実測図3 (1/1・1/2)	55
第40図	SC22実測図 (1/40)	58
第41図	SC22出土遺物実測図 (1/2・1/3)	59
第42図	SC23実測図 (1/40)	61
第43図	SC23出土遺物実測図 (1/2・1/3)	62
第44図	SC24実測図 (1/50)	折込5
第45図	SC24出土遺物実測図1 (1/3)	65
第46図	SC24出土遺物実測図2 (1/3・1/6)	66
第47図	SX25実測図 (1/40)	68
第48図	SC26実測図 (1/50)	69
第49図	SC26出土遺物実測図 (1/2・1/3)	70
第50図	SC27実測図 (1/50)	72
第51図	SC28実測図 (1/50)	74
第52図	SC29実測図 (1/40)	75
第53図	SC27・28・30・31出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)	76
第54図	SC30実測図 (1/50)	77
第55図	SC31実測図 (1/50)	78
第56図	SC32・SX33実測図 (1/40)	80
第57図	SC34実測図 (1/40)	81
第58図	SC35実測図 (1/40)	82
第59図	SX33・SC34・35・SX40出土遺物実測図 (1/3・1/4)	83
第60図	SC36実測図 (1/40)	85
第61図	SC37実測図 (1/40)	86
第62図	SC38・39実測図 (1/40)	87
第63図	SC36・39出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)	89
第64図	SX40実測図 (1/40)	90
第65図	SB21実測図 (1/40)	91
第66図	SK17・18・19・1235実測図 (1/40)	92
第67図	SK19・1235出土遺物実測図 (1/2・1/3)	93
第68図	SP1160・1234・1563実測図 (1/20)	94
第69図	SP1160・1234出土遺物実測図 (1/4)	95
第70図	そのほかの柱穴出土遺物実測図 (1/1・1/3)	97
第71図	遺構検出時の出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)	98
第72図	1区竪穴住居変遷図 (1/1,000)	104

表目次

第1表	発掘調査地点一覧	2
第2表	1区検出の竪穴住居一覧	103

写真目次

写真1	調査地点付近より北側をのぞむ（平成24年4月撮影）	6
写真2	調査地点付近より南側をのぞむ（平成21年5月撮影）	6
写真3	土地改良事業前（平成21年5月撮影）	7
写真4	土地改良事業後（平成24年4月撮影）	7
写真5	岸田遺跡第1次調査1区～3区全景（上空から）	8
写真6	岸田遺跡第1次調査4区全景（上空から）	8
写真7	岸田遺跡第1次調査着手前（南から）	8
写真8	岸田遺跡第1次調査着手前（東から）	8
写真9	岸田遺跡第1次調査1区調査状況（北から）	8
写真10	岸田遺跡第1次調査4区検出遺構	8
写真11	SC20出土R1	55
写真12	1区～3区より早良平野をのぞむ（南から）	109
写真13	1区・2区上面全景（上空から）	109
写真14	1区下面全景（北から）	110
写真15	1区下面西半（北から）	110
写真16	1区南壁東半土層（北から）	111
写真17	1区南壁西半土層（北から）	111
写真18	1区南壁沿いトレンチ（北から）	111
写真19	SC01（西から）	112
写真20	SC01（南から）	112
写真21	SC02・04・05（西から）	112
写真22	SC04（西から）	113
写真23	SC04（北から）	113
写真24	SC04火災痕跡（西から）	113
写真25	SC06・07・08（西から）	114
写真26	SC06・07・08（東から）	114
写真27	SC09（西から）	114
写真28	SC10（西から）	115
写真29	SC10（北から）	115
写真30	SC10完掘（西から）	115
写真31	SC11（西から）	116
写真32	SC11（北から）	116
写真33	SX12・SC13・14・15（北から）	116
写真34	SC15（西から）	117
写真35	SC16（西から）	117
写真36	SC20（東から）	117
写真37	SC20 R1出土状況（東から）	118
写真38	SC22（東から）	118

写真39	SC22 (北から)	118
写真40	SC23 (東から)	119
写真41	SC23 (南から)	119
写真42	SC24 (東から)	119
写真43	SC24 (上空から)	120
写真44	1区SC23・24・2区SC2001 (上空から)	120
写真45	SC24SP19 (西から)	121
写真46	SC24SP19石組 (西から)	121
写真47	SC24焼土溜 (北から)	121
写真48	SC24焼土溜土層 (北から)	122
写真49	SC26 (北から)	122
写真50	SC26土層 (北から)	122
写真51	SC26炉周辺 (北から)	123
写真52	SC27 (北から)	123
写真53	SC28 (北から)	123
写真54	SC29 (西から)	124
写真55	SC30 (西から)	124
写真56	SC30 (北から)	124
写真57	SC31 (北から)	125
写真58	SC32 (北から)	125
写真59	SC32土層 (北から)	125
写真60	SX33 (東から)	126
写真61	SC34 (北から)	126
写真62	SC35 (北から)	126
写真63	SC36 (北から)	127
写真64	SC37 (東から)	127
写真65	SC38・39 (東から)	127
写真66	SB21 (西から)	128
写真67	SP1160 (南から)	128
写真68	SP1234 (南から)	128
写真69	SP1563 (西から)	129
写真70	SP1563 (北から)	129
写真71	SC01・02出土遺物	130
	第9図1 第10図14・15・22 第12図4・5・6	
写真72	SC04出土遺物	131
	第15図2・3・6・7 第16図8・9・10・11	
写真73	SC06・07・08出土遺物	132
	第18図2・3・4・6・13 第19図15・16・17・19	
写真74	SC06・07・08・10出土遺物	133
	第19図14・21 第23図7・8 第24図12・13・14・16	

写真75	SC10・11出土遺物	134
	第23図1・2・3 第24図10・11・18 第26図5・7	
写真76	SC11出土遺物	135
	第26図1・2・10・11 第27図21	
写真77	SX12・SC13・14出土遺物	136
	第29図1・2・3・4・6・7・8 第30図12・13	
写真78	SC13・15出土遺物	137
	第30図10 第32図3・6・7 第33図9・12・15・16	
写真79	SC16・20出土遺物	138
	第35図1・2・3・4・6・7 第37図1・2・3・6 第38図21・23	
写真80	SC20出土遺物	139
	第37図5・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16 第38図24・25 第39図33	
写真81	SC20・22出土遺物	140
	第37図17・18・19 第38図29・30・31 第41図1・2・3・7・8	
写真82	SC22・23・24出土遺物	141
	第41図10 第43図3・5・6 第45図7・8・9・10・11・14・15・16	
写真83	SC24・26・34・SX33出土遺物	142
	第45図1・2 第46図19・21・23 第49図1・2・4 第59図1・6	
写真84	SC26・27・28・31・35・36出土遺物	143
	第49図7・8 第53図14・15・18 第59図7・8 第63図7 SC36出土台石	
写真85	柱穴出土遺物	144
	第69図1・2 第70図1・5・8・10・11・13・15・16・17	
写真86	遺構検出時出土遺物・土抗出土遺物・出土鉄製品・出土縄文土器	145
	第41図11・12 第43図9 第67図3 第71図1・2・3・4・5・9 第13図18 第19図18 第53図11 第70図7	
写真87	縄文時代の石器	146
	第10図26 第13図19・20 第16図12・13 第33図17 第35図8 第39図34 第53図17 第63図8 第70図18・19 第71図7・8	

I はじめに

1 調査にいたる経緯

平成19年7月23日付け農計第387号により、福岡市農林水産局農林部農地計画課長より埋蔵文化財第1課長宛に、早良区早良2～5丁目地内における、長峰地区基盤整備促進事業にかかわる「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」が提出された（事前審査番号19-1-38）。当該事業は、平成21年度～23年度の3年にわたって、長峰地区の耕地19.0haにおいて圃場整備事業を行うものである。計画地域内には周知の埋蔵文化財包蔵地として、松木田遺跡・岸田遺跡・下兵庫遺跡・内野熊山遺跡が存在しており、書類審査を行った埋蔵文化財第1課では、計画地域全体を対象として試掘調査が必要な旨を回答した（平成19年7月24日、教理1第1260号）。この後、埋蔵文化財第1課、農地計画課および、施工主体である長峰土地改良区によって協議が重ねられた。その結果、平成19年8月7日付けで、教育長山田弘裕副長に、長峰土地改良区理事長名による埋蔵文化財予備調査承諾書が提出された。これをうけて埋蔵文化財第1課では、平成19年8月28日～平成20年4月22日の期間で、一部の調査不能であった田面をのぞいて、事業範囲全体を対象とした試掘調査を行った。試掘調査は、地権者と協議の上、耕作の行われていない田面から随時実施した。試掘トレンチの総数は321本であるが、調査後に再度耕作をするため、各トレンチは幅1m、長さ2～5mの小規模なものとなっている。この試掘調査の結果、計画地の北東側は室見川の氾濫原となり、遺構がみとめられなかったが、西～南側の段丘面を中心として濃密な遺構群が展開していることが確認された。この結果について、埋蔵文化財第1課は、農地計画課長宛てに、平成20年6月4日付け教理1第633号「埋蔵文化財の事前調査について（回答）」で回答した。この回答をうけて、再度協議が行われ、埋蔵文化財第1課は、事業実施にあたっては、工事によって埋蔵文化財の破壊が避けられない地区および施工後の保護盛土が20cm以下もしくは2m以上となる地区については発掘調査を行い、記録保存を図る必要があることを伝え、3者は、試掘調査結果と事業計画のすりあわせを行い、発掘調査が必要な地区と現状保存が可能な地区を明確化する作業を行うことで合意した。この結果、平成21年度～23年度の施工計画にあわせ、各年度4月から調査対象地について発掘調査を行う方針を決定した。そして、当該年度の調査地点が終了した後は、次年度の要調査地点のうち地権者の了解が得られる田面については継続して発掘調査をすすめ、調査中においても計画高の見直しを行い、積極的に遺構の保存を図ることとした。なお、1地点で遺構ありとしていた下兵庫遺跡においては、本調査前の再試掘の結果、遺構がないことを確認している。

以上のような協議を行ったうえで、平成21（2009）年4月15日～平成22（2010）年10月7日の期間で松木田（まつきだ）遺跡第4次調査（遺跡略号：MKD-4，調査番号：0905）、平成21（2009）年10月27日～平成22（2010）年10月19日で岸田（きしだ）遺跡第1次調査（遺跡略号：KID-1，調査番号：0930）、平成22（2010）年9月16日～平成23（2011）年1月25日で内野熊山（うちのくまやま）遺跡第1次調査（遺跡略号UKY-1，調査番号1025）、平成23（2011）年7月4日～平成23（2011）年8月19日で長峰谷口（ながみねたにぐち）B遺跡第1次調査（遺跡略号：NGB-1，調査番号：1111）の調査を行った。測量作業は、事業に伴い設置された4級基準点をもとに行った。

整理作業は調査と並行して行い、調査報告書は平成24年度から3年間で刊行することとした。本年度が最後の調査報告書の刊行となる。

なお、発掘調査・整理作業は、一部、国庫補助の適用をうけて実施した。

2 調査体制

事業主体 長峰土地改良区

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

整理主体 福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

総括 現埋蔵文化財調査課長 濱石哲也（平成21年度）・田中壽夫（平成21～23年度）

宮井善朗（平成24～25年度）・常松幹雄（平成26年度）

事前審査 現埋蔵文化財審査課事前審査係 吉留秀敏・星野恵美（平成19～20年度）

阿部泰之（平成21年度）

庶務 現埋蔵文化財審査課管理係 古賀とも子（平成21～24年度）

横田忍（平成25～26年度）

調査担当 現埋蔵文化財調査課 長家伸・加藤隆也・大塚紀宜・阿部泰之・松尾奈緒子

なお、文化財部は組織変更のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

3 各調査地点概要

発掘調査は施工計画にあわせて平成21～23年度にわたって行った。なお、松木田遺跡第4次調査1区については上面遺構のみ調査を行い、下層の縄文包含層は現状保存を図っている。

第1表 発掘調査地点一覧

調査名 (遺跡略号・調査番号)	期間 (調査経路・コンクナ数)	区	調査面積 (㎡)	コンクナ数	概要	報告書発行 予定年度
松木田遺跡第4次 (MKD-4・0905)	平成21年4月15日～ 平成22年10月7日 (5,628㎡・363区)	1区	1,311	70	縄文時代早期藤島文土層の包含層を確認した。そのほか弥生時代中期～中世前半の遺構・遺物を検出した。弥生時代中期～古墳時代前期の竪立柱礎、壘穴住居跡と土器・土器片の調査が主な目的。 調査は上面の遺構のみとし、下層の縄文時代包含層については現状保存としている。	平成24年度 (1204集)
		2区	1,190	35	巨塚北部部に縄文時代早期藤島文土層1基を確認した。そのほか縄文時代中期～中世前半の遺構・遺物を確認している。中でも古代には竪立柱・土器片が検出される。	平成24年度 (1204集)
		3区	365	5	松木田遺跡東側縁辺部分に当たる。溝・ピット等を確認し、弥生時代～古墳時代前期の遺物が出土している。遺構の時相は不明である。	平成24年度 (1204集)
		4区	94	20	遺跡南側に接する自然水路の調査である。縁辺ではピットを確認した。道路内からは弥生時代中期～中世前半代に属する遺物が出土している。動物骨と土器片、敷石、敷石層が検出されている。周辺の調査で動物骨が確認されているが、発生源の可能性は考えられる。	平成25年度 (1241集)
		5区	558	180	警備倉47基、本館・土塚墓17基による弥生時代の埋葬遺構群と後期古墳1基のほか古墳時代～中世前半の遺構・遺物を検出した。また、土器類と土に攪拌層も出土している。	平成25年度 (1241集)
		6区	208	52	古墳時代の方形竪穴住居2棟、古代の竪立柱4基、土塚墓1基を確認した。壘穴住居は北面に開かれ、2面にピットが連続して検出された。竪立柱は古墳時代遺構の上層で検出され、遺構周囲の包含層からは敷石層も出土した。土塚墓からは新葬層として褐色土層が出土した。	平成25年度 (1242集)
		7区	1,220	2	東洋町御船場地の田畑田下部分を対象に調査区を設定した。調査区中央部には北流する河川道がみられ、その周辺ではピット状遺構などを検出した。縄文時代から中世までの土器や石器が出土した。	平成24年度 (1204集)
		8区	680	1	7区調査地点の南道を挟んだ東側隣接地に8区を設定した。7区同様、褐色色の土層も上面に出ていた。不定形の遺構を検出し、縄文時代から古墳時代にかけての土器や石器が出土した。	平成24年度 (1204集)
岸田遺跡第1次 (KID-1・0930)	平成21年10月27日～ 平成22年10月19日 (5,775㎡・429区)	1区	1,174	96	弥生時代終末期～古墳時代前期を中心に、弥生時代中期～古墳時代中期までの壘穴住居跡を多数検出した。しかし、北西側巨塚上に検出する層間は弥生時代中期～後期の遺構である。壘穴の中は灰土層に接しているようである。壘穴住居跡出土土器には、依賀平野の影響がみられる土器も含まれる。	平成26年度
		2区	405	22	1区の北側に位置する。弥生時代終末を中心とした生活遺構群を確認している。1区で検出された大型の壘穴住居跡(18×11.5m)も基礎している。	平成26年度
		3区	628	10	弥生時代中期～古墳時代前期の生活遺構群の北西部にあたる。壘穴が通入している。壘穴住居跡のピット・土器等の生活遺構を検出した。	平成26年度
		4区	2,761	283	1～3区区間の巨塚上の調査である。弥生時代を中心とする中世までの生活遺構とともに、弥生時代前期末～後期の積層墓78基、本館・土塚墓8基も検出した。5基の埋葬遺構からは銅剣・銅矛・銅斧片・鉄文等の副葬品も出土する。	平成26年度
		5区	807	18	1区の南側に位置する。2区の遺構面でも調査を行った。1区同様弥生時代中期～古墳時代を中心とした遺構群を確認している。	平成26年度
内野熊山遺跡第1次 (KY-1・1025)	平成22年9月16日～ 平成23年1月25日 (3,149㎡・148区)	1区	1,008	4	遺物包含層下にて、不定形の坪みを掘削した。調査後、遺構確認のためグリッド単位での掘削を行った。縄文時代の土器・石器が出土した。	平成24年度 (1205集)
		2区	1,442	6	表土除去後、中世の積層遺構を掘削し、その後、グリッドを設定し掘削調査を進めた。1区同様、縄文時代の土器や石器が出土した。	平成24年度 (1205集)
		3区	193	2	遺跡範囲のほぼ中央に位置する東西方向の水路予定地である。調査区を二分して行った。調査区周辺の地下には北流する河川道が位置して2区、その上層には縄文時代遺構が検出する。	平成24年度 (1205集)
		4区	506	2	遺跡範囲の北側に位置する東西方向の水路予定地である。調査区を二分して行った。表土除去後、グリッドを設定し掘削を行ったが、遺物の顕著な散布はみられなかった。	平成24年度 (1205集)
長峰谷口B遺跡第1次 (NGB-1・1111)	平成23年7月4日～ 平成23年9月19日 (1,984㎡・28区)		1,984	2	古代末の層および包含層を検出し、溝はL字形に掘削されるため、区画境の可能性もある。	平成24年度 (1206集)

4 調査地点の立地と環境

早良平野は、福岡市西区及び早良区を北流する室見川流域の扇状地性の河成平野部を主体とし、東は東油山から派生する低丘陵、西は脊振山系より派生する長垂山塊によって画され、扇形状にまとまった地理的空間を形成している。また、博多湾に面する河口部分には砂丘と、その後背部分に湿地帯が形成され、平野内には阿蘇山噴火火砕流起源の洪積丘陵が点在している。

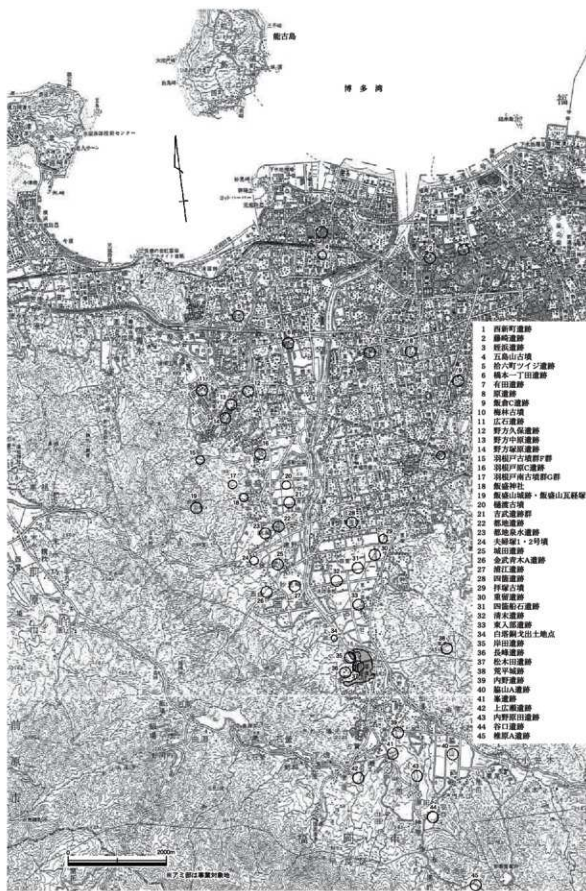
今回調査が行われた早良区早良は、このような早良平野の最奥に位置し、早良平野の西側を画する長垂山塊のうち、西山（標高430m）の東側山麓部にひろがる砂礫台地、および、室見川に落ち込む台地前面の沖積扇状平野で構成されている。砂礫台地は山地から供給された土砂により形成された扇状地が台地化したもので、自然解析によって分離され舌状に伸びている。早良区早良の主要な遺跡は、このような舌状にわかれた砂礫台地（土地分類上は中位段丘）を中心に展開している。

早良平野内では旧石器時代以降各時代の遺構・遺物が確認されており、概要を簡単にたどりたい。

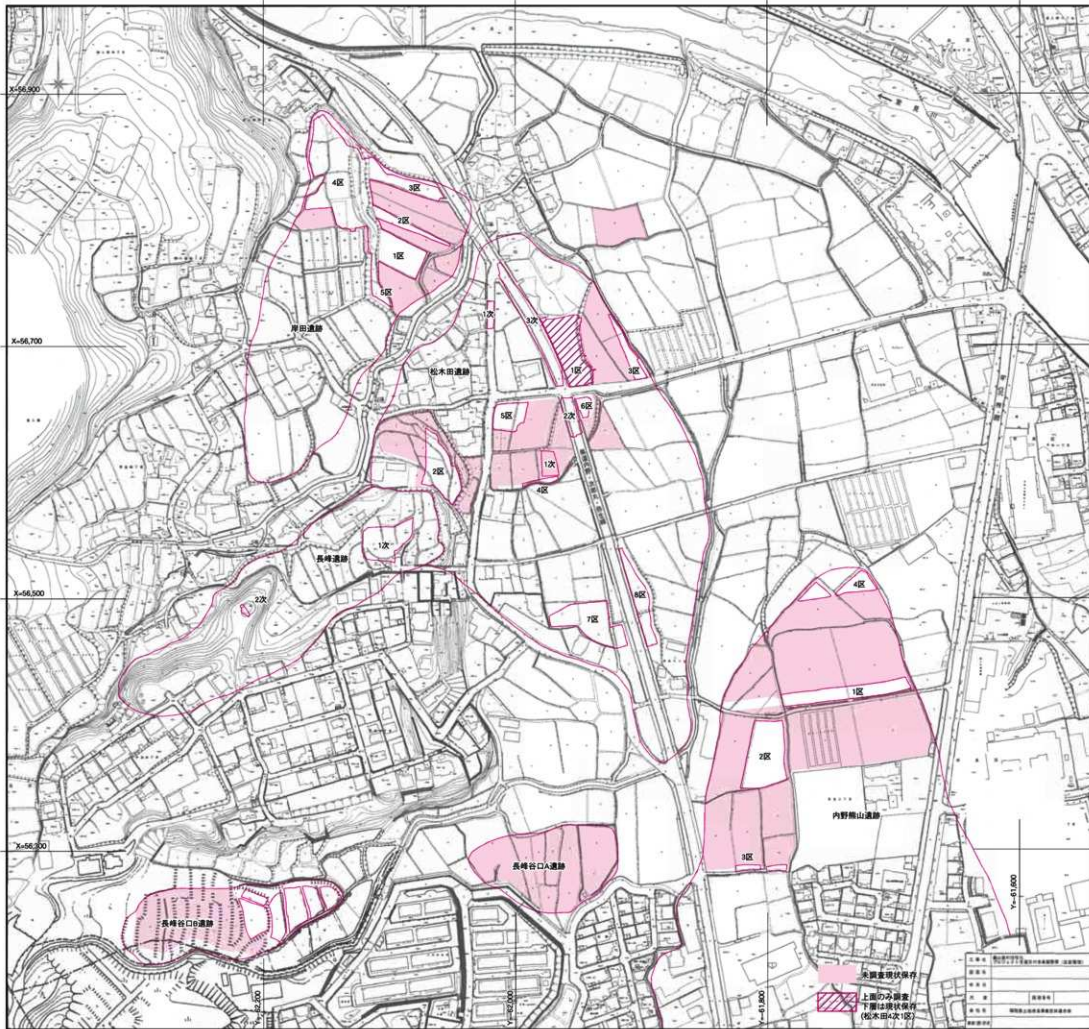
旧石器時代の遺跡は、洪積台地上及び山麓扇状地上に分布している。有田遺跡群ではナイフ形石器前段階から細石器段階の石器、脇山A遺跡からは細石器が出土している。その他、吉武遺跡群・羽根戸原C遺跡・浦江遺跡でも遺物がみつめられる。

縄文時代の遺跡は、前段階の遺跡に加え標高の高い山間部にも広がる。松木田遺跡では、燃糸文土器期の集石が見られ、良好な遺物包含層を確認している。脊振山系にかかる板屋遺跡・椎原遺跡、平野部の広石遺跡からは、早期～前期の土器・石器類が出土している。その後、後期～晩期には遺構・遺物が増加し、四箇遺跡では後期後半の湿地層からオオムギ等の栽培種子が確認され、栽培活動が行われた可能性が高いことが推定されている。また橋本一丁田遺跡からは晩期後半の遺物が多量に出土し、水田関連遺構も確認されている。

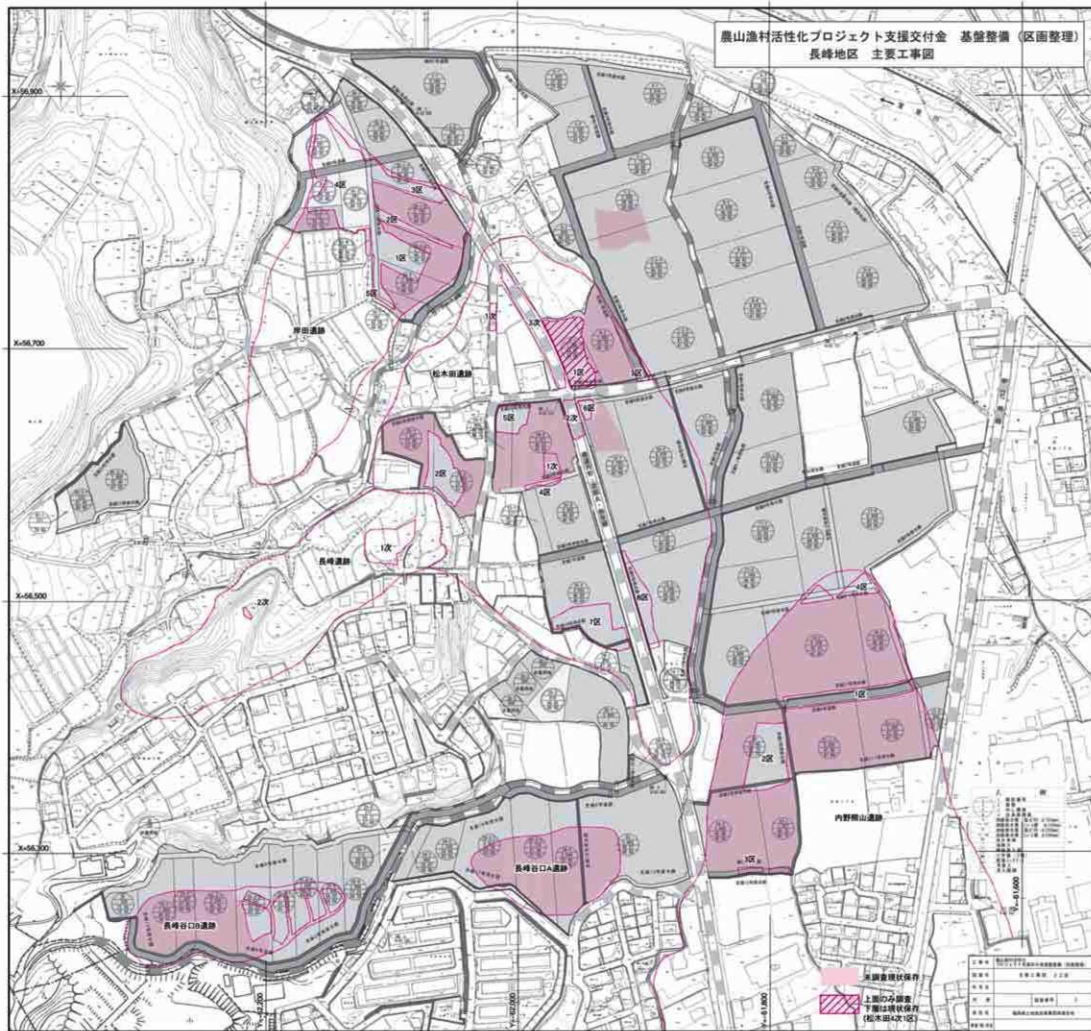
弥生時代になると平野各所の砂丘・洪積丘陵・沖積微高地・低丘陵上に遺跡群が展開し、安定した集落の形成がはじまる。砂丘上では西新・藤崎・姪浜遺跡が知られ、いずれの遺跡においても甕棺墓を中心とした大規模な埋葬遺構群が形成されている。とくに、藤崎遺跡では、板付Ⅱb式～金海式期の区画墓・墳丘墓の可能性を有する埋葬遺構群がみられる。また、姪浜遺跡では、弥生時代中期以降の甕棺墓・生活遺構があり、朝鮮半島産の無文土器、漢式三角鏃、貝輪・貝玉他の対外的交流を示す遺物とともに、日常土器を使用した製塩の痕跡も確認されている。一方、洪積丘陵上に位置する有田遺跡群では弥生時代全期を通じた遺構・遺物が確認されており、前期末の甕棺から銅戈、中期後半の甕棺から前漢鏡・小型仿製鏡等が出土している。また、平野を画する東側低丘陵上には飯倉C（飯倉唐木）遺跡があり、前期から土坑墓・甕棺墓群が形成され始め、前期末の甕棺から細型銅剣2本、中期末の甕棺から素環頭刀子1点が出土している。反対側の西側丘陵上では野方久保遺跡において中期前半の甕棺墓2基から銅剣2本・把頭飾1点が出土し、後期には野方中原・野方塚原遺跡の石棺墓から鏡片が出土している。さらに、今回の事業地周辺にあたる平野南部地域では、室見川右岸の四箇船石遺跡において支石墓が現存し、周囲では甕棺墓も確認されている。これより南側に位置する東入部遺跡では、前期より甕棺墓・木棺墓群が形成され、中期前半代～末には周溝による区画墓が形成される。この遺跡では、前期末～中期初頭の埋葬遺構から銅剣2本、中期前半～後半の甕棺墓から銅剣・素環頭刀子・鉄矛・鉄鉈・鉄剣・鉄刀等が出土している。一方、室見川左岸においては、吉武遺跡群で前期後半以降、非常に大規模な埋葬遺構群が形成され始めるとともに、前期末～中期初頭には青銅製武器・鏡・腕輪のほか、多量の玉類を所有する複数の木棺墓・甕棺墓がみられる。さらに南側段丘上に立地する浦江遺跡では、副葬品はもたないが、中期中頃に区画墓が築造される。また、白塔では人面を鋳出した銅戈が出土している。なお、早良平野の最南端部で弥生時代の埋葬遺構が確認され



第1図 調査地点の位置と周辺遺跡 (1/75,000)



第2図 事業地内調査区位置図1 (1/3,000) 一折込1-



第3図 事業地内調査区位置図2 (1/3,000)

ているのは、長峰遺跡の調査であり、中期中頃～末の甕棺墓が認められる。

早良平野における副葬品の在り方からみると、前期末～中期初頭の段階で多数の青銅器・装身具を所有する吉武遺跡群の埋葬遺構と、少量の青銅器のみが副葬される周辺遺跡（飯倉C・有田・野方久保・東入部・今回調査が行われた岸田遺跡）の埋葬遺構間には大きな格差が生じており、社会的な成熟が認められるが、中期後半以降の段階ではより突出した個人への権力の集中は認められず、隣接する福岡平野・糸島平野に比べて各集団の統合が緩やかな地域であったことをうかがうことができる。また、早良平野においては長峰・松木田遺跡を南限として、これより南側では散発的な遺構・遺物は認められるが、まとまった集落は確認されておらず、実質的な生活域の境界にあたる。なお、この傾向は古墳時代・古代にも続いており、安定して遺構・遺物がみられるようになるのは、中世前半代にはいつからである。

古墳時代の室見川流域における首長墳をみると、4世紀代には河口近くの左岸に五島山古墳（円墳）、右岸には藤崎遺跡の方形周溝墓群が確認されている。この後、前方後円墳である羽根戸南古墳群G-2号墳（全長26m）、G-3号墳（全長19.6m）が築かれ、ついで中流域右岸には平野最大の前方後円墳である拝塚古墳（全長75m・5世紀前半）がつくられる。また、これと対峙するように左岸地域では、帆立貝式の樋渡古墳（全長38m・5世紀中頃）が築かれた後、やや時間を置いて再び羽根戸古墳群F-2号墳（帆立貝式・全長16.3m）、終末期には巨石墳である夫婦塚1号墳・2号墳が造営される。これらの古墳の多くが、室見川左岸の台地上に立地することは注目に値する。後期になると、飯盛山山麓を中心とする長重丘陵および油山西麓上に多くの群集墳が形成される。これらの群集墳には、鑄造鉄斧、鉄製鍛冶具他の鉄器類、陶質土器等の渡来系遺物が副葬されるものもみられる。また、鉄滓供献から推定できるように、この時期には鉄生産も開始されたものと考えられている。

古代の早良平野は、行政区画として筑前国早良郡となり、「和名抄」によると七郷が知られる。また、大宰府を基点とした古代官道である西海道も設置されており、有田遺跡群では官道に近接して早良郡衙推定遺構群が確認されている。都地遺跡・都地泉水遺跡・吉武遺跡群・城田遺跡・金武青木A遺跡などでは大型建物のみならず、瓦・墨書土器・木簡等が出土するほか、周辺で多くの製錬炉・鍛冶炉が検出されている。製錬炉は市内でも有数のまとまりをもち、市内における奈良時代後半の鉄生産の中心地のひとつとして数えられるとともに、前後の時代を含めて鉄器生産が盛行したものと考えられる。

中世には現在も痕跡をとどめる条里地割に沿う大規模な水田開発が行われ、近現代につながる村落景観が形作られた。また、居館跡が都地遺跡・清末遺跡などで確認され、館城としては有田遺跡群の小田部城跡や都地域が知られている。山城としては油山の西端に荒平城跡、対峙する飯盛山には飯盛山城が築造されている。荒平城は15世紀代には文献にみえ、16世紀後半には小田部氏が城督となるが、1580年に龍造寺氏の侵攻により落城している。現在も郭外周には石垣が点在している。飯盛山城は築造年代が明らかではないが、近世地誌類によると戦国末には龍造寺の城となったことが記されている。なお飯盛山山頂からは永久2年（1114年）銘の瓦経が出土するほか、明治時代に出土した経筒の存在も知られている。



写真1 調査地点付近より北側をのぞむ（平成24年4月撮影）



写真2 調査地点付近より南側をのぞむ（平成21年5月撮影）



写真3 土地改良事業前（平成21年5月撮影）



写真4 土地改良事業後（平成24年4月撮影）



写真5
岸田遺跡第1次調査1区～3区全景（上空から）



写真6
岸田遺跡第1次調査4区全景（上空から）



写真7 岸田遺跡第1次調査着手前（南から）



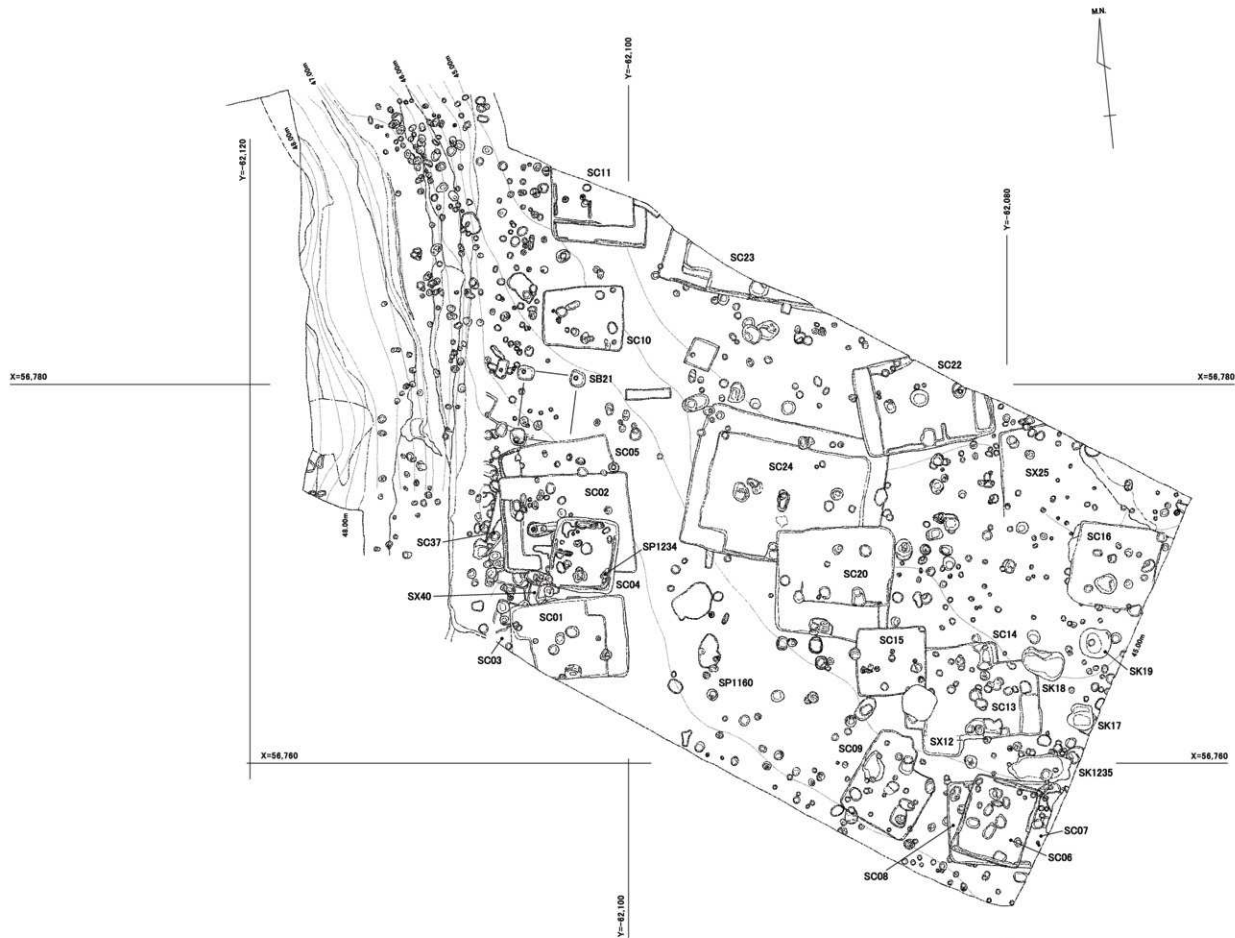
写真8 岸田遺跡第1次調査着手前（東から）



写真9 岸田遺跡第1次調査1区調査状況（北から）



写真10 岸田遺跡第1次調査4区検出遺構



第6图 1区上面全体图 (1/200) 一折込3-



第7图 1区下面全体图 (1/200) 一折込4-

II 岸田遺跡第1次調査1区の記録

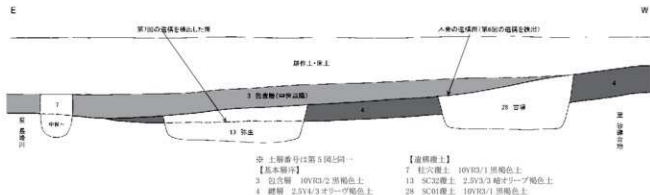
1 概要 (第4～7図・写真12～18)

岸田遺跡は、扇状地形が自然解析によって舌状に分離した砂礫台地、および、その前面にひろがる沖積扇状平野から構成される。遺跡北端では室見川が大きく蛇行し、砂礫台地もこれに向かって急激に落ち込んでいる。本書で報告する1次調査地点は、室見川に比較的近い、遺跡の北東端部に位置し、弥生時代の墓域(4区)は扇状地が台地化した砂礫台地上に、弥生時代から古墳時代の集落域(1・2・3・5区)は台地前面の沖積扇状地上に立地する。

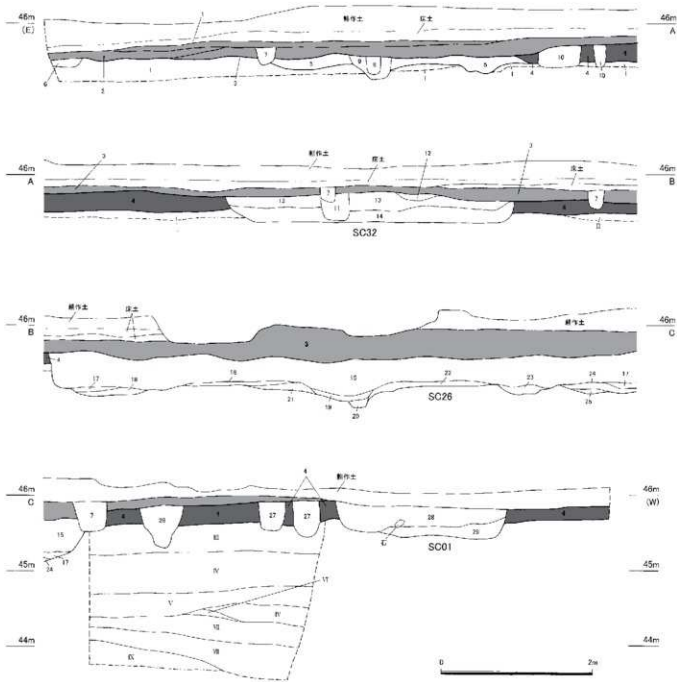
1区の現況は田で、現地表面の標高は46.05m～46.15mである。1区は、砂礫台地に近い西側と室見川に流れ込む長峰川に近い東側が高く、中央部が北に向かって低く傾斜する窪地状の低位部をなす地形となっている。このため、低位部には、地山とした灰白色シルト(第4・5図1層・以下土層番号は第4・5図参照)・にぶい黄色土(Ⅱ層)の上面に、オリーブ褐色土(4層)、さらにその上に遺物を包含する黒褐色土層(3層)が堆積していた。この黒褐色包含層には、輸入陶磁器等の中世に属する遺物がごく少量含まれる。したがって、遺構は、耕作土・床土(調査区中央の低位部ではさらに黒褐色包含層)を除去してあらわれる、灰白色シルト(1層)およびオリーブ褐色土(4層)の上面で検出される。遺構面の標高は44.75m～45.5mをはかる。

しかし、この面で検出した遺構のうち、弥生時代のものの覆土は4層に類似する暗オリーブ褐色系の土を主体としていたため、4層上面で明確に検出することができなかった。このため、弥生時代の遺構は、黒褐色土を覆土とする古墳時代の遺構を調査した後4層を除去し、地山(灰白色シルト(1層)・にぶい黄色土(Ⅱ層))を全面に露出させてから調査することとなった。したがって、本来の遺構面は1面であるにもかかわらず、実際には、古墳時代の遺構SC01～SX25を調査した「上面」と弥生時代の遺構SC26～SX40を調査した「下面」の2面を調査する結果となった(第6・7図)。また、土層観察の結果、黒褐色包含層(3層)上面から掘削される遺構を確認したが、黒褐色土(7層)を覆土とするため、包含層上面で面的に検出することはできず、古墳時代および弥生時代の遺構と同時に調査を行った。

1区では、弥生時代前期末から中期末、弥生時代終末期から古墳時代中期後半までの竪穴住居を中心とする集落遺構を検出した。弥生時代の竪穴住居群には、掘立柱建物に伴う可能性が高い。集落は、弥生時代後期および古墳時代前期後半に一時的に断絶するものの、①弥生時代前期末～中期末、②弥生時代終末期～前期前半、③古墳時代中期初頭～中期前半の3時期に集中して多くの住居が営まれたようである。とくに、②の時期に属する1区SC23・SC24および2区SC0201は、一辺7m×10mをはかる大型の住居で、3棟が主軸をそろえて整然と配置されており注目される。また、③の時期のSC



第4図 1区基本層序模式図



【基本層序】

- 1 包気層 2.0V/1 灰白色砂質土 (4-6層含む)
- 2 包気層 3V/1 灰白色砂質土 (4-6層含む)
- 3 包気層 10V/2 黒褐色土
- 4 網層 2.0V/3 オリーブ褐色土
- 5 4土層付層 2.0V/1 灰白色土 (2.0V/3 に近い黄白色土+1.2)
- I 地山 2.0V/4 黄白色土
- J 地山 2.0V/7 灰黄色土
- K 地山 2.0V/4 黄白色土 (小礫を多量に含む)
- IV 地山 2.0V/3 灰黄色土
- V 地山 2.0V/3 に近い黄白色土
- VI 地山 2.0V/7 灰黄色土 (小礫を多量に含む)
- VI 地山 2.0V/7 灰黄色土層
- VII 地山 2.0V/2 灰黄色土 (人頭大の礫を多量に含む)
- VIII 地山 2.0V/2 灰黄色土
- IX 地山 2.0V/4 黄白色砂質土-粘砂

【遺積層土】

- 7 柱穴層上 10V/3/1 灰白色土
- 8 柱穴層上 2.0V/4 黄白色土
- 9 柱穴層上 2.0V/1 黄白色土 (2.0V/3 に近い黄白色土+1.1)
- 10 柱穴層上 10V/3/1 灰白色土 (原状埋り)
- 11 柱穴層上 10V/2/2 灰黄色土
- 12 SC2層上 横土ブロック
- 13 SC2層上 2.0V/2 暗褐色土
- 14 SC2層上 2.0V/2 暗褐色土
- 15 SC2層上 2.0V/3 暗褐色土
- 16 SC2層上 10V/2/1 灰白色土 (原状埋れ多く含む)
- 17 SC2層上 2.0V/3 暗褐色土
- 18 SC2層上 2.0V/3 暗褐色土
- 19 SC2層上 2.0V/2 暗褐色土
- 20 SC2層上 2.0V/2 暗褐色土
- 21 SC2層上 2.0V/3 に近い黄白色土 (2.0V/2 暗褐色土ブロックが混じる)
- 22 SC2層上 2.0V/2 暗褐色土 (2.0V/4 に近い黄白色土ブロックが混じる)
- 23 SC2層上 2.0V/2 暗褐色土
- 24 SC2層上 2.0V/3 オリーブ褐色土 (2.0V/4 に近い黄白色土ブロックが混じる)
- 25 SC2層上 横土ブロック (2.0V/4 に近い黄白色土)
- 26 柱穴層上 2.0V/1 オリーブ褐色土
- 27 柱穴層上 2.0V/3 暗褐色土
- 28 SC1層上 10V/3/1 灰白色土
- 29 SC1層上 10V/3/1 灰白色土 (2.0V/4 黄白色土ブロックが混じる)

第5図 1区南壁土層図 (1/50)

04・SC20では、住居廃絶時に祭祀を行った痕跡が確認された。さらに、①・②の時期の遺構からは、吉備系の搬入土器（第32図7）および佐賀平野・有明海沿岸・豊前の各地の影響を受けた土器（第46図19・第49図1・第69図1）が出土している。

このほかに、1区では、古代・中世に属する柱穴・土坑等も検出したが、遺構のあり方は相対的に散漫である。

なお、本調査区では、弥生時代以降の調査の過程で、縄文時代早期・中期・後期・晩期を中心とする土器片や石器がごく少量出土した（写真86・87）。また、調査地点から長峰川を挟んで南東側に展開する松木田遺跡では、3次調査・4次調査1・2区において、弥生時代の遺構面のさらに下層から、縄文時代草創期・早期の遺構・包含層が検出されている。このため、本調査地点においても、縄文時代の遺構の有無を確認するために、調査区南壁西側にトレンチを設定した（Ⅲ層～Ⅸ層）。土層観察では、松木田遺跡4次調査1区で検出した包含層に類似するⅧ層が、縄文時代の包含層である可能性を中心に検討したが、人頭大以上の大きさの礫を多量に含んでおり遺物の出土もないことから、土石流による堆積物と判断し、1区では縄文時代の遺構・遺物はないと結論した。なお、Ⅸ層以下は10YR5/6黄褐色土～砂礫となり安定する。

2 遺構と遺物

（1）竪穴住居

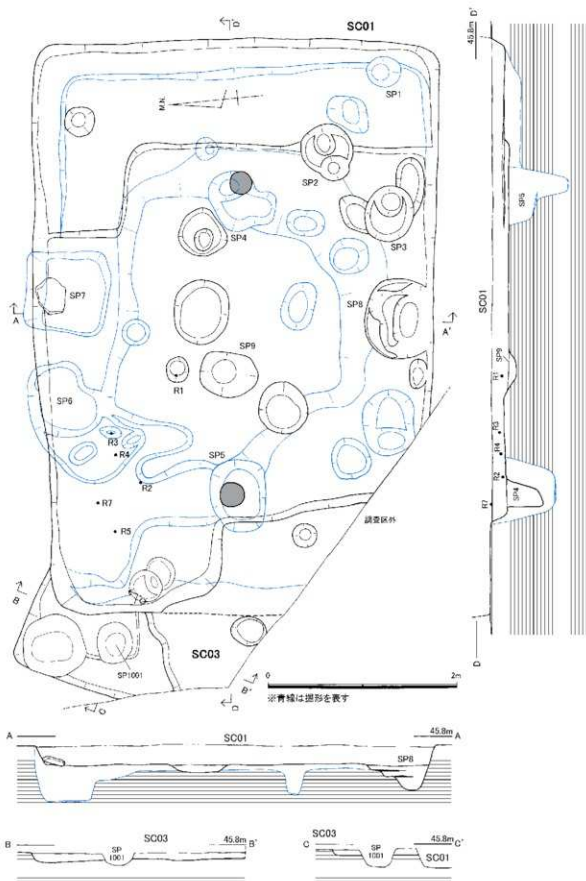
SC01（第8図・写真19・20）

調査区の南西隅に位置する竪穴住居で、SC03廃絶後に掘削されている。南西隅は調査区外へと続く。平面形は、主軸を東西方向（N-87°-W）にとる長方形をなし、長軸6.1m、短軸4.3mをはかる。標高45.65m～45.7mで検出したが、西側短辺の壁の南半分はすでに削平され消滅していた。主柱穴等の重複がみられないことから、建て替えはなかったと考えられる。覆土は、黒褐色土（10YR2/3）を主体とし、にぶい黄褐色土粒（10YR4/6）と木炭を含むものである。

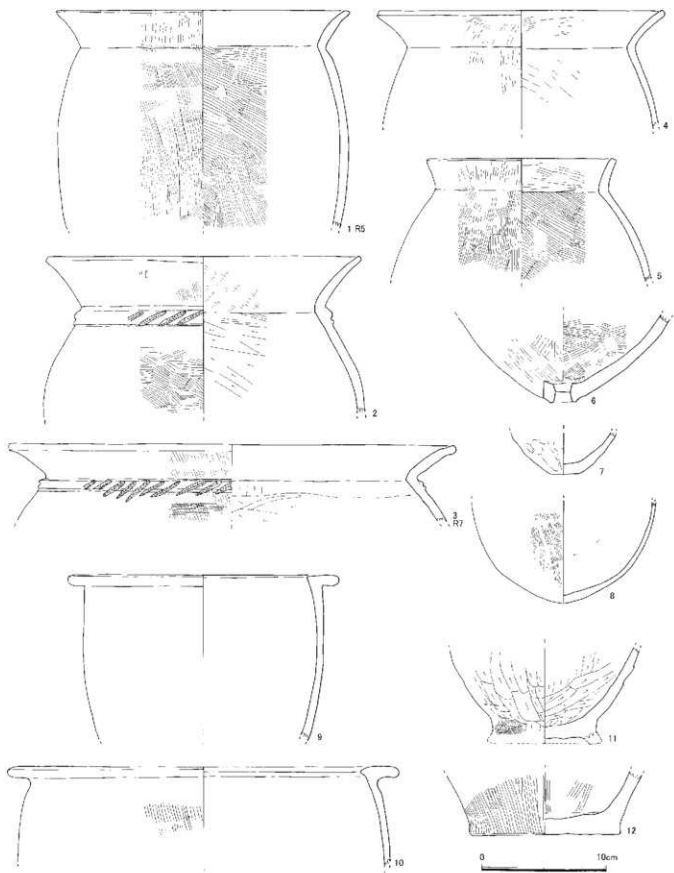
SC01は、両短辺側に、幅1m～1.2mをはかるベッド状遺構を有する。東側のベッド状遺構は、オリーブ褐色土（2.5YR4/2）と暗褐色土（10YR3/1）を1:1に含む混合土で形成されており、北東隅で折れ曲がりL字形となる。一方、台地に近い西側のベッド状遺構は短辺の半分程度の長さしかなく、にぶい黄色土の地山を削りだしたものとなっている。住居の掘形は、中央部が高く壁沿いが低い構造となっているため、床面は、褐色土粒（10YR4/6）を少量含む黒褐色土（10YR2/3）によって、中央部はうすく、壁沿いは厚く整えられている。検出面からベッド状遺構までの深さは、東側で約10cm、西側では削平されているため0cmで、検出面から貼床面までの深さは約18cmをはかる。ベッド状遺構と貼床面の比高差は大きいところで10cm程度である。

主柱穴は2本で、短辺側で検出したSP4とSP5である。柱間距離は芯間で3.3mをはかる。柱穴の平面形は不整形をなし、径は60cm～80cm、貼床上面からの深さは約60cm～70cmである。径25cmの柱痕跡が貼床上面でみとめられ、貼床・貼ベッド状遺構の除去後に柱穴掘形を確認した。このことから、主柱を建てた後に住居内の床やベッド状遺構を整えたと考えられる。

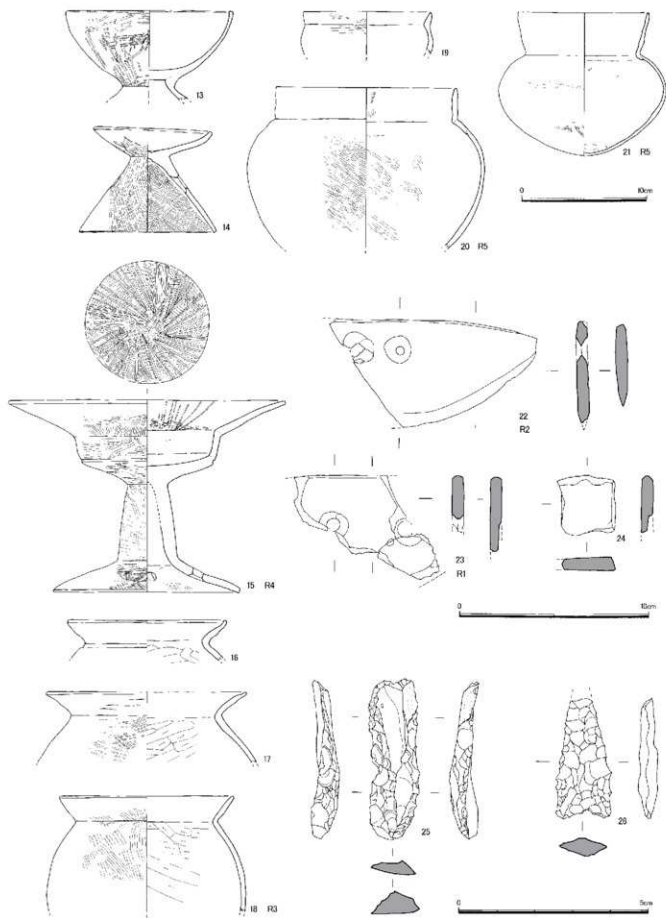
また、南側長辺中央部において、壁際土坑SP8を検出した。長軸85cm、短軸75cmの楕円形プランをなし、貼床上面からの深さは25cmをはかる。貼床上面からプランを確認できたことから、床を



第8図 SC01・03実測図(1/40)



第9図 SC01出土遺物実測図1 (1/3)



第10图 SC01出土遗物实测图2 (1/1·1/2·1/3)

はった後に掘削されたようである。

このほかに、主柱穴P4・P5の中間地点に、貼床上面から掘りこまれた径約55cm不整形の土坑SP9を検出した。貼床上面からの深さは15cm程度で、断面形はすり鉢状をなす。SP9も含めて、SC01内部において焼土や炭化物等の集積がみられなかったため、炉の存在を確認することはできなかった。

なお、貼床除去後に検出したSP6・SP7は弥生時代の遺構の可能性がある。

SC01では、第9・10図に示したR1(23)・R2(22)・R3(18)・R4(15)・R5(1・20・21)・R7(3)が、住居の北西側に集中して、ほぼ床面直上に近い状態で出土した。

R4(第10図15)やR5(第10図21)、最下層から出土した第10図16等の出土遺物から、SC01は弥生時代終末期から古墳時代前期初頃には廃絶した住居と考えられる。

SC01出土遺物(第9・10図)

出土した遺物の残存率は1/2以下がほとんどである。また、古墳時代の土師器は、内外面ともに浅黄橙色～にぶい褐色を呈し、胎土には径1～3mm程度の白色粒を含むものがほとんどである。壺と高杯には、甍に比べて、礫粒を含む量が少なく精良な印象をうけるものが多い。

1～6・8は土師器甕。1はR5、3はR7としてとりあげた。また、2・5・6・8は最下層から出土した。1は、内外面ともにハケ調整を主体とし、その後口縁部から頸部にかけて横ナデで仕上げている。内面には口縁部以外のところにコゲが、外面には口縁部と頸部の境界以外のところに煤が付着する。2・3は、胴部外面はハケ、胴部内面はケズリで、口縁部は横ナデで調整されている。頸部に貼りつけられた突帯の刻目は、ハケ調整工具によるものである。ともに、比較的胎土が精良である。4は全体的に磨滅が進んでいる。胴部内面の調整は、工具によるナデと思われる。5は内外面ともにハケ調整で仕上げられており、外面の胴部下側に煤が、内面には斑状にコゲが残っている。同様に、6も内外面ともにハケ調整。外面全体に煤が付着している。8の内面は不定方向にナデ調整されている。外面は著しく被熱しており、このため煤は消えかけて斑状に残り、円形に剥離した部分もある。

7はミニチュアの鉢。内面はナデで仕上げられ、底部付近に黒斑がのこる。

9・10・12は弥生土器の甕で、9・10は貼ベッドから出土した。9は内外面ともにナデ調整。11は、内外面を粗いケズリで仕上げた甕で、外底部は粘土接合面で剥離している。9・10・11の色調は、土師器と比べて橙色が強い。

13～15は土師器高杯。15はR4としてとりあげ、SP1と最下層から出土した破片と接合した。13の内面は磨滅により調整を観察できない。外面に黒斑がつく。14は、ほぼ完形で、脚部に2箇所穿孔を有する。全体にヘラミガキされるが、坏部の下端には下にハケ調整がみられる。坏部内面は磨滅しており調整は不明。15は、外面はヘラミガキ、坏部内面は磨滅しているものの、見込みはハケ調整の後に放射状に丁寧にヘラミガキがほどこされている。脚部内面はハケおよびナデ調整される。裾部の穿孔は2箇所しか残っていないが、もともとは5箇所あったと推測される。14・15の胎土は砂粒を含む精良なもので、橙色を呈する。

16～18は土師器甕である。16・17の胎土は在地系の土師器よりも精良である。16は最下層から出土した。16の口縁部内面はわずかに沈線状となる。全体に磨滅がすすんでいるが、胴部外面にはハケの痕跡がみられ、煤の付着がみられる。17は庄内系の甕で、口縁部外面にもタタキの痕跡がのこり、その後丁寧に横ナデ調整されている。18はR3としてとりあげたもので、口縁内面の一部に黒斑が、胴部外面に煤が付着している。

19～21は丸底壺で、20・21はR5としてまとめてとりあげた。19は内面ナデ、外面工具ナデで仕上げられている。20は全体に磨滅しているが内外面ともにハケ調整が観察でき、外面には煤が付着し

ている。21は、内外面ともに、ハケ調整の後不定方向のナデで仕上げられている。ナデの状況から、底部とその他の部分では工具が異なるようである。外面の胴部下半に大きく黒斑がつく。

22はR2、23はR1としてとりあげた石庖丁である。22は安山岩製、23は粘板岩製か。24は3面に磨いた痕跡のある工具で、粘板岩製とおもわれる。石庖丁の可能性も考えられる。

25は、加工痕のある黒曜石剥片で、両側に使用した痕跡も認められる。漆黒を呈するが、風化が進んでいる。縄文時代の古い段階に属すると考えられる。重量は2.83g。26は、灰白色を呈するチャート製の鎌で、縄文時代草創期から早期の所産である。全長は4cm弱であったと推測される。先端を欠損するが、重量は2.14gをはかる。

SC03 (第8図)

SC01の西側に位置する堅穴住居で、東側の大半がSC01によってきられ、南側の大半は調査区外へと続く。東西辺1.1m以上、南北辺1.3m以上の平面方形をなし、主軸をSC01と同じ東西方向と考えると62°西偏する。標高45.7m～45.75mで検出した。覆土は、にぶい黄褐色土(10YR4/3)から暗褐色土(10YR2/3)を主体とする。検出した範囲が限定されるため、主柱穴をはじめとする住居内の施設を確認することはできなかった。一方、北端は南側に比較して若干高くなっており、この部分がベッド状遺構であった可能性も考えられる。

SC03からは、時期や器形がわかる遺物がほとんど出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、古墳時代初頭には廃絶していたSC01にきられることや、出土遺物に土師器片を含むことから、SC03は弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構である可能性が高い。

SC03出土遺物

土師器・弥生土器の小片と黒曜石剥片がごく少量出土した。

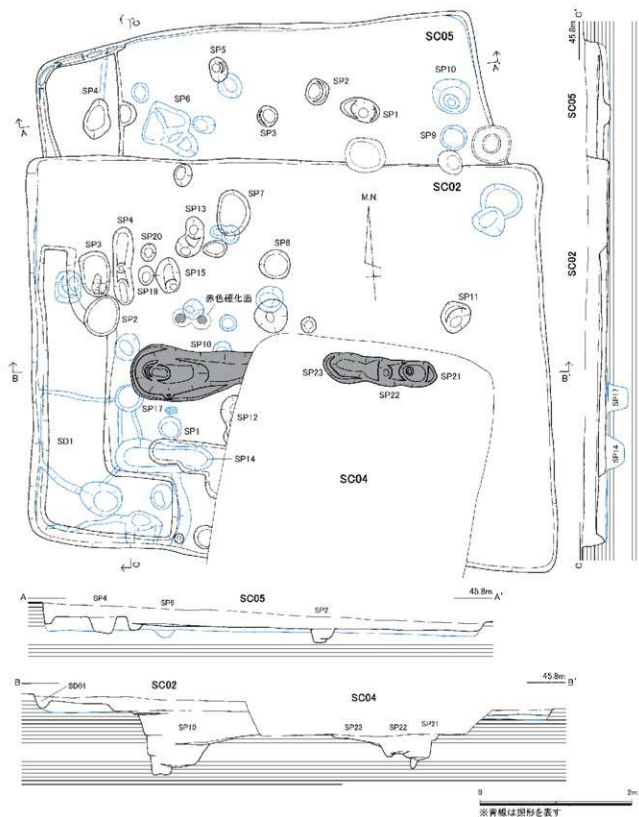
SC02 (第11図・写真21)

調査区南西部に位置する堅穴住居で、SC05廃絶後に掘削され、南側中央部をSC04にきられる。平面形は、主軸を東西方向(N-86°-W)にとる長方形をなし、長軸6.8m、短軸5.3mをはかる。検出面は西側で45.7m、東側で45.45mと東側が低くなっており、削平をうけて全体の遺存状況は悪い。SC02は、ベッド状遺構を検出するまでSC04・05との切りあい不明瞭であった。このため、ベッド状遺構検出面より上を「上層」、それより下を「最下層」と区分して遺物をとりあげた。覆土は、上層では黒褐色土(10YR2/2)、最下層ではにぶい黄褐色土(10YR4/2)を主体とし、床面直上ではにぶい黄褐色土ブロックを含むものとなる。

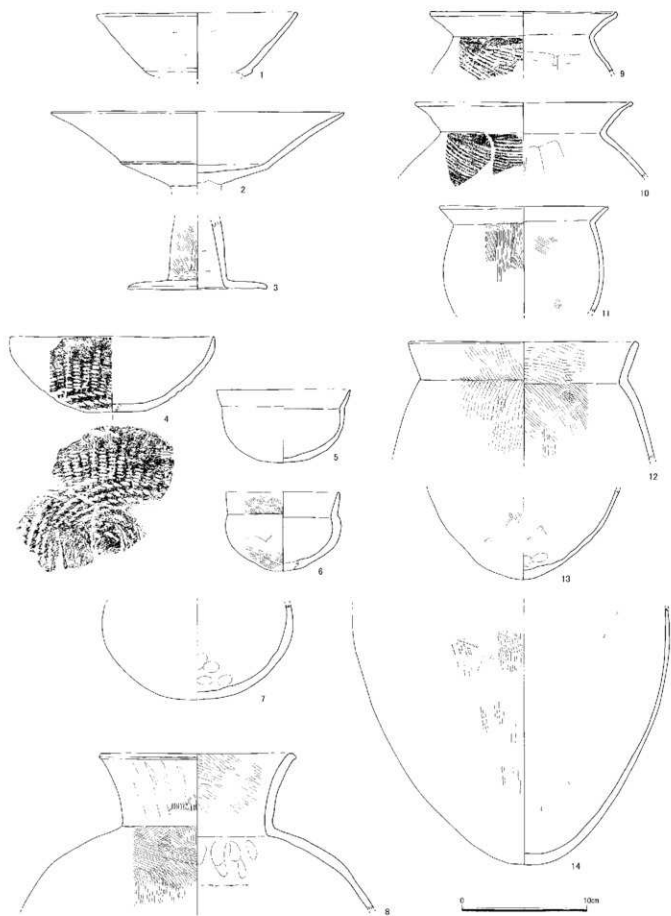
西側の短辺で、明黄褐色土と黒褐色土を2:1に含む混合土によって形成された、幅75cmのベッド状遺構を検出した。平面は、南西隅で折れ曲がりL字状となる。一方、東側の短辺ではベッド状遺構を検出できなかった。削平によるものと考えられる。また、西側短辺のベッド状遺構に沿うように、幅20cm、ベッド状遺構上面からの深さ10cmをはかる壁溝を確認した。床面は、南側と東側を中心に、黒褐色土粒を含む黄褐色土を貼って整えている。検出面からベッド状遺構までの深さは10cmで、検出面から貼床面までの深さは10cm～25cm程度、ベッド状遺構と貼床面の比高差は最大15cmをはかる。

主柱穴は2本検出した。楕円形の堀形をもつSP10とSP21～23である。後者の柱穴は1つの遺構と考えたが、SP22とSP23を建て替え時の柱痕跡と考え、3つの遺構番号をとった。しかし、SP22とSP23の新旧関係はわからなかった。柱間距離はSP21との芯間でも3.35mをはかる。堀形の長軸は1.65m以上、貼床上面からの深さは約35cm～85cmである。貼床上面から堀形を確認できたことや、堀形が楕円形であるこ

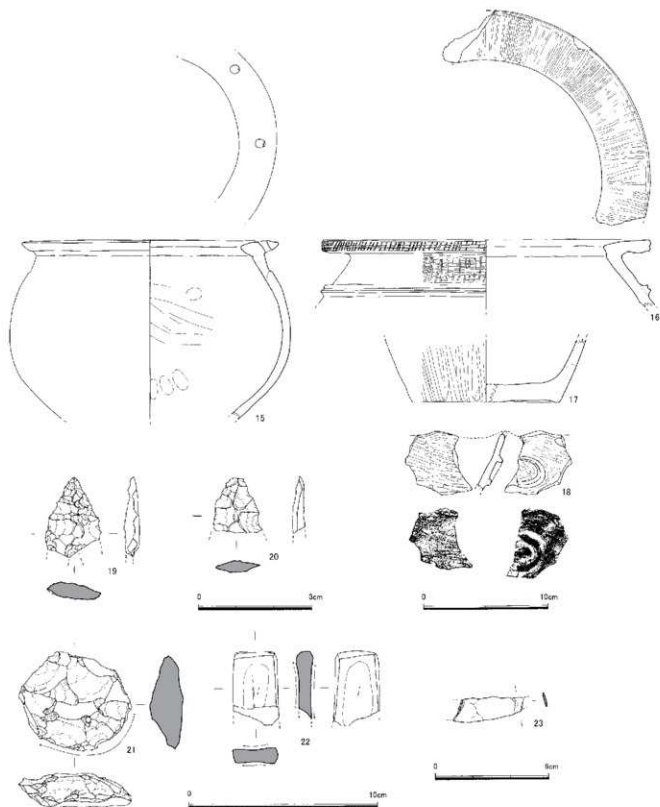
とから、住居廃絶時に柱を抜き取った可能性がある。また、SP10の北側で、径25cmをはかる円形の赤色硬化面を2箇所確認している。この硬化面は中心部が黒色に変色していた。炭化物等の集積はみられなかった。



第11図 SC02・05実測図 (1/50)



第12图 SC02出土遗物实测图1(1/3)



第13図 SC02出土遺物実測図2 (1/1・1/2・1/3)

SC02では、多くの遺物が住居の西側から出土したが、SC04・05との切りあい不明瞭であったため、最下層から出土したもの以外は、SC04・05に所属するものの混入が想定される。したがって、最下層から出土した第12図1や床面付近で出土した2・13、SP3から出土した第12図14等の出土遺物から、SC02は弥

生時代終末期から古墳時代前期初頭には廃絶した住居と考えられる。なお、これらの遺物には、上層と最下層から出土した片が接合するものが含まれることから（第12図1・4）、SC02は比較的短時間に埋没した可能性が高い。

SC02出土遺物（第12・13図）

出土した遺物の残存率はほとんどが1/2以下で、残りは悪い。また、出土した土師器の胎土や色調は、SC01と同様の傾向にある。

1～3は高杯である。ともに1は最下層から出土し、全体に磨滅が進んでいる。1の内外面にはわずかに横方向の研磨のような痕跡がみられる。胎土は2よりやや精良。3は、脚部下端の形態から古墳時代中期までだとおもわれる。

4は外面にのみ龍目を有する土師器の鉢である。口縁端部は水平ではない。内面は不定方向のナデで調整される。4の型となった龍は、基本的にはヨコ（芯）材に対してタテ（巻き付け）材が狭く、底部から体部への立ち上がりにかけては巻き上げるように編まれていることが特徴である。籠目土器の底部は網代網で編まれることが多いようであるが、4は、渦巻状にした芯（ヨコ）材を、比較的細い巻き付け材でらせん状に巻いていく編み方（「コイリング」）をしているようにみえる（鳥取県埋蔵文化財センター2005『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1木製容器・かご』）。ただし、「コイリング」では、芯材を2本ずつ巻き付け材で巻くのに対し、4の底部および体部への立ち上がりを観察すると、巻き付け材は芯材を2本ずつ巻いているようにはみられない。このため、タテ材とヨコ材の交差部分を巻き付け材でとめる「ヨコ添えもじり編み」の方法も使用しているのかもしれない。一方、体部は、底部とは編み方が変化し、ヨコ材に対して常にタテ材が直行して凹面を形成し、ヨコ材の送りが見られない。このことからことから、ヨコ材を巻き付け材で表裏から挟んでとめていく編布の手法（「もじり編み」）（東海大学校地内遺跡調査団・東海大学文学部文化活動委員会2007『第15回足もとに眠る歴史展 編みと織りの考古学』）が使用されているように推測される。

5～8は壺である。5は磨滅が著しく調整が観察できない。外面の口縁部から胴部にかけてうすい黒斑が残っている。6は、外面をハケと工具ナデで調整し、内面を不定方向のナデまたはミガキで仕上げている。7は、内外面ともに磨滅が進んでいるが、底部外面にわずかにケズリの痕跡がみられる。8は、内外面ともにハケ調整され、口縁部外面はその後丁寧に横ナデされる。胴部外面に黒斑がつく。

9・10は庄内系の甕で、ともに焼成はあまいもの、胎土は他の土師器に比べて礫粒ではなく砂粒を含んでおり精良である。内外面ともに灰白褐色を呈する。10の外面には黒斑がみられる。9・10は、SC01で出土した庄内系の甕（第10図17）よりも古い。

11～14は在地系の甕。12は最下層で出土し、14はSP3の底面でつぶれた状態で出土したものである。11の外面には煤が付着している。13・14はともに磨滅が著しく、調整の観察は難しい。内面に工具ナデまたはハケの痕跡がわずかに残る。

15～17は弥生土器である。色調は、土師器に比べてやや橙色が強い。15は、口縁端部に穿孔を有する壺で、住居東側の最下層から出土した。磨滅が著しく外面の調整は不明であるが、内面は指オサエと細かい条線の入る工具ナデで調整される。16は壺で、内面は磨滅しているが、外面は丹塗りされ、丁寧な暗文とヘラミガキが観察できる。17は甕の底部か、外面全体に黒斑がみられ、内面はナデ調整され、一部コゲが残っている。

18は貼床から出土した縄文土器の鉢である。小片のため傾きには不安が残る。胎土は精良で、内外面ともに黒化しており丁寧に磨かれている。同様に、粘土紐を貼りつけて渦巻状に装飾する鉢は、大原D遺跡3次調査8-4区でも、河川SD01から後期後半から晩期前半の土器とともに出土している。

19は漆黒曜石製の鎌で、両側面の下半部が鋸歯状を呈するタイプと考えられる。縄文時代中期末から後期の所産である。両脚を欠損するが、重量は0.82gをはかる。20は、縄文時代に属する古銅輝石安山岩製の鎌で、残存部分のみで重量は0.47g。21は古銅輝石安産岩製の搔器で、下半部を刃部として使用している。縄文時代のもつと推測される。重量は55.33gをはかる。22は目の細かい砥石で、2面を使用している。凝灰岩製の。

23は鍛造の刀子である。錆化が進み大半が空洞化しているが、一部層状に剥離する部分が残る。

SC05 (第11図・写真21)

SC02の北側に位置する竪穴住居で、南側の大半がSC02によってきられており、住居内の構造等はわからない。東西辺1.8m以上、南北辺5.8mをはかる平面方形をなし、主軸をSC02と同じ東西方向と考えると94°西偏する。標高45.75m～45.8mで検出した。SC02で述べたように、SC05は、ベッド状遺構を検出するまではSC02との切りあいが不明瞭であった。このため、ベッド状遺構検出面より上を「上層」、それより下を「最下層」と区分して遺物をとりあげた。覆土は、上層ではオリーブ黒色(5Y3/1)、最下層ではにぶい黄褐色土(10YR4/2)を主体とし、床面直上ではにぶい黄褐色土ブロックを含むものとなる。

住居西側の壁際で、黄褐色土(2.5Y5/6)と灰褐色土(10YR4/2)を1:1に含む混合土から成る、幅1.1mのベッド状遺構を検出した。SC02と同様に、東側の壁際では確認できなかった。また、西側のベッド状遺構には壁溝が掘削されていた。壁溝の幅は15cm、ベッド状遺構上面からの深さは5cmをはかる。床面は、SC02とほぼ同じ黒褐色土粒を含む黄褐色土を貼って整えられている。検出面からベッド状遺構までの深さは20cm、検出面から貼床面までの深さは13cm～30cmで、ベッド状遺構と貼床面の比高差は最大10cmである。

SC05からは、時期や器形がわかる遺物がほとんど出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、古墳時代初頭には廃絶していたSC02にきられることや、出土遺物に土師器片を含むことから、SC05は弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構である可能性が高い。

SC05出土遺物

突帯文土器・弥生土器・土師器の小片と黒曜石剥片が出土した。

SC04 (第14図・写真21～24)

SC02廃絶後に、南部を破壊して掘削された竪穴住居である。平面形は、南北辺が若干大きい略正方形をなす。主軸を南北方向とする17°東偏し、長辺4m、短辺3.4mをはかる。標高45.65m～45.5mで検出し、検出面から床面まで、深さ35cm～45cm程度残存していた。SC02との切りあいは、検出面から10cm程度掘削した時点で判明し、これより上を上層、これより下を下層として遺物を区別した。覆土は、上層はSC02と類似する黒褐色土(10YR2/2)、下層はにぶい黄褐色土(10YR4/3)に黄褐色土(10YR5/6)をブロック状に含むもので、床面に近くなると黄褐色土が主体となる。

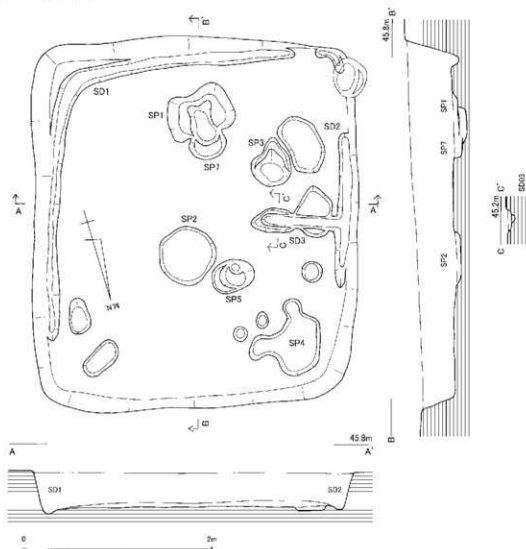
検出面から20cm程度掘削したところで、住居の中央部を中心に、木炭粒を非常に多く含む黒褐色土(7.5YR3/1)が検出されはじめ、さらに掘り進めると格子状に木炭塊が出土した(写真24)。建築材が焼け落ちた痕跡と考えられる。第15・16図の2・3・4・6・7・8・10に示した土器群は、この面から若干浮いた状態でまとまって出土した。

この焼失した建築材を検出した面では、壁際にめぐる壁溝SD1・2を検出した。このため、この面が床面である可能性を想定したが、SD1・2以外の遺構を確認することができず、また、他の住居の貼床と比べて

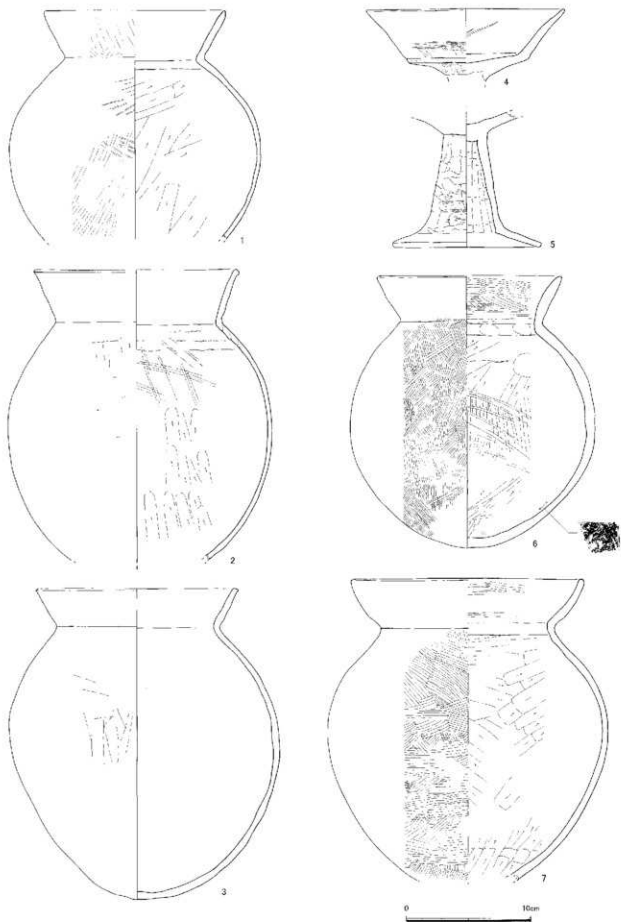
土の状況が覆土に近いもののように観察されたため、床面とは認定せず、さらに掘削したところ、SD3のほかSP5などの柱穴や浅いくぼみ状の遺構を検出した。したがって、焼失した建築材を検出した面が貼床上面であった可能性も残されているが、SC04は貼床のない住居であり、住居が廃絶して床面がある程度埋没してから火をうけて、第15・16図に示した土器群が投棄されたと考えておきたい。このような住居廃絶時の問題については、宮内克己氏により、このような現象が住居廃絶祭祀・儀礼であった可能性が指摘されており、「(5) 小結 (p. 101)」で後述する(宮内克己2004「竪穴住居の廃絶」『九州考古学』79号)。なお、第15図2・3・6・7の土器は、上層から出土した片とも接合しており、火をうけた後は短時間のうちに埋没したものと推測される。

焼けた建築材を検出した面で確認したSD1・SD2は、幅15cm～25cm、床面からの深さ5cm～10cmをはかる。SC04の床面で検出した遺構は、SP5をのぞいて、すべて浅いくぼみ状のものであり、主柱穴や壁際土坑と認められる遺構を確認することはできなかった。このうち、SP2は住居中央部に配置されていることから、炉である可能性も考えられるが、焼土や木炭等の集積はみられなかった。なお、SP5の住居床面から遺構底面までの深さは52cmである。

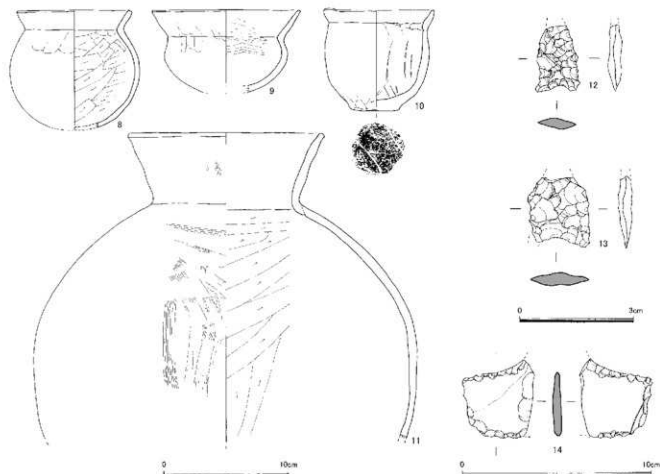
第15・16図の2・3・4・6・7・8・10等の出土遺物から、SC04は古墳時代中期初頭にはすでに廃絶していた住居と考えられる。



第14図 SC04実測図 (1/40)



第15图 SC04出土物実測図1(1/3)



第16図 SC04出土遺物実測図2 (1/1・1/2・1/3)

SC04出土遺物 (第15・16図)

出土した遺物の残存率は1/2以下のものが多いが、ほぼ完形のものもあり、古墳時代前期初頭の住居から出土したものより遺存状況は良好である。また、出土した土師器の多くは、古墳時代前期初頭の土器と同じような胎土・色調を呈するが、一部橙色味または褐色味が強いものや胎土に赤褐色粒を多く含むものもみられる。壺と高杯についても、古墳時代前期初頭のものと同様の状況である。

1～3・6・7は土師器甕である。使用痕が比較的明瞭に残っている。2・3・6・7は火災痕跡検出面から若干浮いた状態でまとまって出土した。1は磨滅がすすんでいて調整が不明瞭であるが、外面は粗くハケ調整される。外面の胴部下半には煤が、内面の口縁端部および胴部中位にコゲが残っている。2は、外面の胴部上半を縦方向および横方向の工具ナデ、胴部下半をナデで調整する。内面の胴部上半には粘土の接合痕がはっきり残っており、一部外面にもみられ、つくりが粗い印象である。外面全体に煤が付着し、内面の胴部下半にはコゲがみられる。3・6はほぼ完形に近い状態で遺存している。3は、磨滅が顕著で調整の観察が難しい。わずかに残る痕跡から、外面は細かい条線のハケ、内面はケズリで調整されていることがうかがえる。外面の胴部下半には磨滅により斑状に煤が残っている。6は、内面をヘラケズリした後に工具によりナデしている。内面は使用により全体的に黒化しており、外面は、熱が集中した底部をのぞいて、全体に煤の付着がみられる。7は、外面ハケ調整、内面はヘラケズリされている。同様に使用痕跡が残っており、内面胴部中位以下にコゲが、外面胴部中位と口縁部外面に煤が残っている。

4は高杯坏部である。磨滅しており観察しづらいが、調整は、外面がハケ調整の後工具によるナデ、

内面が工具によるナデとおもわれる。口縁部外面に黒斑がつく。胎土は礫粒をほとんど含まず、精良である。5は、高杯脚部である。外面を指オサエの後工具によるナデ、内面をヘラケズリで仕上げている。

8・9・11は壺である。8は火災痕跡検出面より上層でまとまって出土したもので、外面は磨滅により調整が観察できない。橙色を呈する。9も磨滅が進んでいるが、外面の胴部下半にはケズリの痕跡がみられる。外器面には左上方向にしわがよってあり、時計回りに粘土を巻き上げて製作したと考えられる。口縁部の内外面と胴部外面に黒斑が残る。11は布留系の壺で、外面はハケ、内面はヘラケズリ、口縁部は横ナデで調整されている。

10はほぼ方形の鉢。外底部に葉脈の痕跡が観察できる。外面は、縦方向および横方向にナデしており、凹凸がある。内面は、底部から胴部にかけては工具ナデで仕上げられているが、口縁へつづく胴部上半では粘土の接合痕がみられ、粗いつくりとなっている。外面には、幅5cmの黒斑が口縁から底部にわたって残っており、横倒して焼成されたことがわかる。

12は漆黒黒曜石製の鐮である。先端が欠損するが、全長は2cm程度であろう。重量は0.55gをはかる。縄文時代早期のものか。13も漆黒黒曜石製の鐮で、先端と片方の脚部を欠損している。両側線の直線部分は顕著な鋸歯状とはならないものの、有歯鐮に類似する形態をなす。縄文時代中期末から後期のものである可能性が高い。重量は0.99gである。14は古銅輝石安山岩製の打製石器で、削器か。

SC06 (第17図・写真25・26)

調査区の南東隅に位置する竪穴住居で、SC07・08廃絶後に掘削されている。平面形は、南北辺が若干大きい略正方形をなす。主軸を南北方向とすると28°東偏し、長辺3.7m、短軸4.3mをはかる。標高45.1m～45.4mで検出し、検出面から床面まで深さ20cm～40cm程度残存していた。SC07・08との切りあいは、検出面から25cm程度掘削した時点で判明したため、これより上を上層、これより下を下層として遺物を区別した。覆土は、黒褐色土(10YR2/2)に灰黄色土(2.5Y7/2)を少量含むものを主体とする。

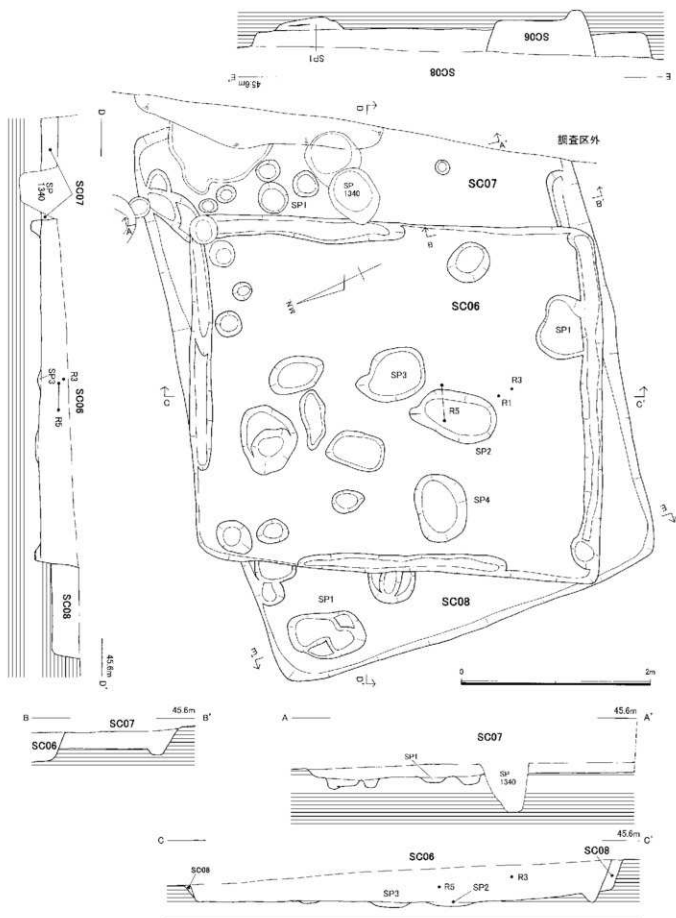
SC04と同様に、SC06の壁際には壁溝がめぐる。壁溝は、覆土下層掘削中から一部を検出しており、床面埋没後も壁の構造が残っていたことがうかがえる。壁溝の幅は15cm～25cm、床面からの深さは3cm～15cmをはかり、一部深くなる場所もみられる。一方、壁溝以外の遺構は、浅いくぼみ状のものばかりで、すべて床面で検出した。これらのうちに、主柱穴や炉、壁際土坑等と認められる遺構を確認することはできなかった。とくに、SP3は住居中央部に位置しているが、周辺や覆土に焼土や炭化物はみられなかった。以上のことから、SC06は、平面形・規模・主軸方位だけでなく、構造もSC04に類似しているといえる。

遺物は、下層から、第19図に示したR1(16)・R3(17)・R5(14・15)が、床面から20cm～25cm程度浮いた状態でまとまって出土した。また、第18図2・6は上層から出土した片と下層から出土した片が接合している。これらのことから、SC06は住居廃絶後に床面が20cm程度埋没してから、R1・R3・R5等の土器がまとまって投棄され、その後は比較的短時間に埋没していったと推測できる。

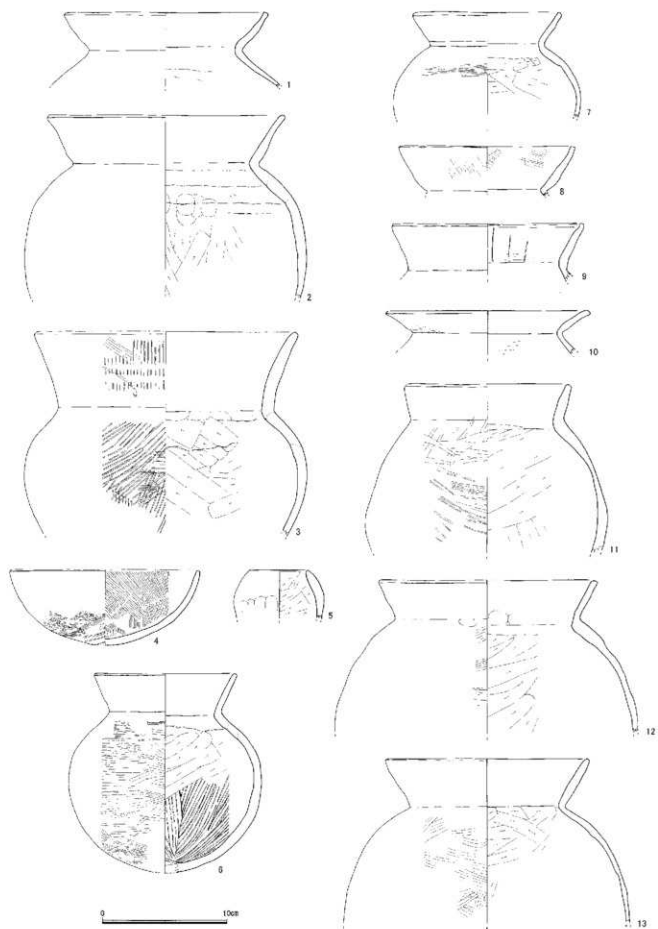
第19図に示したR5(14・15)等の出土遺物から、SC06は古墳時代中期前半にはすでに廃絶していた住居と考えられる。

SC06～SC08出土遺物 (第18・19図)

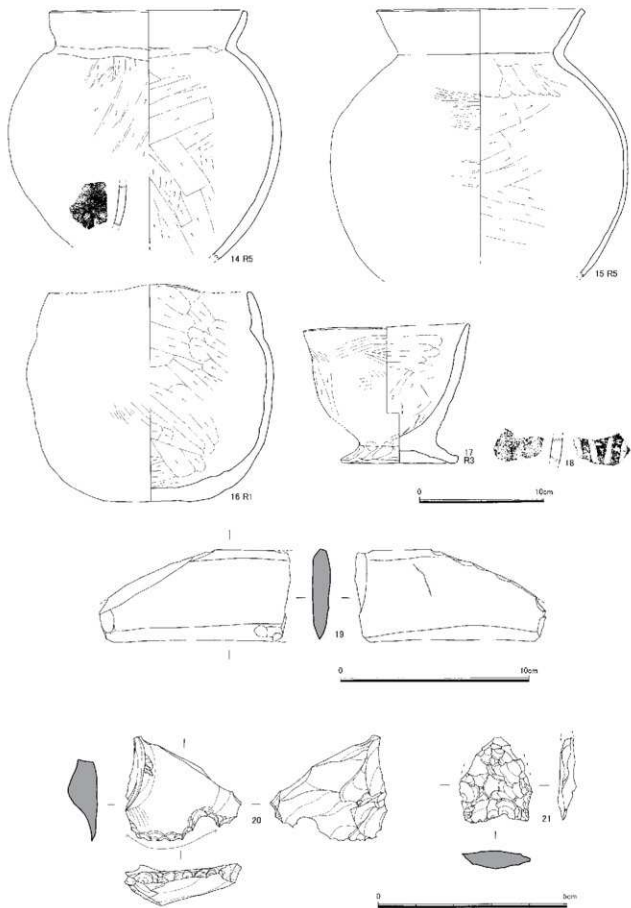
出土した遺物の残存率は1/2以下のものが多いが、古墳時代中期前半に属するものは、遺存状況が比較的良好である。また、これらの土器の胎土や色調は、SC04と同様の傾向にある。



第17図 SC06・07・08実測図(1/40)



第18図 SC06・07・08出土遺物実測図1(1/3)



第19図 SC06・07・08出土遺物実測図2 (1/1・1/2・1/3)

1～6・13・21は、SC07・08との新旧関係が判然としない上層から出土した。したがって、SC07・08に所属するものの混入が想定される。

1～3・13は土師器甕で、1は古墳時代前期、2・3は古墳時代中期前半に属する。1は磨滅が著しく調整が観察できない。内面の胴部上半にはかろうじてケズリの痕跡がみられる。2は、外面をナデ、内面をヘラケズリで仕上げている。内面の胴部上半は、指オサエされているものの、粘土の接合痕が明瞭にみられ、つくりが粗い。内面の胴部中位には輪状にコゲが、外面も全体的に煤が付着しており、外面の一部は被熱により赤変している。同様に、3も使用痕跡が顕著で、外面全体に煤、内面胴部にはコゲの付着がみられる。3の外面は、粗いハケの後に口縁部～頸部にかけて横ナデしており、一部ハケがナデ消されている。内面は、口縁部は丁寧なナデ、胴部はケズリで調整されるが、胴部上半は粘土の接合痕が残っている。3はやや橙色味の強い色調を呈する。13は磨滅が進んでおり全体的に調整が不明瞭であるが、外面はハケ調整の後口縁部～胴部上半を横ナデ、内面はヘラケズリしているようである。外面の胴部上半には黒斑、外面胴部下半には煤の付着がみられる。全体の約2/3遺存する。

4は全体の2/3程度残る鉢。外面は、上半をナデ、下半を条線の細かい工具によるナデで仕上げている。底部外面にはうすい黒斑がついている。2・3の甕よりも古く、古墳時代前期に属するとみられる。5はミニチュアの鉢で外面は指オサエとナデ調整である。

6は壺。全体の2/3程度遺存し、橙色を呈する。外面胴部に黒斑が残っており、その上から煤も付着している。内面を、胴部下半は条線の細かい工具によるナデで、胴部上半はヘラケズリで、口縁部は横ナデで調整している。

21は漆黒黒曜石製の鎌である。全長2.3cm、重量は1.69gをはかる。古い加工痕と新しい加工痕が共存している。大きさや重量から、縄文時代早期の大形鎌を弥生時代前期に再加工し、鎌に仕立てたものと考えられる。このため、刃部が厚い鎌となっている。

7～12・14～17・19・20は、SC06下層以下から出土した。

7～12は土師器甕。10は、形態的に他の土師器甕に比べて古い様相をもっている。7は、外面ナデ、内面ヘラケズリ、口縁部横ナデ調整されている。外面には、全体に黒斑がつき、胴部上半には、布留甕の文様を模したように横位のハケがめぐる。8は内外面ともにハケ調整後、横方向のナデで仕上げられている。9は、全体にナデ調整されているが、内面のみ工具の痕跡が残る。内面は焼成が良くなかったせいゝ黒色を呈し、外面には煤が付着している。同様に、10も全体にナデ調整、その下に工具によるナデの痕跡がみられる。11は、内面をヘラケズリ、外面をタキで調整しているが、外面胴部上半はタキの後に工具を使って横方向にナデしている。外面の胴部下半には煤の付着がみられ、胴部上半は被熱により赤変している。12は、磨滅が進んでおり、外面の調整は不明瞭である。タキの後にハケ調整しているとおもわれる。内面は、ヘラケズリ。内面の胴部下半には斑状にコゲが、外面の胴部中位には煤が付着しており、胴部上半から口縁部にかけては熱をうけて赤く変色している。

14・15はR5としてまとめてとりあげた土師器甕である。14は、外面を粗い条線が残る工具によるナデ、内面をヘラケズリで仕上げている。内面胴部下半にはモミの圧痕が残っていた。外面は全体的に煤が付着し、とくに胴部下半は強い熱をうけて器壁が赤変している。内面の胴部上半と外面の胴部下半の一部には黒斑がみられる。15は、外面の磨滅が進んでいるが、ハケ調整であろう。内面はヘラケズリで、胴部上半のみ指ナデされる。胴部中位から下半には、内面にコゲ、外面に煤の付着がみられる。

16はR1としてとりあげた鉢である。口縁部の欠損をのぞけばほぼ完形に近い。外面は、一部工具も使用しながらナデ調整されているが凹凸が著しい。また、胴部中位には黒斑がつき、胴部下半は

被熱のために一部器壁が円形に剥離している。内面には、ケズリのような粗い工具ナデがみられ、外面同様、器壁は平滑でない。口縁部は一部しか残っていないが、おそらく波打っていて水平ではなかったと推測される。胎土や色調は他の土師器とかわりはない。17は脚付の鉢。R3としてとりあげた。全体の2/3程度遺存している。外面は、ハケ調整の後、胴部下半のみケズリのような粗い工具ナデがみられる。内面は、工具によるナデの後、口縁部のみ幅の広い工具で磨かれている。脚部は指によって粗く整形されたままになっており、坏部も16ほどではないが、器壁に凹凸がある。内面は火の回りが良くなかったためか全面黒褐色で、外面は褐色を呈する。

19は下層から出土した粘板岩製の石鎌である。磨滅が著しく層状に剥離しかけている。刃部の幅が一定でないのは砥ぎ直しのためと考えられる。20は漆黒黒曜石製の剥片である。削器として使用されたものか。重量は5.46gをはかる。

SC07・08 (第17図・写真25・26)

SC06に住居の大半を占める竪穴住居である。このため、住居内の構造等はよくわからない。SC06で述べたように、SC06・07・08は、検出時に切りあいが不明瞭であったため、1つの遺構として掘削をはじめ、検出面から25cm程度掘り下げた後に新旧関係を明らかにできた。

SC07は、南北辺4.5m、東西辺3.2m以上の方形をなす住居である。標高45.05m～45.5mで検出し、検出面から床面までの深さは10cm～20cmをはかる。住居の南辺には幅25cm、床面からの深さ5cmの壁溝を有する。一方、SC08も、南北辺4.35m、東西辺3.5m以上の方形をなす住居である。標高45.3m～45.4mで検出し、検出面から床面までは15cm～20cm残存している。

SC07・08の覆土は、黒褐色土(2.5Y3/1)に黄灰色土(2.5Y7/2)を多く含むものを主体とする。また、ともに、床面で浅くぼみ状の遺構を検出しただけで、住居内にベッド状遺構や貼床、炉等は確認できず、遺物がまとまって出土することもなかった。

調査時は、SC06を挟んで西側と東側で異なる住居としてSC07・08と捉えたが、東西辺を同一方向(N-84°-W)にそろえていること、床面の標高が45m～45.1mと大きく変わらないこと、覆土も類似すること等から、同一の住居であった可能性も考えられる。SC07・08を同一の住居と考えると、短軸4.5m、長軸6mをはかる長方形の住居ということになる。同じような規模の長方形の住居は、調査区内ではSC01・02・13等を検出したが、SC07・08ではこれらの住居にあるベッド状遺構を確認できなかった。また、SC07・08は、SC06掘削前に廃絶していたことは確実であるが、出土遺物が少なく廃絶時期の詳細は限定できない。

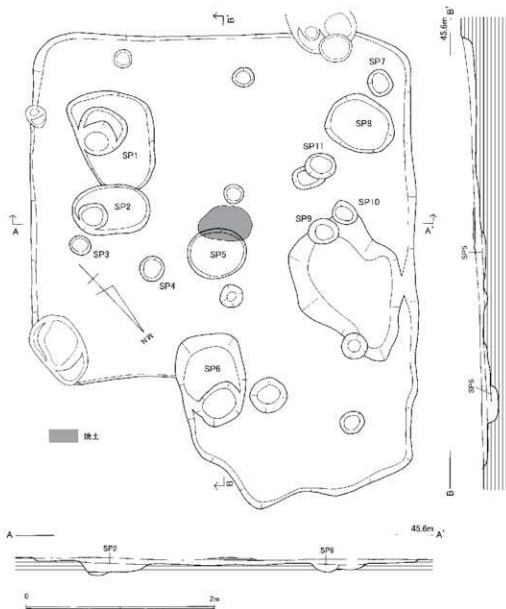
SC07・08出土遺物 (第19図)

18は縄文時代中期の阿高式土器の一部。胎土は滑石粒を多く含むもので、内面は灰褐色、外面はにぶい赤褐色を呈する。小片のため、天地や傾きは不明である。

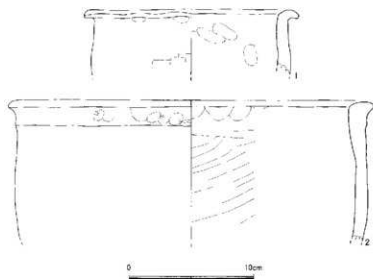
このほか、弥生土器・土師器の小片および黒曜石剥片が出土している。

SC09 (第20図・写真27)

調査区南部に位置する竪穴住居である。削平がほぼ床面まで及んでおり、平面形が方形をなすことは明らかであるが、北辺は失われて不整形となっているため、正確な規模はわからない。主軸を南北方向とすると44°東偏し、長辺4.05m、短軸3.7mをはかる。標高45.4m～45.25mで検出し、検出面から床面までの深さは南側で10cm、北側で3cm程度残存するだけである。覆土は、黒褐色土(10YR2/2)を主体とする。



第20図 SC09実測図 (1/40)



第21図 SC09出土遺物実測図 (1/3)

住居全体を検出した際に、住居中央部に、炉跡と考えられる焼土の集積が確認できた。このことから、この面が使用時の床面であったと考えたが、このほかに遺構は検出できなかったため、さらに掘りすすめたところ、地山直上で、径の小さい柱穴（SP4・7・11）と浅いくぼみ状の遺構を複数検出した。しかし、主柱穴、壁溝、壁際土坑等と認められる明確な遺構を確認することはできなかった。

出土遺物は、すでに床面まで削平が及んでいたためか、他の住居に比べて少ない。出土遺物には、土師器片が含まれることから、古墳時代に属する住居であると考えられる。

SC09出土遺物（第21図）

出土遺物は、他の住居に比べて少ない。1・2は弥生土器甕で、残存率は1/2以下。1は、磨滅が進んでいるが、外面はナデ、内面は工具によるナデで調整されている。2は外面が工具によるナデ、内面が指ナデによる仕上げである。1・2ともにぶい橙色を呈し、胎土は径1mm程度の白色粒を含む。

SC10（第22図・写真28～30）

調査区西側に位置する竪穴住居である。平面形は、東西辺が若干大きい略正方形をなす。主軸を南北方向とすると10°東偏し、長辺4.3m、短軸3.3mをはかる。標高45m～45.2mで検出したが、削平が床面付近まで及んでおり、検出面から床面までの深さは、西側で18cm、東側で4cm残存するだけである。覆土は、黒褐色土（7.5YR3/2）を主体とする。SC10の周辺および住居の覆土は鉄分の沈着が著しく、暗赤褐色化（5YR3/3）していた。

住居全体を検出した際に、第23・24図に示したR1（8）・R2（11・12・13・16・18）・R3（2）・R4（1）・R5（3）がまとまって出土した。このため、床面が近いことを想定してさらに2cm～5cm掘りすすめたところ、焼土と木炭が集積したSP7と集石遺構SP9を検出した。SP7は床面からの深さ5cmをはかる楕円形の地床炉とみられる。一方、SP9は楕円形に近い不整形土坑に、拳大の石を並べて詰めたような遺構で、立面図を示した部分については（C-C'）、中央の石を囲むように石を配置している。SP9は、住居内のほかの遺構と比べて覆土などに違いはなく、また、各石に火をうけた痕跡等はみられなかった。SP7との関連や遺構そのものの性格は不明である。地山に礫を含むことから、人為的なものではない可能性もあるが、SC24でも同様の遺構を確認している。

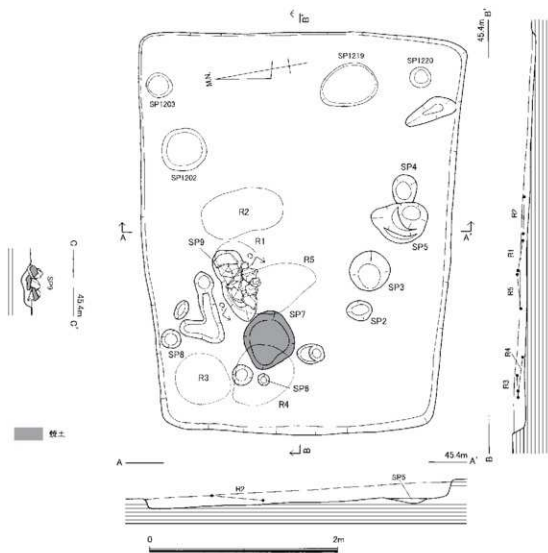
このほかに、深さ50cmをはかるSP3を検出したが、これ以外の検出遺構はほとんどが浅いくぼみ状のものばかりで、主柱穴や壁溝、壁際土坑と認められる遺構を確認することはできなかった。

住居床面から若干うたい状態出土したR1（第23図8）・R2（第24図11・12・13・16・18）・R3（第23図2）・R4（第23図1）・R5（第23図3）等の遺物から、SC10は、少なくとも古墳時代中期前半にはすでに廃絶していた住居と考えられる。

SC10出土遺物（第23・24図）

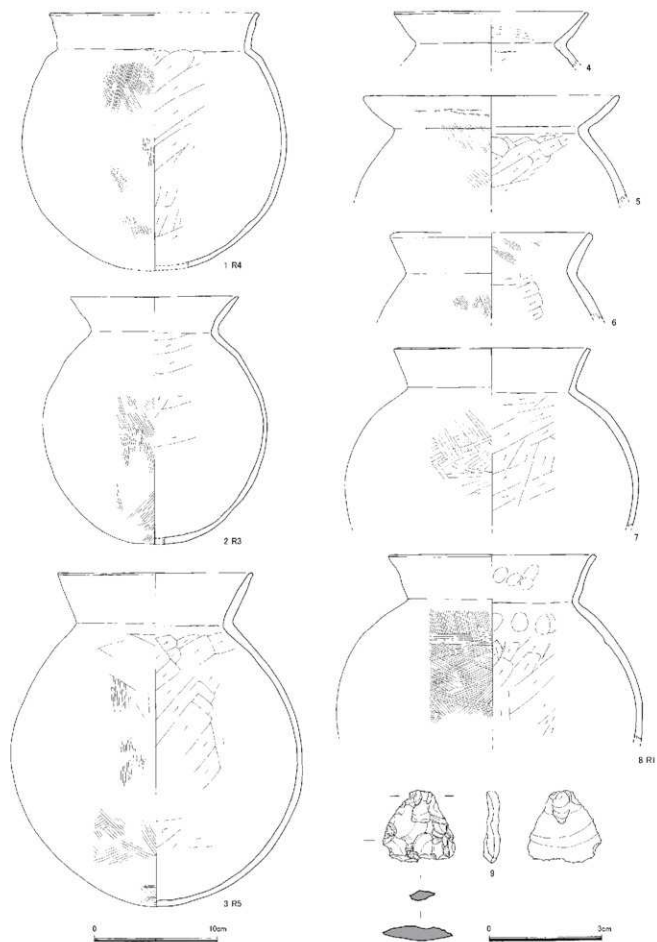
出土した遺物の残存率は1/2以下のものが多いが、遺存状況が比較的良好なものも含まれている。また、出土した土師器の胎土や色調は、SC04と同様の傾向にある。

1～8・18は土師器甕である。5・6は上層から出土し、1はR4、2はR3、3はR5、8はR1、18はR2としてとりあげた。18は、R1・3・4・5の甕よりも古く、古墳時代前期に属するとみられる。1は、口縁が楕円形をなすほど大きくひずんでおり、楕円形の長軸を正面として実測した。全体の2/3程度残存している。胎土は橙色から褐色を呈する。外面はハケ調整、内面はケズリ、口縁部は細かい条線の残る横ナデ調整である。内面の口縁部から胴部と外面の胴部の、対称的な位置に黒斑がついており、横倒しに近い状態で焼成されたと考えられる。外面全体には煤が、内面の胴部中位以下にはコゲが付着している。2も1と同様の調整で仕上げられている。2の胴部外面には円形の黒斑がつき、外面全体に煤が、内面の底部にコゲ

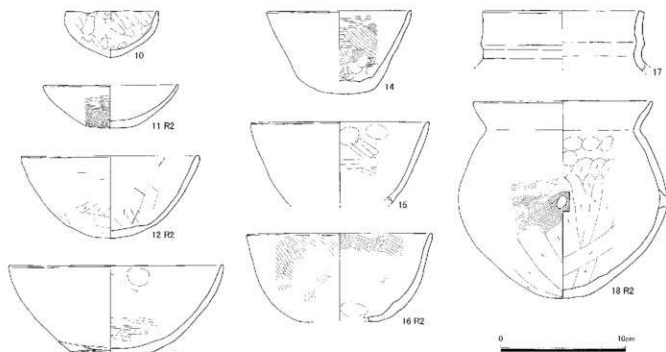


第22図 SC10実測図 (1/40)

が残る。とくに口縁部から胴部上半は熱をうけて器壁が赤く変色している。3は磨滅が著しく、調整も不明瞭で、使用痕等も観察しづらい。内面はケズリ、外面はハケ調整で、胴部上半のみ工具によるナデがみられる。2・3ともに比較的残りが良く、全体の2/3程度遺存している。4も磨滅がすすんでおり、外面の調整等は不明である。内面は胴部以下ケズリ、口縁部は粗いハケ調整。頸部には粘土接合痕が残る。5・6は、内面はケズリ、外面はハケ調整される。5の口縁部外面には横ナデの工具痕がみられる。7は、口縁部横ナデ、内面ケズリ、外面は粗いハケ調整後工具によって不定方向にナデている。外面胴部中位には煤が付着する。8は、外面ハケ、内面はケズリで仕上げている。内面のケズリは器壁に凹凸が残るほど粗く、口縁部から胴部上半には指オサエの痕が明瞭に残っている。外面の胴部上半には横方向のハケの連なりがみられ、布留裏の横位施文の名残かとも考えたが、磨滅しているためこれが一周連続するかどうかは確認できない。口縁部外面の一部には黒斑がつき、内面は火まわりが悪く黒褐色を呈する。18は、胴部中位に1箇所、焼成後に外面から孔を穿たれている。内面はケズリ、外面はハケで調整され、外面底部付近のみ工具によるナデで仕上げられている。内面底部にコゲが、外面胴部中位以下に煤が付着する。



第23圖 SC10出土遺物実測圖1 (1/1・1/3)



第24図 SC10出土遺物実測図2 (1/3)

9は半透明の黒曜石製の剥片。重量は1.18gでやや小さめであるが、弥生時代前期の織の未製品の可能性がある。

10～16は鉢。11～13・16はR2としてまとめてとりあげた。10はミニチュアで、比較的胎土は精緻である。外面全体に黒斑が残る。11は外面ハケ、内面は不定方向にナデ調整されている。12は外底部をケズリで整え、内面と外面の一部は工具によるナデで仕上げている。13は内外面ともに工具によるナデ調整。底部付近に、工具で沈線状の溝を巡らせている。14は、内底面は指オサエで成形され、外面ナデ、内面ハケ調整している。外面だけでなく内面にも煤が付着しており、使用したのではなく二次的に被熱したと考えられる。15は外面ナデ、外面はミガキに近い工具ナデ。坏部下半の一部に黒斑がつく。16は、底部を指オサエで成形した後、外面を工具ナデで整えている。坏部の外面はハケ調整、内面はハケ調整の後一部ナデで仕上げている。12・13・16の胎土は、橙色味の強い色調を呈する。

17は貼床から出土した壺で、内外面ともに横ナデ調整。焼成があまく、全体的に黒灰色を呈する。

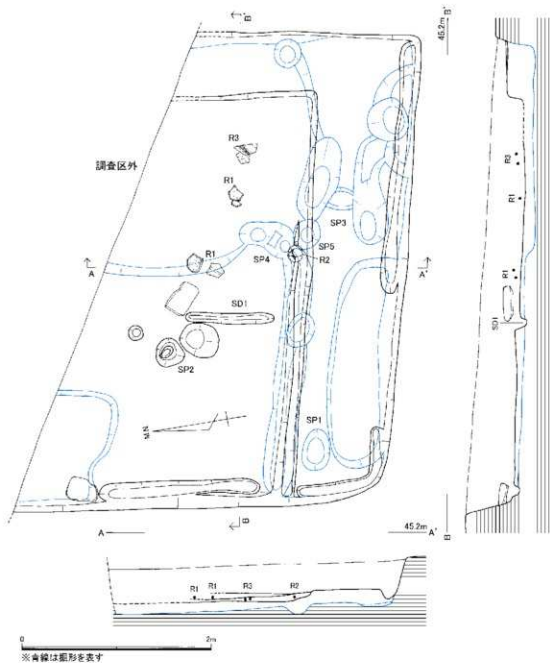
SC11 (第25図・写真31・32)

調査区北西隅に位置する竪穴住居である。北側の大半は調査区外へと続くため、正確な規模や住居の構造はわからない。第4・5図に示した4層と遺構覆土の区別がつきにくく、遺構検出に苦勞したため、住居の規模や構造に誤認がある可能性もある。ベッド状遺構の配置より、平面形は、主軸を南北方向(N-8°-E)にとる長方形をなすと考えられ、長軸5.1m以上、短軸4mをはかる。調査区内で検出した同様の住居(SC01・02・13・22・23・24)とは異なり、主軸を南北方向にもつ唯一の住居である。検出面は西側で45m、東側で44.65mと東側が低くなっている。依存状況は比較的良好で、住居検出面から-25cmを「上層」、それよりベッド状遺構検出面までを「下層」、ベッド状遺構検出面より下を「最下層」と区分して遺物をとりあげた。覆土は、上層では黒褐色土(7.5YR3/3)、下層・最下層では木炭を含む暗褐色土(10YR3/4)を主体とし、床面直上ではにぶい黄褐色土(10YR4/3)

ブロックを含むものとなる。

南側短辺と東側長辺に、にぶい黄褐色土と黒褐色土を2:1に含む混合土によって形成された、幅70cm～105cmのベッド状遺構を備えている。このベッド状遺構は、南東隅で折れ曲がって東側長辺へのびるが、東側長辺の北側ではベッド状遺構と覆土の区別がつきづらく、遺構の続きを明確に捉えることができなかった。したがって、東側長辺のベッド状遺構は途中で終わって、L字形となる可能性も考えられる。南側短辺のベッド状遺構には、壁に沿うように幅20cm～25cm、上面からの深さ10cmをはかる壁溝を確認した。また、南側短辺のベッド状遺構の裾部には、幅15cm程度の段がつくり出されている。

床面は、ベッド状遺構と同様の土を貼って整えられている。検出面からベッド状遺構までの深さは10cm～30cmで、検出面から貼床面までの深さは30cm～40cm程度。ベッド状遺構と貼床面の比高差は大きいところで15cmをはかる。また、SP2の東側には間仕切りのようなSD1が確認され、ここから東



第25図 SC11実測図 (1/40)

側の床面は若干低くなっている。ただし、住居の東側については、SC11の掘形の下に弥生時代の柱穴と土坑が複数存在しており、床面の土質がこれらの影響をうけて変わっていたため、床面を掘りすぎている可能性もある。

主柱穴は、貼床を除去した後に検出したSP5の可能性がある。SP5は径27cm、検出面からの深さ23cm、貼床上面からの深さは32cmをはかる。住居の大半が調査区外にあるため、対となる主柱穴を確認できず、確証は持てない。このほかにも炉や壁際土坑と認められる遺構は検出できなかった。

SC11では、第26図2・5・第27図21に示したR1～R3が、貼床面から若干ういた状態で出土した。住居廃絶後のあまり埋没がすすんでいない時点で投棄されたものと推測される。また、第26図9に示した土器は、最下層と上層から出土した片が接合していることから、比較的短時間のうちに埋没したと考えられる。

R1(第26図2)やR2(第26図5)、R3(第27図21)や、最下層から出土した第26図3・7・8・11等の出土遺物から、SC11は古墳時代前期前半には廃絶していたと考えられる。

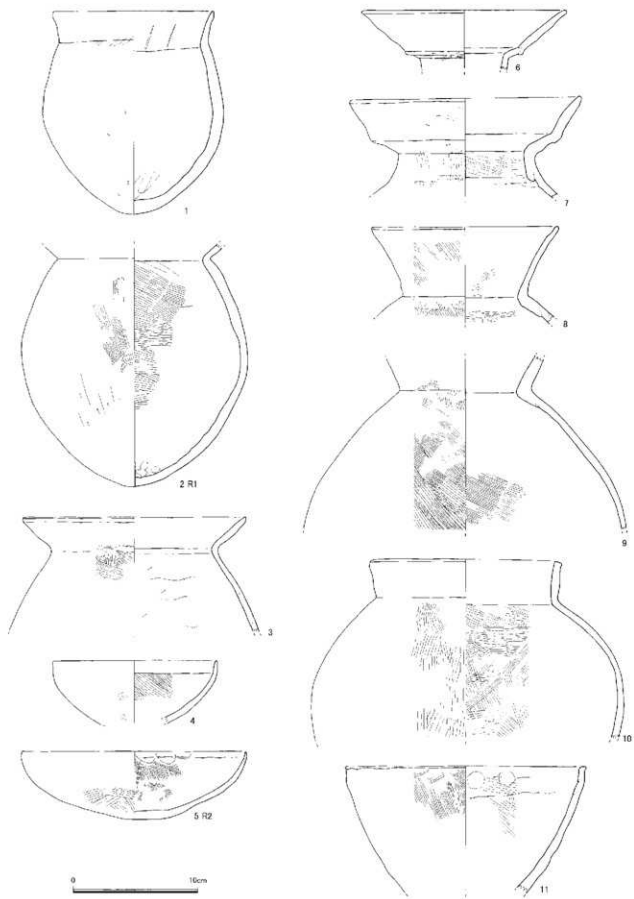
SC11出土遺物(第26・27図)

出土した遺物の残存率はほとんどが1/2以下で、遺存状況は悪い。また、出土した土師器の胎土や色調は、SC01と同様の傾向にある。

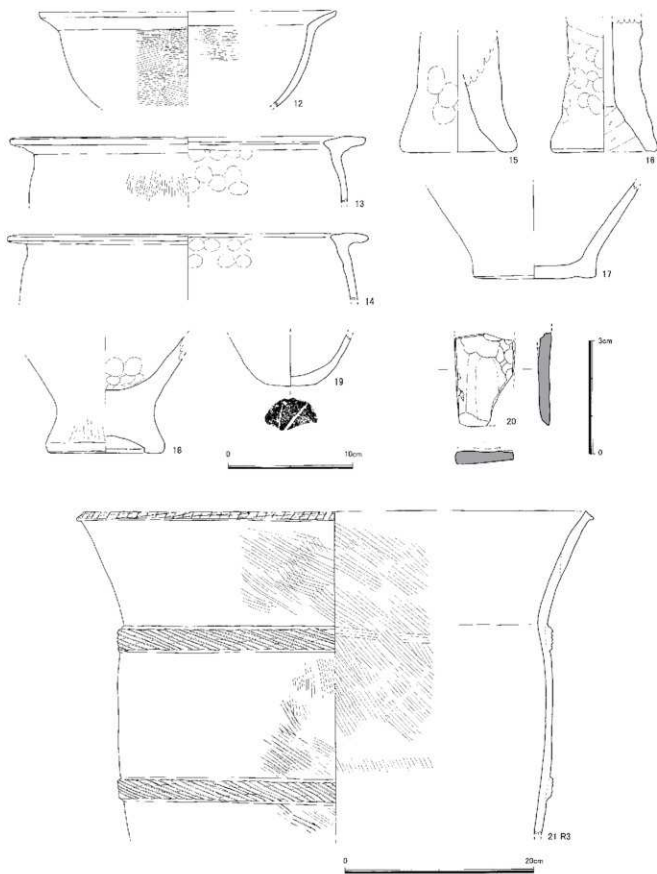
1～3・10・21は土師器甕である。1は下層、3は最下層から出土し、2はR1、21はR3としてとりあげた。1は磨滅が進んでおり、外面の調整は不明である。縦または斜め方向のハケまたは工具によるナデ調整とおもわれる。内面は、口縁部が工具によるナデ、胴部はナデ、底部には指オサエもしくは工具によるナデの痕跡がみられる。外面胴部中位に帯状に煤がめぐり、それ以下は火をうけて器壁は荒れて灰色化している。同様に、2も磨滅が著しく焼成が不明瞭である。底部は指で押しだされた後、外面を削って整えている。内外面ともに胴部はハケ調整される。胴部外面は使用回数が多かったためか、被熱により器壁が剥落している箇所がある。また、内外面ともに同じ位置に黒斑が残っており、この部分が焼成時の設置面であったことがわかる。3は外面ハケ、内面ケズリで調整されている。仕上げが粗く、内面には粘土接合痕が明瞭に観察できる。口縁部から胴部上半の一部に黒斑がつく。10は、内外面ともにハケ調整。外面の胴部上半に斑状に黒斑が残り、外面胴部下半には煤の付着がみられる。21は、口縁部が長く突帯は扁平で胴部の張りも小さい。内外面ハケ調整で仕上げている。突帯と口縁端部には、ハケ調整に使用した工具で斜めに施文するが、施文の前に施文の方向とは逆の方向にハケ調整している。

4・5・11・12は鉢である。11・12は最下層から出土し、5はR2としてとりあげた。4は全体に磨滅が進んでおり、調整は不明瞭である。外面底部付近に黒斑が残る。5は内外面ともにハケ調整されている。口縁端部内面には指オサエと粘土接合痕が観察できる。外底面に煤が付着している。二次的に被熱したものの。11は、口縁部内面に指オサエと粘土接合痕が残り、口縁も水平をなさず、つくりが粗い。内外面ともにハケ調整で仕上げているが、磨滅しており底部付近の調整は不明瞭である。口縁部外面に黒斑がつく。12は、内外面ハケで、内面坏部下半のみ工具によるナデで仕上げている。

6～9は壺。7～9は最下層から出土した。6・7は二重口縁壺で、ともに磨滅が著しい。6は頭部の一部にわずかにミガキとハケの痕跡が観察できる。胎土は礫粒を含まず精緻である。7は、6に比べて、頭部が短く八字状となり、器壁も厚く胎土も柔らかくかわりがない。瀬戸内海沿岸地域の影響をうけている可能性がある。口縁部外面には、ハケ調整後にわずかに研磨した痕跡がみられる。8は内外面ともにハケ調整。胴部上半に粘土接合痕が残っている。同様に、9も内外面ハケ調整される。内面は



第26图 SC11出土遗物实测图1(1/3)



第27図 SC11出土遺物実測図2 (1/2・1/3・1/4)

磨滅が進んでおり調整は不明瞭である。外面胴部上半に小さい黒斑がつく。

13～19は弥生土器。SC11の下には弥生時代の柱穴や土坑等があったため、最下層で出土した14・16・17はそれに由来するもの可能性もある。13・14は中期の甕。13は磨滅しており調整が不明瞭。14の口縁部上端には黒斑が残る。15・16は中期の器台。15は磨滅が進んでおり調整が観察できない。16は、内外面ともに指オサエと斜め方向の指ナデで成形している。17・18は甕の底部。17は磨滅が著しく調整は不明。底部に黒斑が残る。18の外面は被熱して赤変している。19は内外面ともにナデ調整されている。外底部に葉脈とおもわれる痕跡が残っている。焼成があまりいためか、内面と外底部は黒灰色を呈する。

20は最下層から出土した扁平片刃石斧である。緻密な砂岩製。上面はへこんでおり砥石として再利用されたと考えられる。重量は16.63gをはかる。

SX12・SC13・14 (第28図・写真33)

調査区の東側中央部に位置する。3つの遺構が切りあっており、全体に削平が及んでいることもあり、相互の新旧関係を明確には把握できなかったが、SX12はSC13よりも古く、SC14はSC15よりも古いことは確実である。住居内の遺構は、共通して連番をつけた。3つの遺構の覆土は、共通して、黒褐色土(2.5Y3/1)を主体とする。周辺および住居の覆土は鉄分の沈着が著しく、暗赤褐色化(5YR3/3)していた。

新旧関係を把握する過程を説明するために、ここでまとめて報告する。

SX12

SX12は、東西辺2.1m、南北辺1.3m以上の方形をなす遺構である。土層の断面観察から、SC13にきられることがわかった。標高45.25mで検出し、検出面からの深さは25cmをはかる。覆土は底面に近いほど、にぶい黄色土(2.5Y6/4)をブロック状に含むようになる。

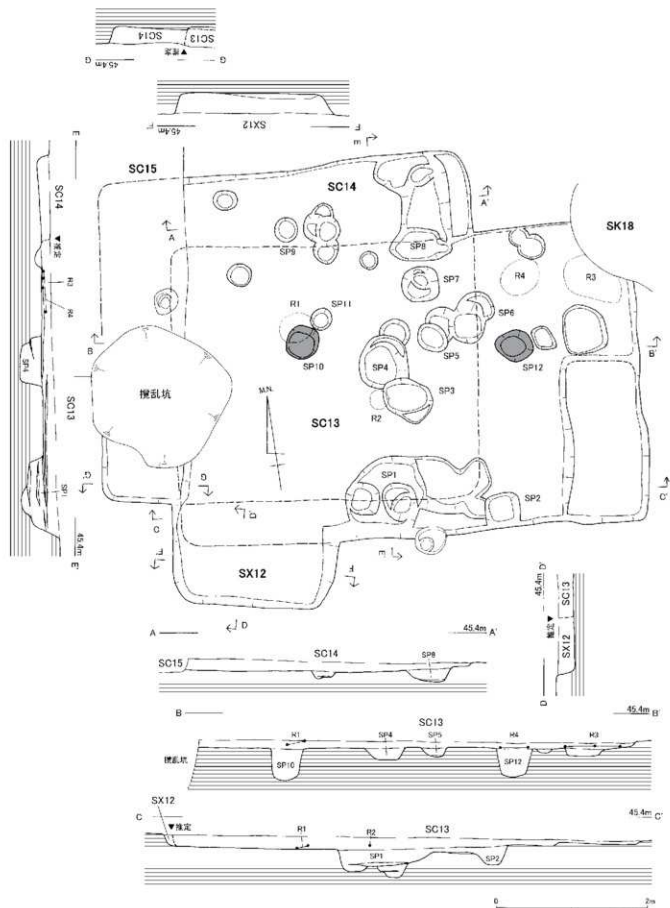
SX12は、弥生時代中期の住居である可能性も考えられたが、SC12の南半から第29図1・2に示した古墳時代の土師器鉢が出土したことから、古墳時代の土坑である可能性が高い。

SC13

SC13は、SX12の埋没後に掘削された堅穴住居である。主軸を東西方向(N-84°-W)にとり、平面形は長方形をなす。また、SC13の覆土は、検出面から5cmほど掘削するとにぶい黄色土ブロックを多く含む黒褐色土となり、曖昧ではあるが、SC14の覆土と区別できること、加えて、R2(第29図8・第30図12)がSC14の遺物が混入しない位置で出土したR1やSC13-SP1出土の破片と接合することから、SC13はSC14より新しいと考えた。このように考えると、擾乱坑の南側にある段差がSC13の西辺である可能性が高くなり、SC13の規模は、短軸4m、長軸は6.1m程度と推定できる。

SC13は、標高45.05m～45.2mで検出し、検出面から床面までは7cm～15cm残存していた。SC13には、東側短辺に、幅1.1m長さ2.25mの地山を削りだしたベッド状遺構を備えている。床面は地山で、貼床はみられない。検出面からベッド状遺構までの深さは5cmで、ベッド状遺構と床面との比高差は大きいところで5cm程度である。

主柱穴は2本で、短辺側で検出したSP10とSP12である。柱間距離は2.8mをはかる。柱穴の平面形は円形をなし、径は45cm～50cm、床面からの深さは約40cmである。柱痕跡は掘形の上面でも底面でも確認できなかった。また、南側長辺の中央部に壁際土坑SP1を検出した。SP1は、長軸1.9m、短軸1.1mをはかる不整楕円形をなし、底面も凹凸が著しい。覆土には、木炭粒を含む。このほかに、



第28图 SX12・SC13・14实测图 (1/50)

壁溝や炉等の遺構は確認できなかった。

R1～R4（第29・30図7・8・10・12）は、床面直上あるいは5cm程度ういた状態で出土した。これらの遺物から、SC13は古墳時代前期前半には廃絶していたと考えられる。

SC14

SC14は、住居の中央部から南部をSC13に、住居の西部を攪乱坑とSC15に破壊されており、主柱穴や炉、ベッド状遺構、壁溝といった住居内の遺構は検出できなかった。南西隅と北東隅の位置関係から、一辺5mの略正方形をなす住居であると推定できる。主軸を南北方向とすると、7°東偏する。検出面の標高は45mで、検出面から床面までは10cm～20cm残存していた。覆土の違いや出土遺物の状況から、SC13より古いと考えられる。遺構の新旧関係と出土遺物（第30図13）から、SC14は少なくとも弥生時代終末期から古墳時代前期初頭には廃絶していたと考えられる。

SX12・SC13・14出土遺物（第29・30図）

出土した遺物の残存率はほとんどが1/2以下であるが、遺存状況がよいものが若干含まれている。また、出土した土師器の胎土や色調は、SC01と同様の傾向にあるが、器種を問わず橙色を呈する個体が少量存在している。

1・2はSX12から出土した土師器鉢である。1は外面ハケ、内面ナデで調整されるが、外面底部付近のハケ調整は削るような強く粗いものである。2は、ほぼ完形。外面はハケ調整の後、坏部下半から底部にかけてミガキのような工具ナデ、内面はハケ調整の後、工具により放射状にナデで暗文状に仕上げている。口縁部は丁寧に横ナデ調整される。外面坏部下半に黒斑が残る。1・2ともに外表面に横方向の皺がよっており、これが成形時に使用された粘土紐の単位を示す可能性がある。

3～11はSC13から出土した。7はR1、8はR2・R4、10はR3、12はR2としてとりあげた。

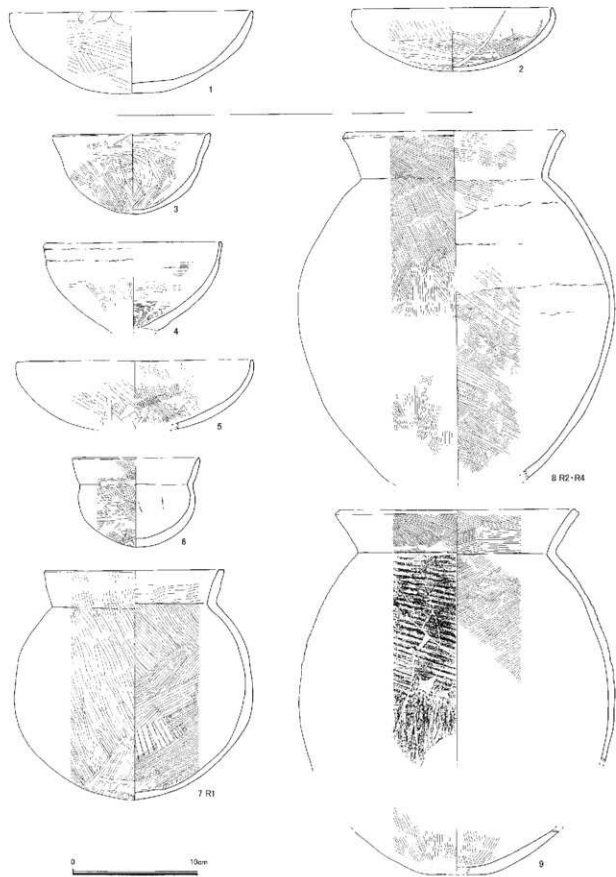
3～5は鉢である。3は内外面ともにハケ調整の後工具により研磨されており、とくに坏部内面のミガキは放射状に丁寧にほどこされている。外面の1/2に黒斑がつく。全体の2/3程度が遺存している。4は磨滅が進んでいるが、内外面ハケ調整されたようである。口縁部外面には粘土の接合痕がのこり、つくりはやや粗い。橙色を呈する。5は、内面ハケ、外面工具によるミガキのようなナデで調整され、口縁部は横ナデされる。口縁端部に黒斑が残ることから、伏せて焼成されたと推測される。

6・7は壺。6は、外面ハケ、内面工具によるナデで仕上げている。内底面に黒斑がつく。明赤褐色を呈する。7はほぼ完形。内外面ハケ調整した後、外面胴部以下は工具により粗く研磨し、口縁部を横ナデしている。外底面には黒斑が、口縁部から胴部上半の外面には煤が帯状に付着する。

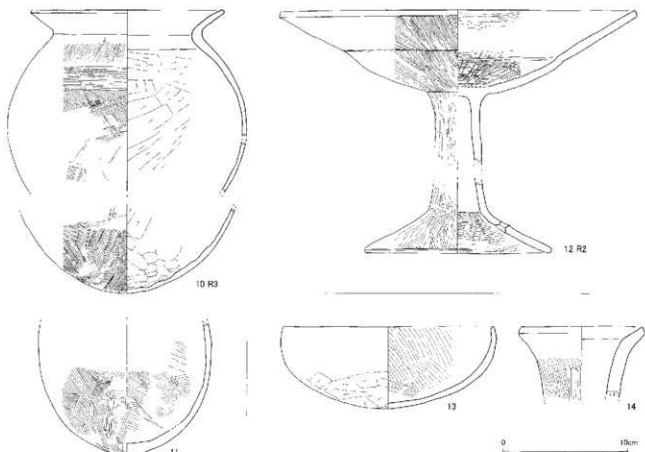
8～11は甕。8は内外面ハケ調整される。内面では粘土接合痕が観察できる。胴部内面には斑状にコゲが残る。口縁部から胴部上半の外面には煤の付着がみられる。9は、タキにより胴部を成形した後、口縁部から頭部と底部の外面および内面をハケで仕上げている。底部はやや平坦である。内底部にコゲ、外面全体に煤が残っている。10は庄内系だが、頭部はやや厚い。胎土は在地系の他の甕より精緻である。内面はケズリ、外面はハケで調整され、外面胴部上半には布留甕の影響をうけて横方向のハケ調整がめぐる。SC01やSC02で出土した庄内系の甕（第10図17・第12図9・10）よりも時期は下るとおもわれる。外底部には黒斑が、胴部外面には煤が付着している。11は内外面ハケ調整であるが、内面底部のみ工具によりナデしており、指オサエの痕はみられない。内面底部にコゲが残る。

12は高杯である。脚中部内面をのぞいて、内外面全体に丁寧なヘラミガキをほどこしている。裾部には3箇所穿孔があると推測され、このうち2つの穿孔を確認できる。被熱した片とそうでない片が接合することから、廃棄された後に二次的に火を受けた可能性がある。明赤褐色を呈する。

13・14はSC14に属するもので、13はSC13の混入のない北側から出土した。13は土師器鉢。磨



第29図 SX12・SC13・14出土遺物実測図1(1/3)



第30図 SX12・SC13・14出土遺物実測図2(1/3)

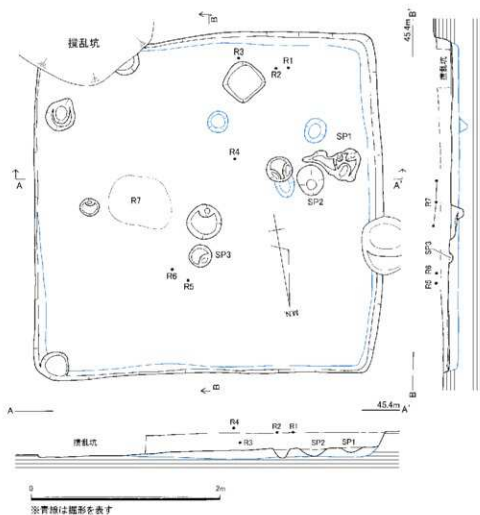
減が著しく外面の調整ははっきりしないが、底部はケズリで整えている。内面はハケ調整。伏せて焼成されたのか、口縁部端に黒斑がつく。14は弥生土器の器台。口縁部から内面は横ナデ、外面はハケ調整される。にぶい橙色を呈する。

SC15 (第31図・写真33・34)

SC13・14の北東側に位置する竪穴住居で、SC14の埋設後に掘削され、SC20に北東部をさらわれている。一辺3.7mをはかる略正方形をなし、主軸を南北方向とすると9°東偏する。標高44.95m～45.2mで検出し、検出面から床面までの深さは、北側で8cm、南側で18cm残存するだけである。覆土は、黒褐色土(10YR3/2)を主体とする。検出面から約5cm掘削すると、覆土はにぶい黄色土(2.5Y6/4)ブロックを含むものになったため、これより下を「下層」として遺物をとりあげた。

全体に床面近くまで削平が及んでおり、住居検出した際に、第32・33図に示したR1(13)・R2(16)・R3(12)・R4(7)・R5(15)・R6(8)・R7(2・3・6・9・10)がまとまって出土した。これらの遺物は下層から出土した片と接合するものが多く、SC15はこれらの土器が投棄されてから比較的短時間のうちに埋没したと考えられる。

床面は、にぶい黄褐色土(10YR4/3)に黒褐色土ブロックを含む土で整えられており、その上面で、SP1～3を検出した。貼床の厚さは最大で8cm程度で、その下でも複数の柱穴を検出したが、SP1～3を含めて浅いくぼみ状のものであり、いずれも主柱穴とは考えられない。このほかに、炉や壁際土坑、壁溝も確認できなかった。なお、SC15の掘形の下には、弥生時代の柱穴がいくつか存在しており、貼床の土質がこれらの影響をうけて部分的に変わっていたため、住居の掘形については掘りすぎとい



第31図 SC15実測図 (1/40)

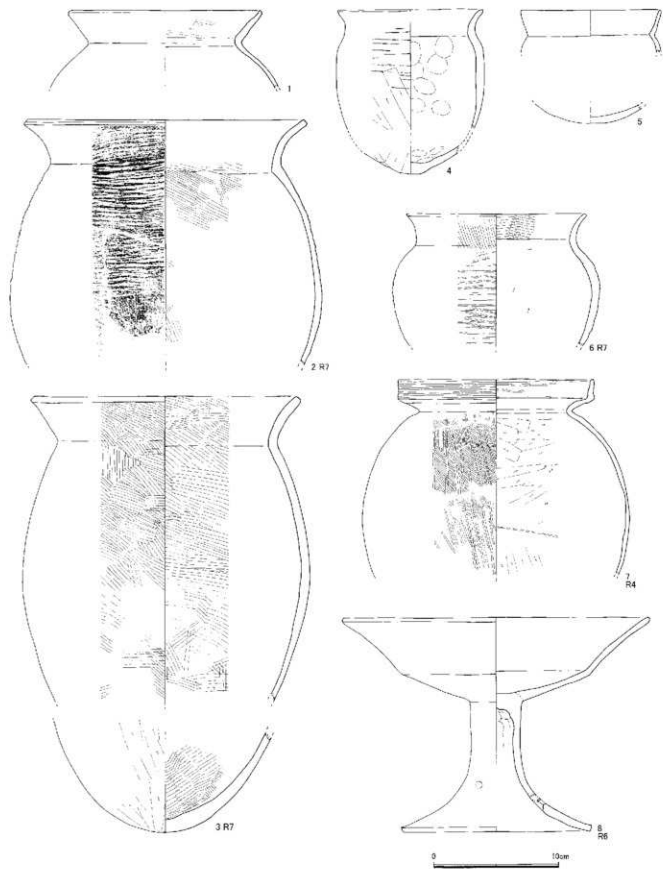
る可能性がある。

住居検出時に出土したR7(第32図2)・R4(第32図7)・R6(第32図8)等から、少なくとも弥生時代終末期から古墳時代前期前半にはすでに廃絶していた住居と考えられる。

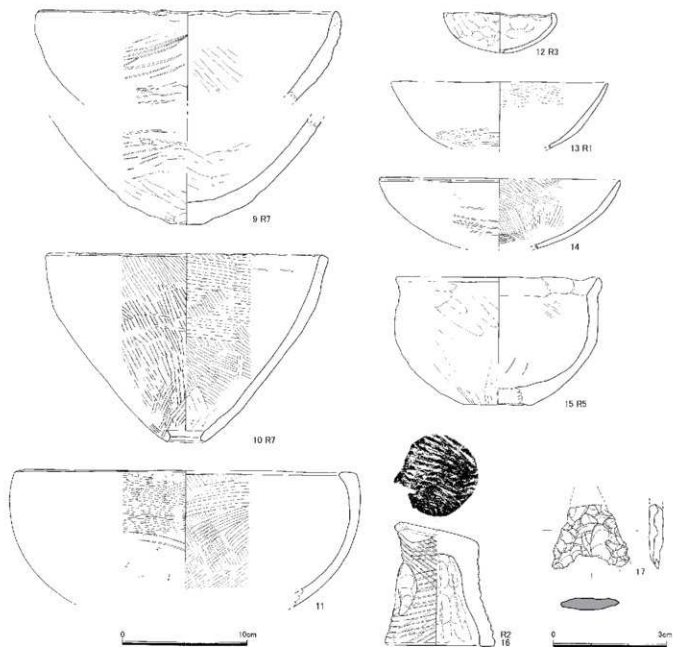
SC15出土遺物(第32・33図)

出土した遺物の残存率はほとんどが1/2以下で、遺存状況は良くない。また、出土した土師器の胎土や色調は、SC01と同様の傾向にある。

1～4・6・7は土師器甕。7はR4として、2・3・6はR7としてまとめてとりあげた。1は庄内系または布留系。頸部の器壁は厚く、やや立ち上がり気味である。胎土は在地系の他の甕と比べればやや精緻。磨滅が著しく、内外面ともに調整は不明瞭であるが、胴部内面はヘラケズリしている。SC13出土の甕(第30図10)よりも新しい様相を呈する。2も磨滅が進んでおり、調整を観察しにくい。外面は胴部から口縁部までタタキで、胴部下半のみ工具によりナデ調整されている。内面はハケ調整後一部ナデで仕上げている。口縁端部は調整によるものか沈線状にぼんでいる。口縁部および胴部中位以下の外面に煤が付着している。3は、遺存状況が悪く、底部との接点が見つからなかったため分離して実測した。外底部のみケズリで整えているが、全体は内外面ともにハケ調整する。外面全体に煤が残る、使用頻度が高かったせいか胴部下半から外底部にかけては被熱して器壁が赤く変色している。明赤褐色を呈する。4は、底部を指で押し出して外面をヘラケズリして整え、胴部はタタキによって整形している。使用した痕跡はみられない。6は、胴部をタタいて整形した後、外面の胴部上半から口縁部をハケ調



第32图 SC15出土遺物実測図1 (1/3)



第33図 SC15出土遺物実測図2 (1/1・1/3)

整・ナデ調整し、内面はケズって器壁を平滑にしている。内面の胴部下半にはコゲが、口縁部と胴部の外面には煤がみられ、外面胴部下半の器面は被熱して赤く変色し、剥落している部分がある。7は、吉備系の搬入品。外面の胴部上半に列点文を有する。内面は丁寧にヘラズリされ、外面はハケ調整の後に磨きがほどこされている。口縁部内面にもミガキのような痕跡がみられる。胴部中位以下には煤が付着する。胎土は、径1～3mm程度の石英・長石とおもわれる白色粒を少量含むもので、にぶい黄橙色を呈する。

5は壺。磨滅が著しく、調整は観察できない。8はR6としてとりあげた高杯である。同様に磨滅が進んでおり、調整は不明。遺存状況が悪く、坏部と脚部と裾部の接点がないが図上で復元している。裾部の穿孔は1箇所のみ確認している。

9～15は鉢。9・10はR7、12はR3、13はR1、15はR5としてとりあげた。9は、遺存状況が悪

く、胴部下半との接点がない上にひずみが大きく合成もできなかったため、分離して実測した。底部は平坦で、器壁は厚い。口縁端部の水平をなさず、つくりは粗い印象である。底部は内外面ともにケズリで整え、胴部は工具により粗くナデで仕上げている。10は底部有孔の鉢。口縁は水平をなさず、口縁部内面には、粘土接合痕が残っている。口縁端部には、工具を押し付けることにより、不規則な刻目をつけている。内底面をケズリ、それ以外をハケで調整する。外面には、焼成時の燃料が接触していたと推測される不規則な形の黒斑が斑状にみられる。11は、外面胴部下半をケズリのような強い工具ナデによって整えているが、そのほかは内外面ともにハケ調整している。口縁部は面取りされたように平坦をなし、上端はハケ調整のあとがみられる。12はほぼ完形のミニチュア。13は、全体を外面ナデ、内面ハケで調整し、底部付近のみ内外面ともに工具によるナデで仕上げている。14は、口縁端部に沈線状の溝がめぐるが、意図的なものというよりは調整の痕跡である。内面はハケ、外面は工具によるナデ。口縁部から胴部上半にかけて黒斑が残り、外面に煤が斑状に付着している。また外面の器面には縦方向に無数の皺がよっている。15は、外面は指ナデとケズリによって器面を整え、内面は工具によるナデで調整する。口縁部の内面には指オサエの痕跡が残り、口縁部は水平をなさない。外底部に黒斑が付き、内面は焼成があまいため全体的に黒灰色から灰色を呈する。

16はR2としてとりあげたほぼ完形の支脚。側面には、長さ4cm幅1.5cm程度のくぼみが1.5cmの間隔をあけて2箇所ついており、持ち手となっている。上端から器高が高い側の側面にかけて黒斑が残る。天井部には煤が付着し、とくに甕をのせたときに火に近い側の側面は被熱して器壁が赤く変色している。

17は検出面で出土した漆黒曜石製の鎌である。先端と片方の脚を欠損するが、重量は1.09gをはかる。縄文時代早期の押型文土器にともなうものと考えられる。

SC16 (第34図・写真35)

調査区北東部に位置する堅穴住居で、南東隅のみ調査区外へと続く。平面形は略正方形をなす。主軸を南北方向とすると19°東偏し、一边は4.5mをはかる。東辺の一部は、攪乱にさらされている。標高44.75m～44.9mで検出し、検出面から床面までの深さは、25cm程度残存している。覆土は黒色土(10YR2/1)を主体とし、床面に近くなるほど、明黄褐色土(10YR6/8)と褐灰色土(10YR4/1)が混じるようになる。

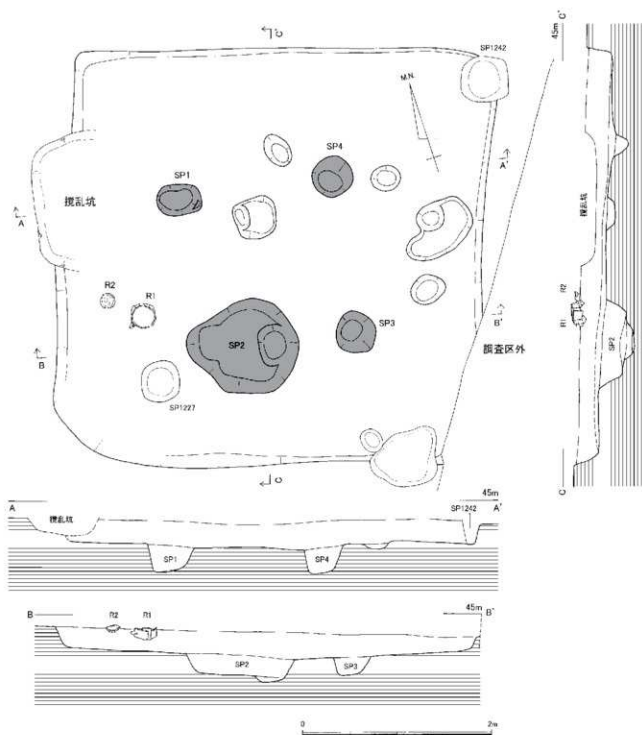
地山を床面とし、貼床はみられない。上面で4本の支柱穴SP1～SP4を検出した。SP1・3・4は径60cm程度の平面円形、SP2は長軸1.2m、短軸1mの平面楕円形をなす柱穴で、床面からの深さは18cm～30cmをはかる。柱間距離は約1.6mとそろいが、SP1～SP4の配置は正方形をなさない。このほかに壁溝や炉・竈、壁際土坑等の遺構は確認できなかった。なお、床面である地山には拳大の礫が多量に含まれており、住居の南西隅については床面を掘りすぎてしまっている。

第35図に示したR1(2)・R2(4)は、床面から25cm以上浮いた状態で、住居全体を検出した際に出土した。住居廃絶後にある程度埋没してから、これらの遺物が投棄されたと推測できる。以上のことから、SC16は、少なくとも古墳時代中期後半にはすでに廃絶していたと考えられる。

SC16出土遺物 (第35図)

出土した遺物の遺存状況は良好ではない。出土した土師器は、胎土に径1mm程度の白色粒を含み、にぶい褐色を呈する。

1・3は土師器甕である。1は、内外面ともに胴部を工具によるナデで器面を整え、口縁部は細かい条線の残る横ナデで仕上げている。器壁も厚く、胴部内面には粘土の接合痕が観察される。外面全体

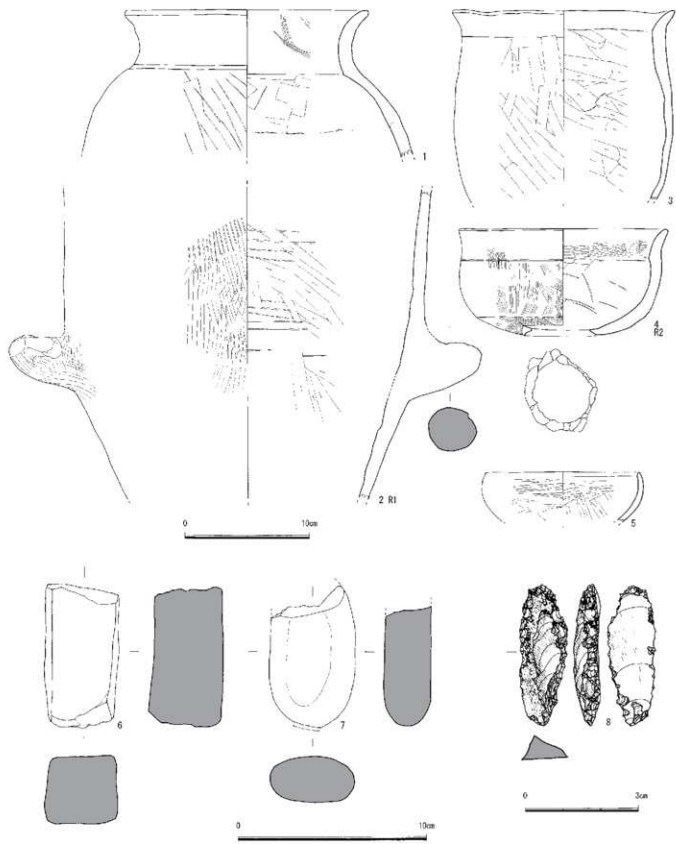


第34図 SC16実測図 (1/40)

に煤が付着する。3は、外面は工具によるナデ、内面はケズリ、口縁部は横ナデ調整される。内面のケズリは器壁に凹凸が残る粗いものである。口縁部から胴部上半の内面、およびそれに対応する胴部外面に黒斑がつく。

2は口縁部と底部が欠損する甕である。R1としてとりあげた。外面は粗いハケ、内面は粗いハケとケズリが併用される。外面には幅13cm程度の黒斑が残る。

4・5は鉢。4はR2としてとりあげた。4は、口縁部内面から胴部にかけてはハケで、内面は工具によるナデで仕上げている。底部は、焼成後に内面から穿孔している。5は、内外面ともに、工具に



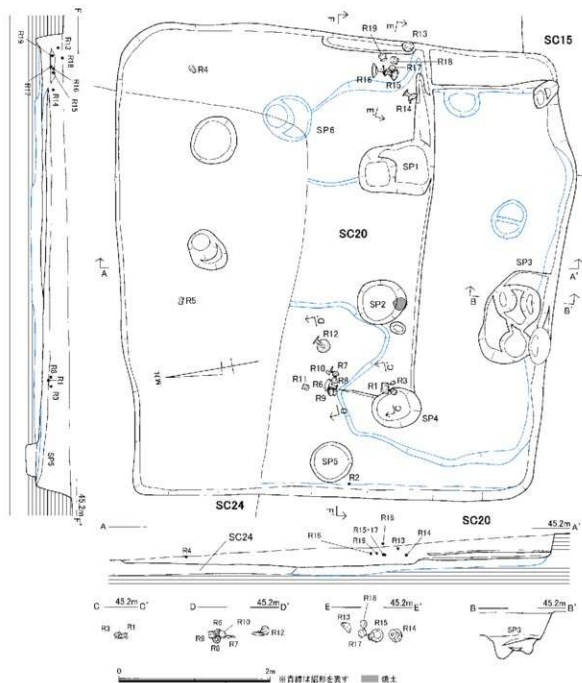
第35図 SC16出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)

よるナデの後にヘラミガキで丁寧に仕上げている。胎土も礫粒等を含まず精緻である。1～4よりも古い時期の鉢であると考えられる。

6は目の粗い砂岩製砥石。被熱によって磨滅が進んでいるが、全面使用していたようである。重量は184gをはかる。7は灰褐色を呈する敲石。6と同様に熱をうけて全体が赤変している。重量は132gをはかる。8は、漆黒黒曜石製の搔器。縦長剥片の両側面と下端部を刃部とする。重量は3.72gをはかる。縄文時代早期の所産か。

SC20 (第36図・写真36・37)

SC15の北東側に位置する竪穴住居である。平面形は、東西辺が若干大きい略正方形をなす。主軸を南北方向とすると11°東偏し、長辺6.3m、短辺5.5mをはかる。標高44.75m～45.1mで検出し、検出面から床面までの深さは、北側で5cm、南側で35cm残存する。覆土は、黒褐色土(10YR3/2)を主体とし、にぶい黄褐色土(10YR4/3)と木炭を少量含むものである。第4・5図に示した4層と



第36図 SC20実測図 (1/50)

遺構覆土の区別がつきにくく、当初は2つの住居の切りあいと認識するなど遺構検出に苦労したうえに、住居全体を検出面から15cm程度掘り下げたまで、SC24との切りあい関係を明確に認識できなかったため、住居の規模や構造を認識している可能性がある。

SC20からは比較的多くの遺物が出土した。遺物は、SC24との切りあいを確認した検出面から15cmより上を「上層」、これより下を「下層」と区分してとりあげた。上層からは、第37・38・39図に示したR1～R19（2・5・7～13・16～19・23・29～31・36）および第37図4・14・15・第38図24・25等の遺物がまとめて出土した。住居廃絶にともない、古墳時代中期初頭になんらかの祭祀が行われた痕跡であると考えられる。

SC20の床面は、黄褐色土（10YR5/6）に黒褐色土が混じる土で整えられており、住居の南側では、幅1.75mをはかるベッド状遺構を検出した。このベッド状遺構は、住居の南東隅では5cmほど高くなり、住居の南西隅では折れ曲がった後に低くなって床面と同化する。検出面からこのベッド状遺構までの深さは15cmで、床面との比高差は大きいところで5cm程度である。なお、住居の中央部の掘形は、SC20の下にあるSC24の影響をうけて、貼床の土質が変わっていたため、掘りすぎている可能性がある。

このほかに、貼床上面では、壁溝、炉、壁際土坑を検出した。壁溝は、東辺の一部で検出され、幅20cm、深さ7cmをはかる。また、床面からの深さが10cm程度と浅いSP2では、焼土の集積がみられ、地床炉である可能性が高い。硬化面等は確認できなかった。さらに、南辺中央部では、上述した高まりの上から壁際土坑SP3が掘削されている。SP3は短軸0.9m、長軸1.3mをはかる不整楕円形をなす土坑で、底面は凹凸が著しい。

主柱穴は、4本柱の可能性が高いと考えて調査したが、判然としなかった。強いていえば、SP4と貼床除去後に検出したSP6は、ともに径60cmの平面円形を呈する柱穴で、貼床上面からの深さはSP4が34cm、SP6が55cmをはかり、主柱穴でもよいのかもしれない。

覆土の上層から出土したR1・R3～R19等の出土遺物から、SC20は少なくとも古墳時代中期初頭にはすでに廃絶していた住居と考えられる。

SC20出土遺物（第37～39図）

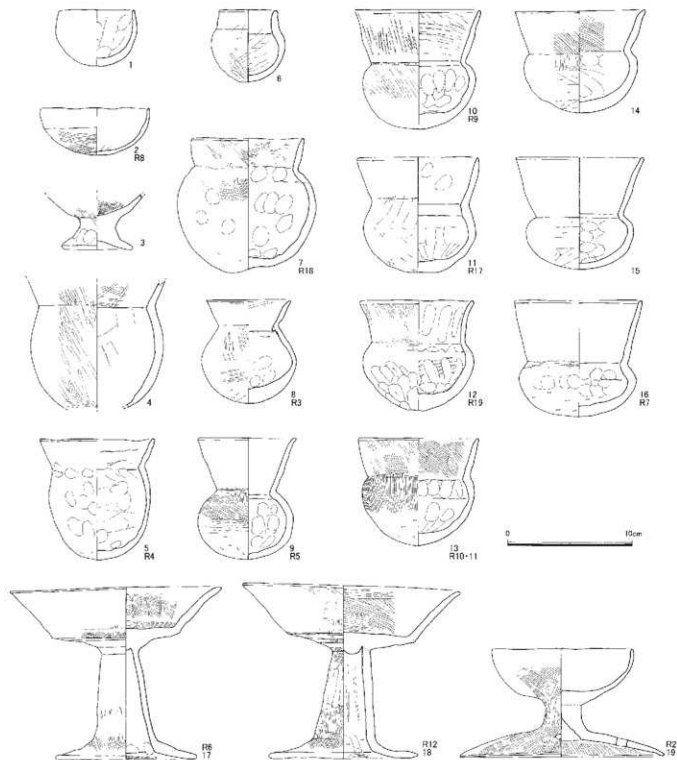
出土した遺物は、祭祀の際に使用されたと考えられる土器2・5・7～13・16～19・23・29～31（R3～R19）はほぼ完形で遺存している。また、14・15・24・25もほぼ完形で復元できた。これ以外のものの遺存状況は1/2程度である。また、出土した土師器の色調はSC04と同様の傾向にあるが、壺・鉢・高杯が多いことから胎土に含まれる礫粒の量は少ないものが多い。

1～3はミニチュアの鉢。1は上層、3は下層から出土し、2はほぼ完形でR8としてとりあげた。1は外面をナデ調整する。胎土は砂粒を多く含む精緻なもの。2は磨滅が進んでおり調整は不明瞭であるが、外面底部は不定方向にハケ調整されるようである。底部に黒斑がつく。3は脚付の鉢で、1と同様に胎土は精緻である。坏部内面は、底部中央から口縁にむかって、逆時計回りにハケ調整しており、他の遺物と比べて古い様相を有している。坏部内外面には黒色の顔料が塗られていたようである。

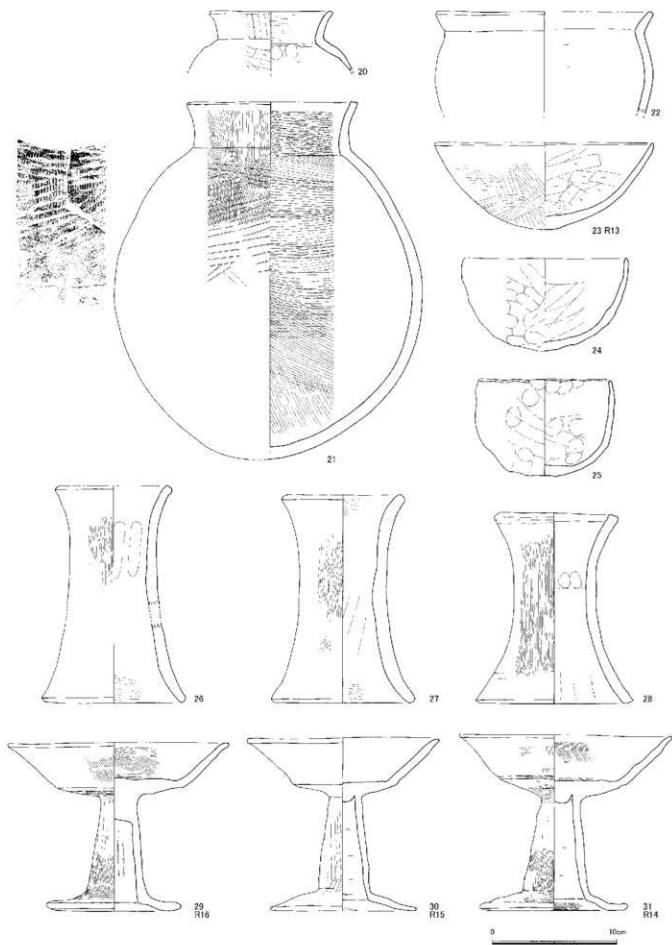
4～16・20は壺。5はR4、7はR18、8はR3、9はR5、10はR9、11はR17、12はR19、13はR10・11、16はR7としてとりあげた。

4は、口縁部内面から外面はハケ調整の後に研磨し、胴部内面は工具によるナデで調整している。5は、全体を指オサエで成形した後に行われた工具ナデや横ナデが粗いため、器壁に凹凸や粘土接合痕が明瞭に残っている。外底面はケズリのような工具ナデで形を整えている。6はミニチュア。外面はヘラミガキ、内面は工具によるナデで仕上げている。外面には、口縁端から底部を通して反対側の口縁端まで、黒色の煤あるいは顔料が細い筋のように一条ぐるっとめぐっている。使用痕なのか文様なのかは分か

らない。4～6は外底面に黒斑がつくが、6の黒色の煤または顔料は、黒斑の上から付着している。7も、5と同様に、指オサエで成形した後のハケやナデの調整が粗く、器壁に凹凸や粘土接合痕がみられる。外底部は形を整えるために斜め方向にケズっている。外面全体に煤が斑状に付着する。20は、口縁部外面に縦方向の暗文を持つ。胴部上半外面はケズリのように強いナデ、内面は指オサエで器面を整えている。頸部の内面には粘土接合痕が残る。胎土は橙色を呈する。



第37図 SC20出土遺物実測図1(1/3)



第38图 SC20出土遺物実測図2 (1/3)

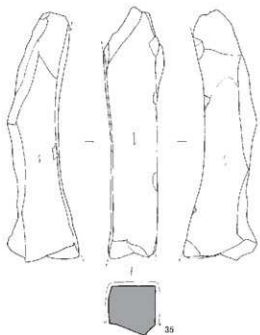
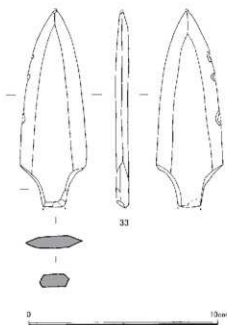
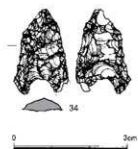
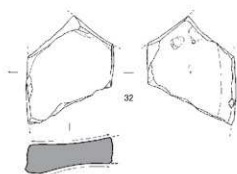
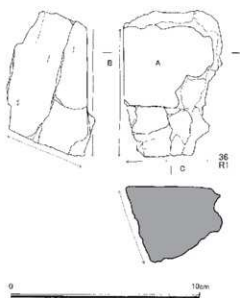


写真11 SC20出土R1



第39图 SC20出土遺物実測图3 (1/1・1/2)

8～16は小型丸底壺で、8以外はほぼ完形。14・15は、覆土の上層・下層からばらばらに出土したものを完形に復元することができた。外面をハケ調整した後に、外底部をケズって丸く整える方法で製作している。その後、二次調整を省略するかどうかや、二次調整を行う部分や方法については各個体で異なっている。内底面には共通して指オサエの痕が残る。8・9は胴部中位を工具によって粗く研磨し、口縁部は横ナデで仕上げている。8は外面全体に顔料を塗布しているのか、器面は褐色をなす。全体の1/2程度遺存している。10は、外底部のケズリ痕をナデ消している。8～10は、外底部に黒斑がつく。11は、胴部上半を工具ナデ、口縁部は横ナデで仕上げる。12は、口縁部から胴部上半の外面を横ナデ調整。口縁には若干のゆがみがあり、体部上半の内面には凹凸のある粘土接合痕がみられる。13は、内外面の二次調整を完全に省略しており、体部内面に粘土接合痕が残る。11・13は、口縁部から底部まで外面にひろく黒斑がついており、横倒しの状態で焼成されたことがわかる。14は、二次調整の範囲が狭く、口縁部周辺のみ横ナデする。14は焼成があまく内面は黒色となる。一方、15・16は、口縁部全体を横ナデして仕上げている。15の外面には黒色の顔料が塗布されていたようである。16には外底部と口縁内面に不整形の黒斑がつく。9・15・16の胎土は橙色を呈する。

17～19・29～31は高杯。17はR6、18はR12、19はR2、29はR16、30はR15、31はR14としてとりあげた。壺と比べて胎土の橙色味が強く、19は明橙色を呈する。小型丸底壺と同様に製作技法は粗雑化している。基本的には、坏部の屈曲部分をケズって形を整え、全体をハケ調整し、その後坏部内外面と脚部外面を二次調整するが、二次調整の部分や方法については各個体で異なり、二次調整を省略する個体もある。17は、坏部・脚部の外面をナデで仕上げている。坏部の内面には暗文のような放射状の工具ナデが残る。18・29は、内面の二次調整を省略し、坏部・脚部の外面のみナデ調整する。18の裾部内面にはケズリが入る。30は、坏部の調整は磨滅して観察できない。脚部外面には縦方向のミガキのような工具ナデ、脚部内面には横方向のケズリがみられる。31は、内外面ともにナデ調整する。脚部内外面は30と同様である。19は、脚部のみ縦方向に研磨する。坏部内面は磨滅しており調整は不明。裾部は4箇所穿孔され、坏部のみ1/3程度欠損する。製作技法は粗雑化しているが、他の出土高杯に比べ古い時期に位置づけられる。

21・22は土師器甕である。21は、全体に磨滅しており調整が不明瞭である。外面は、全体的にハケの後にタタキで調整されているが、胴部下半にはタタキの痕跡がみられず、ケズリで仕上げたようである。口縁部内面はハケ調整。胴部下半に黒斑がつく。21は、R1～R19等の土器よりも古く、古墳時代前期初頭から前半に位置付けられる。22は、内面をへらケズリ調整する。外面は火をうけて器面が剥落しており、調整は観察できない。口縁部から胴部上半の外面に黒斑、内面の胴部下半にコゲが残る。

23～25は鉢。23はR13としてとりあげた。23は、外面・内底部をハケ、内面をケズリ、口縁部を横ナデして仕上げている。口縁部の一部は、横ナデが不足しているためか、器壁が分厚くなっている。24・25はともに褐色を呈する。24・25は、指オサエで成形した後、内外面ともに工具によるナデで調整する。ともに、口縁部は指オサエしたままになっているため、水平をなさない。25の外面には大きく黒斑がつく。

26～28は弥生時代中期の器台。胎土は黄褐色を呈し、1～3mm程度の白色粒を多く含む。27・28はそれぞれSP2・SP6から出土したが、貼床や覆土等の破片と接合している。26～28は基本的に外面ハケ、内面工具ナデで調整する。口縁部・裾部は横ナデされて、28の口縁部外面には粘土がはみ出している。

32は、目の粗い砂岩製の砥石で、重量は56g。上面と下面の2面を使用している。33は頁岩製の磨製

石剣。全幅3.5cm、全長約10.4cm、厚さ0.7cmで、重量34.09gをはかる。磨滅が進んでおり、表面は荒れている。34は漆黒黒曜石製の鎌である。縦長剥片を使用しており、側縁は上半部で屈曲して先端へと続く。重量は1.09gである。縄文時代後期のものと考えられる。35は目の細かい砥石で、3面使用している。重量は148g。石材は黒灰色を呈する。凝灰岩か。

36は、8に示した小型丸底壺とともに出土した赤色を呈する岩石である(写真11・37)。図示した片以外に小片が多量に出土しており、重量は、図示した36が39.7g、小片と合計すると555.8gをはかる。出土した際は、現在よりも鮮やかな赤色であった。本来の岩石の節理は、B面に図示したような斜め方向であるが、A面やC面はこれに対して平行せずに面をなしている。このことから、A面やC面は人為的につくりだされた可能性が高い。ただし、磨滅が進んでおり、表面に研磨や加工の痕跡はみられない。36は、祭祀土器とともに出土しており、かつ、遺跡から赤く発色する石がほかに出土しないことから、祭祀の過程で何らかの役割をもっていた遺物であると考えられる。科学分析の結果、火山性堆積物が粘土化したものであり、その由来は、島原・阿蘇・九重などの地熱地帯に求められることが判明した。詳細は附編を参照されたい(P.105～108)。

SC22 (第40図・写真38・39)

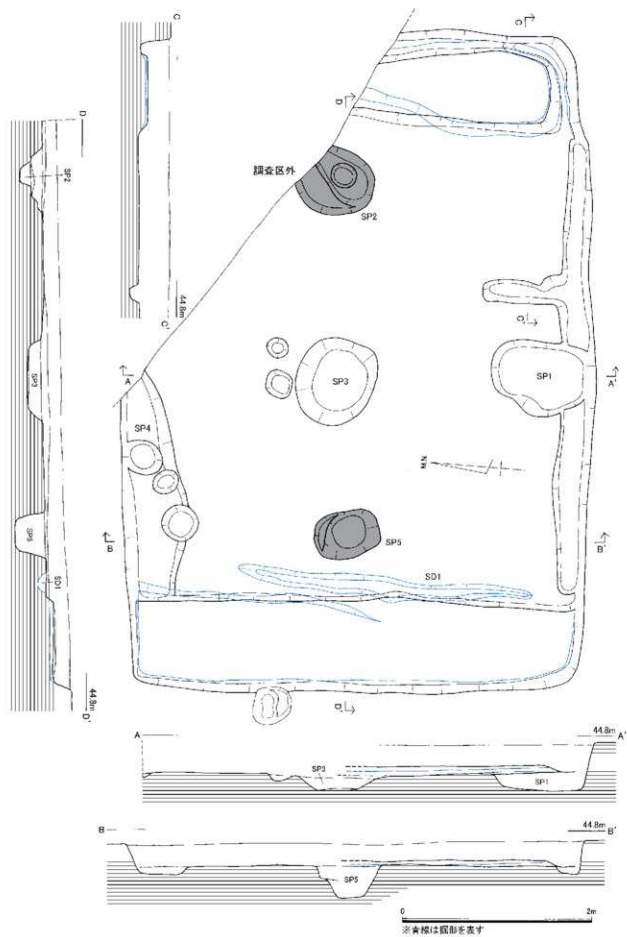
調査区の北端、SC24の北東側に位置する竪穴住居で、SC24の埋没後に掘削されている。北東隅は調査区外へと続く。平面形は、主軸を東西方向(N-85°-E)にとる長方形をなし、長軸7.1m、短軸4.9mをはかる。標高44.4m～44.75mで検出した。遺存状況は比較的良好で、検出面からの床面までは最大で30cm程度残存している。主柱穴等に重複がみられないことから、建て替えはなかったと考えられる。覆土は、黒褐色土(10YR3/1)を主体とする。遺物は、検出面から15cmまでを「上層」、ベッド状遺構検出面までを「下層」、ベッド状遺構検出面以下を「最下層」としてとりあげた。

SC22は、両短辺側に、幅約1mのベッド状遺構を備えている。これらは、黒褐色土(10YR3/3)に灰黄褐色土(10YR4/2)が少量混じる土で形成されている。東側のベッド状遺構には、壁際に沿って幅25cm、深さ8cmの壁溝がめぐる。床面は、住居中央部から南側の一部に、ベッド状遺構と同様の土を貼って整えているが、大半が地山を床面としている。検出面からベッド状遺構までの深さは15cm～25cmで、ベッド状遺構と貼床面の比高差は大きいところで12cmである。

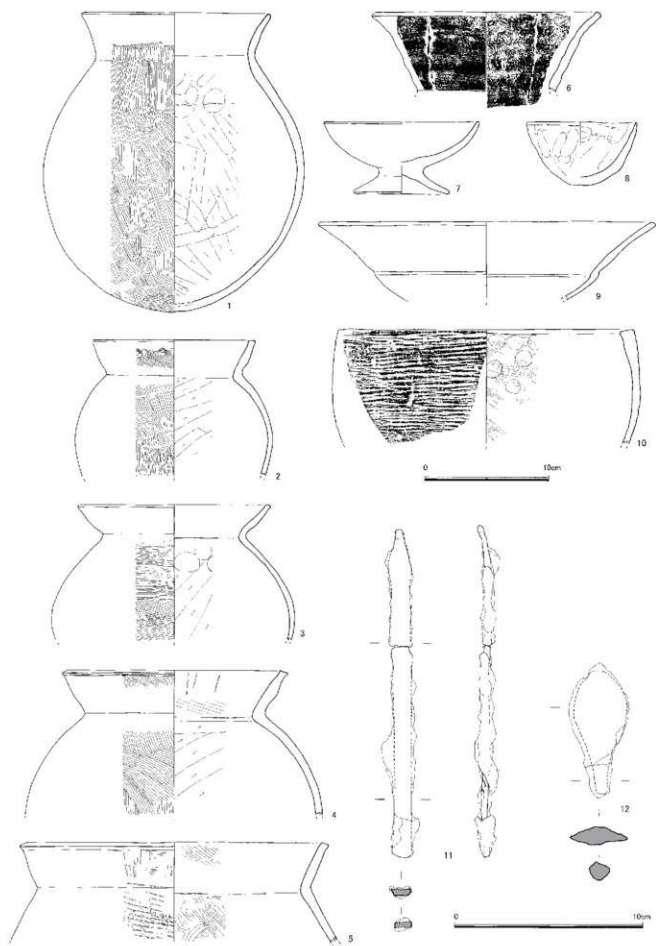
主柱穴は2本で、短辺側で検出したSP2とSP5である。柱間距離は芯間で3.8mをはかる。柱穴の平面形は不整形をなし、径は長軸50cm～80cm、貼床上面からの深さは約25cm～35cmである。SP2では、径25cmの柱痕跡が底面で確認できた。SP2とSP5の中間地点には、深さ15cm程度の浅いくぼみ状の土坑SP3が配置されている。覆土に焼土等は含まず、硬化面も確認されなかった。

また、南側長辺と北側長辺において壁溝を検出した。南側長辺の壁溝からは、間仕切りのような溝が住居中央に向かって伸びており、中央部には壁際土坑SP1が設けられている。一方、北側の長辺の壁溝は幅が広い。壁溝の深さはともに床面から5cm～10cmである。SP1は長軸1.1m、短軸0.8mの楕円形をなす土坑で、底面に凹凸はみられない。

SC22は、2本の主柱を有し、短辺側のみベッド状遺構を備えている。このような構造は、古墳時期に通有の竪穴住居としては比較的古い段階のもので、第41図3・5・9・10等の土器の時期にふさわしい。しかし、出土した遺物のうち、SP5の南側からとまって出土した第41図1や、最下層から出土した第41図2・4は、古墳時代中期初頭に位置付けられる。したがって、SC22は、SC24が埋没した古墳時代前期初頭以降に掘削され、古墳時代中期初頭に埋没を開始した住居であることは明確であるが、住居の構造と埋没開始時期を示す出土遺物に矛盾があるため、住居が廃絶された後、なんらかの理由で長期にわたって埋没がすすまなかった可能性も考えられる。



第40図 SC22実測図 (1/40)



第41図 SC22出土遺物実測図 (1/2・1/3)

SC22出土遺物 (第41図)

出土した遺物の残存率は1/2以下のものが多いが、遺存状況が比較的良好なものも含まれている。また、出土した土師器の胎土や色調は、SC04と同様の傾向にある。

1～5は土師器甕で、1・2・4は古墳時代中期初頭に属する。1はSP5の南側から、2・4は最下層から出土した。1～4は、外面ハケ、内面ケズリで調整し、口縁部は横ナデで仕上げている。1はほぼ完形で、胎土は橙色から褐色を呈する。胴部中位以下の全面に煤、内底面には黒斑がみられる。内底面の一部は器面が剥離している。2も、胎土は橙色味が強い。外面に黒斑、内面胴部下位にコゲ、口縁部と胴部下半の外面に煤が付着している。3は、肩部に横位のハケが3単位めぐり、その上から工具小口を押しつけて施文する。圧痕は、全体で4箇所ほどあったようで、うち2箇所が残っている。口縁部と胴部中位に煤がつく。4は、口縁部端部を丁寧に横ナデしており、面取りしたようになっている。内面にコゲが斑状に残る。5は、外面を胴部から口縁部までタタキによって成形した後ハケで調整している。内面はハケ調整。3・5は、1・2・4より古い時期に位置付けられ、SC01ほか古墳時代前期初頭から前期前半の土器群と同じような胎土・色調を呈する。3は上層から出土している。

6は布留系の壺。内外面ともに丁寧に横ナデで仕上げている。

7・8・10は鉢。7は脚付。磨滅がすすんでおり、調整は観察できない。胎土は礫粒を含まず砂粒を含み、精緻である。8はミニチュアで、内外面ともに指オサエで形を整えた後に、工具によりナデている。口縁部を1/3程度欠損するがほぼ完形。外面にはうすい黒斑がつく。10は、外面タタキ。口縁部端部から内面はハケ調整する。胎土は橙褐色を呈し、外面には煤・黒斑、内面にはコゲが付着する。

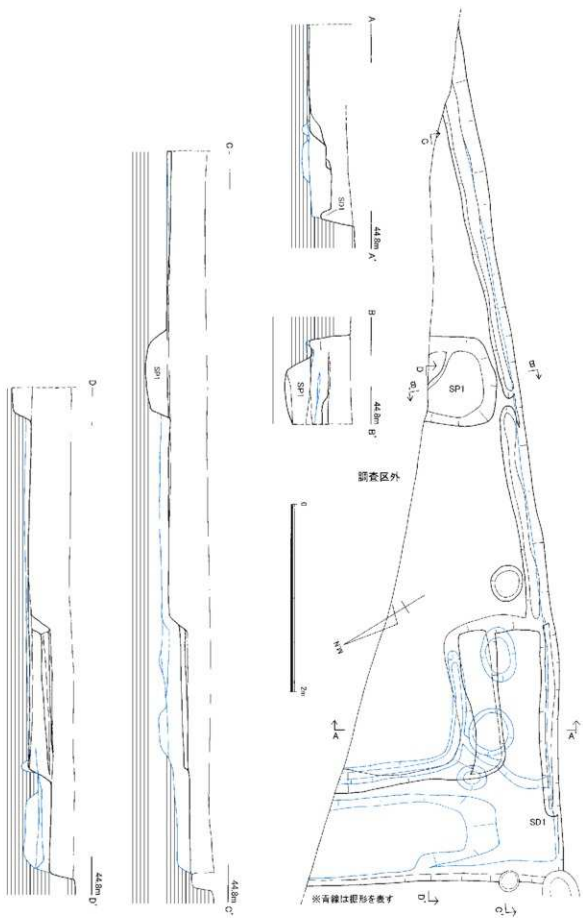
9は最下層から出土した高杯。磨滅が著しく、調整は不明である。時期的には3・5に類似する。

11は鉄銚、12は鉄罐である。11・12ともに劣化が著しく、錆の下は空洞化している部分が多い。11はSP2から出土したもので、全長17.4cm、全幅1.05cmをはかる。断面形は長方形であるが、図に示したように一部ステップをなす加工痕が残る。先端部の幅はやや広くなる。12は最下層から出土した。錆を取り去ることができないほど劣化が進んでいるため、実測図に示した平面形の点線はX線写真からおこしており、断面は錆も含んだ状態で測っている。

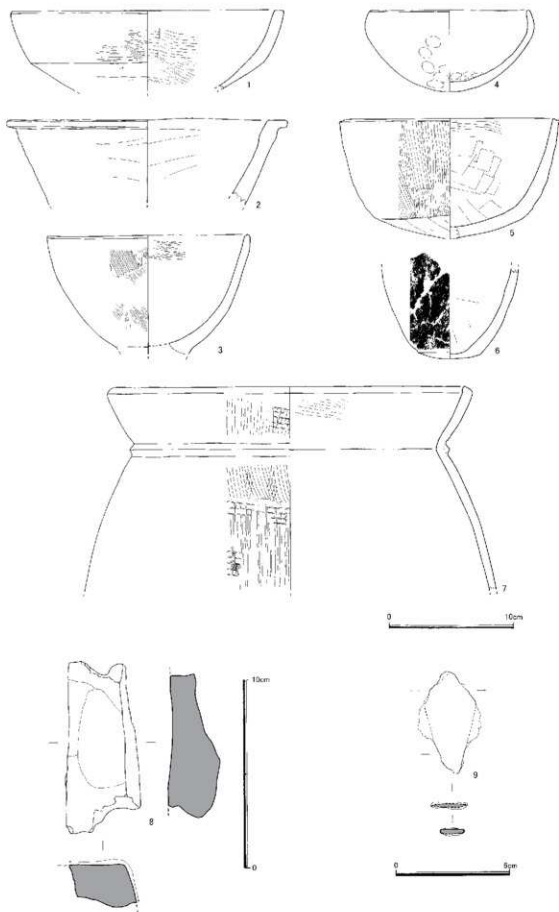
SC23 (第42図・写真40・41)

調査区の北端、SC24の北西側に位置する堅穴住居である。平面形は、主軸を東西方向(N-64°-W)にとる長方形をなす。住居の大半が調査区外へと続くため、住居の正確な規模や内部構造は不明であるが、長軸は9.1m、短軸は2.8mを超えており、SC24に類似する大型の堅穴住居といえる。検出面の標高は、44.6m前後。遺存状況は比較的良好で、検出面からの床面までは最大で45cm程度も残存している。覆土は、灰黄褐色土(10YR4/2)を少量含む暗褐色土(10YR3/3)を主体とする。遺物は、検出面から15cmまでを「上層」、ベッド状遺構検出面までを「下層」、ベッド状遺構検出面以下を「最下層」としてとりあげた。

SC23の西側短辺には、幅約1.1mのベッド状遺構を備えている。このベッド状遺構は、にがい黄褐色土(10YR4/3)と黒褐色土(10YR3/1)の混合土で形成されており、南西隅で折れ曲がりL字状となる。また、南側長辺では、一部低くなる部分があり、階段状をなしている。東側の短辺は調査区外にあるため、反対側のベッド状遺構の状況はわからない。床面は、ベッド状遺構と同様の土を貼って整えている。検出面からベッド状遺構までの深さは25cmで、ベッド状遺構と貼床面の比高差は大きいところで25cmをはかる。



第42図 SC23実測図 (1/40)



第43図 SC23出土遺物実測図 (1/2・1/3)

また、南側長辺では、断続的に、幅15cm～25cm、検出面からの深さ5cm～10cmの壁溝が確認され、中央部では、壁溝に接しない形で壁際土坑SP1を検出した。SP1は、直径92cm、床面からの深さ25cmの不整形円形をなす土坑で、底面に凹凸はみられない。なお、主柱穴や炉は、調査区外に存在すると考えられる。

SC23は検出した範囲が限定されており、SC23から出土した遺物はほかの住居に比べて少ないため、埋没時期を判断しにくい。第43図に示した4・5・7は覆土下層から出土したもので、弥生時代終末期に位置づけられるが、残存率はすべて1/2以下である。

SC23出土遺物（第43図）

出土した遺物の遺存状況は悪く、胎土には径1～3mm程度の白色粒が多く含まれている。

1～6は土師器鉢。4・5は下層から出土した。1・2・5は器壁が厚い。1は、屈曲する体部下半をケズって形を整えた後に、内外面にハケ調整している。口縁端部は面取りされたようになっているが、水平をなさない。2は、内外面ともに横ナデ調整される。暗褐色を呈する。3は、粘土接合面で欠損しているが底部に脚がつく。胎土は橙色。磨滅が進んでおり調整が明瞭でないが、内外面ともにハケ調整で仕上げたようである。4は、磨滅が著しく、指オサエの痕跡しか観察できない。全体に暗褐色を呈し、内外面ともに煤・コゲのようなものがみられる。5も底部を削りだして、外面ハケ、内面横方向の工具ナデで仕上げている。6は外面に焼成時の縮みがひどく縦方向の皺がよっている。磨滅しており調整は不明であるが、内面は工具によってナデている。

7は頭部に貼付突帯を有する甕。下層から出土した。胎土は橙色味が強く、外面はタタキの後にハケ調整している。内面の調整は磨滅により観察できない。胴部中位外面に煤が付着している。

8は下層から出土した目の細かい砥石。残存する2面を砥面としている。

9は鉄鏝。下層から出土した。錆を取り去ることができないほど劣化が著しい。実測図に示した平面形の点線はX線写真からおこしたものである。先端は欠損したか曲っているとおもわれる。

SC24（第44図・写真42～48）

調査区の中央部に位置する堅穴住居で、南東部をSC20に、北東隅をSC22にきられる。平面形は、主軸を東西方向（N-69°-W）に作る長方形をなし、長軸10.2m、短軸7.5m、床面積76.5m²をはかる。同様の構造をもつSC01・02・11・13・22の床面積が24m²～36m²であることと比べれば、SC24が通常の2倍以上の規模を有する大型の住居であることがわかる。また、SC23およびⅡ区SC0201とほぼ主軸をそろえ、規模も類似することから、これら3つの住居は、同時併存していたかどうかは立証できないが、なんらかの意味をもって計画的に配置されていたと考えられる。

SC24は、標高44.75m～45.1mで検出した。遺存状況は比較的良好で、検出面からの床面までは、南側で45cm、北側で25cm程度残存している。主柱穴が2つ検出されたことから、建て替えがあった可能性が高い。調査当初は、第4・5図に示した4層と遺構覆土との区別がつきにくく、SC24自体が2つの住居の切りあいと誤認してしまったため、ベッド状遺構を検出するまで、SC20との新旧関係や住居の構造が把握できなかった。このため、SC20との切りあい部分を中心に、住居の構造に誤りがある可能性がある。遺物は、ベッド状遺構検出面までを「上層」、それ以下を「下層」と区分して取り上げた。覆土は、暗褐色土（10YR3/3）～黒褐色土（10YR3/1）を主体とする。ベッド状遺構検出面前後では、住居の北側を中心に木炭塊や木炭粒、焼土を多く検出し、下層の覆土には焼土と木炭を多量に含んでいた。このことから、SC24は、住居廃絶後に火をうけた可能性がある。

SC24では、南側長辺の一部をのぞいて、幅約1m～1.25mのベッド状遺構を検出した。住居南東部では

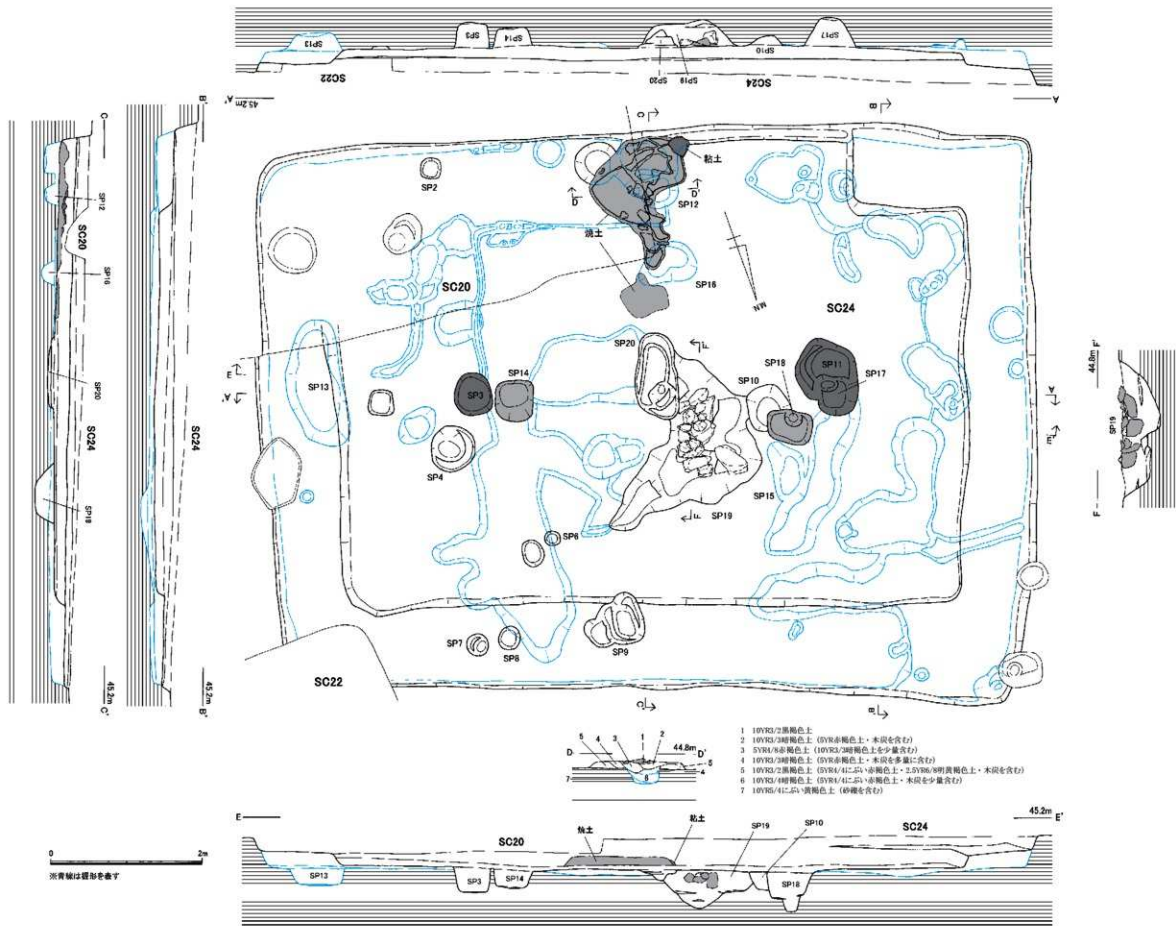
SC201に破壊されて消滅しているが、南側長辺の中央部をのぞいて、住居の壁をほぼ1周めぐる形態をなしていたと考えられる。これらは、黒褐色土に褐色土(10YR4/4)ブロックが混じる土で形成されており、ベッド状遺構の上面から壁溝等は検出されなかった。床面は、黒褐色土にオリーブ褐色土(2.5YR4/4)ブロックが混じる土と、黄褐色土(10YR5/6)に暗褐色土ブロックが混じる土で整えられている。検出面からベッド状遺構までの深さは、南側で25cm、北側で12cmで、ベッド状遺構と貼床面の比高差は大きいところで23cmである。

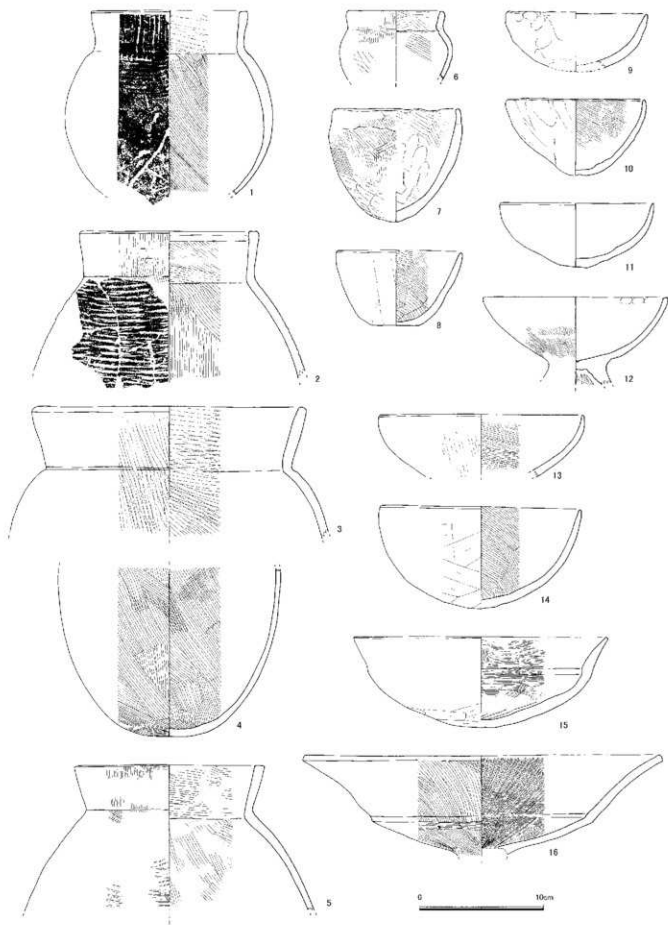
主柱穴は2本で、短辺側で検出したSP3・14とSP18・17である。重複がないため新旧関係は証明できないが、柱間距離が4.25mと共通することから、SP3・SP18、SP14・SP17の組み合わせで、建て替えがあったと考えたい。柱穴の平面形は不整形形をなし、径は50cm～60cm、貼床上面からの深さは25cm～55cmをはかる。SP17・18では、掘形底面において径25cmの柱痕跡が確認できた。また、これらの主柱穴の中間にあたる住居の中央部分では、SP20と、集石遺構SP19が検出された。SP20は、深さ10cmをはかる浅いくぼみ状を呈するが、最も深い部分では、径45cm、検出面からの深さ25cmの柱穴状をなす。一方、SP19は、全長2.5m、全幅2m、床面からの深さ0.5mをはかる三日月形の不整形土坑に、人頭大の石を並べて詰めたような遺構で、立面図を示した部分については(F-F')、石を地面に対して斜めに差し込むように配置している。SP19の覆土は貼床の土と同じようなもので、各石に火をうけた痕跡や加工痕等はみられない。調査区全体の傾向として地山に礫が含まれていることから、人為的なものではない可能性も考えたが、SC24周辺の地山に、調査区の東側と西側に比べてとくに礫が集中する状況ではなかった。また、SC10でも同様の遺構が確認されており、石の配置が整っていることから遺構と判断した。遺構の性格は不明である。

このほかに、南側長辺では、壁溝と焼土溜を検出した。壁溝の幅は22cm、深さは3cmをはかる。焼土溜は、南側長辺のほぼ中央部に位置し、住居検出面から深さ28cmのところ検出した。長軸は1.75m、短軸1.25mの範囲に不整形に広がっており、貼床面からは10cm程度の厚さがある。焼土溜には、白色粘土塊1つと拳大の石が複数含まれているが、これらに組まれていた様子はみられなかった。また、焼土溜の下には、深さ20cm程度の不整形のくぼみを検出しており、この焼土溜のすぐ北側には、焼土の集積が確認された。焼土溜からは、第45・46図に示した6・23が出土している。土層断面D-D'に示したとおり、各焼土層はくぼみ中央部に向かって落ち込むように堆積しており、住居が使用されていた時点では、焼土溜に含まれる石や白色粘土塊がなんらかの構造をなして、炉や竈の役割を担っていたのかもしれない。構造材となっていた石や白色粘土は、持ち去られたのであろうか。

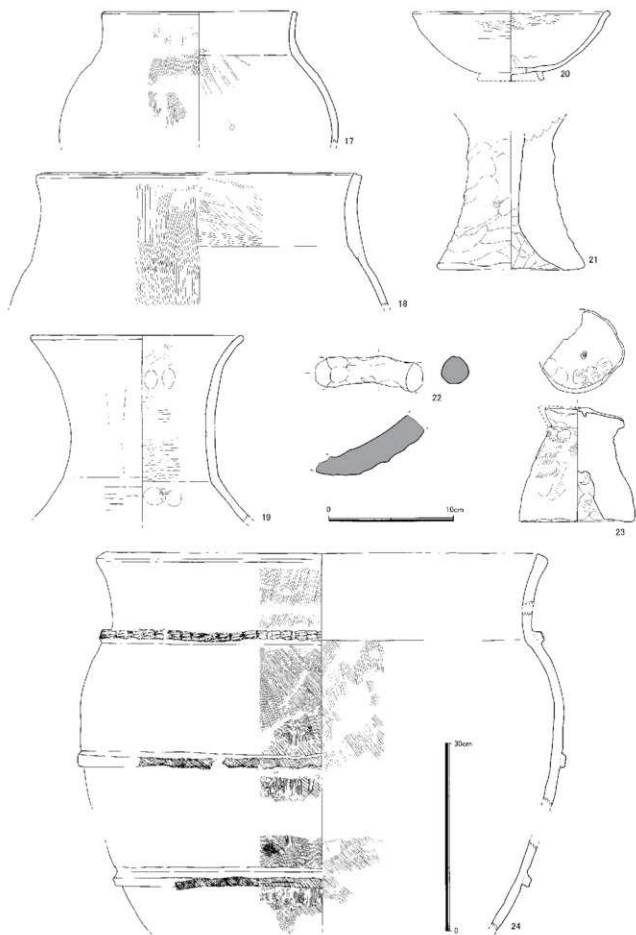
一方、北側長辺の中央部では、ベッド状遺構の上面でSP9が検出された。長軸75cm、短軸65cmの不整形楕円形を呈する土坑で、住居中央部のSP19・20を挟んで、焼土溜と対称の位置に配置されている。壁際土坑は、ベッド状遺構が途切れた空間の床面に、壁に接するように設置されている事例が多いため、SP9が壁際土坑と呼ぶべきかどうかは判断できなかった。

SC24は、床面積が大きいにもかかわらず、時期や器形がわかる出土遺物が少ない。また、覆土下層や焼土溜から出土した遺物は、第45・46図に示した1・4・7・11・13・15・16・17・18・21・23で、在地系の甕や鉢が中心である。このため、時期をしばらくむのが難しいが、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭には埋没が開始した住居と考えておきたい。なお、下層から出土した遺物のうち、第45図2・第46図18は上層から出土した片と接合しており、SC24は比較的短時間のうちに埋没したと推測できる。





第45图 SC24出土物实测图1(1/3)



第46図 SC24出土遺物実測図2 (1/3・1/6)

SC24出土遺物 (第45・46図)

出土した遺物の残存率はほとんどが1/2以下で、遺存状況は良くない。また、出土した土師器の胎土や色調は、SC01と同様の傾向にある。

1～5・17・18・24は土師器甕。1・4・17・18は下層から出土した。1は、外面をタタキで成形した後、外底部をヘラケズリで整え、胴部上半から内面をハケ調整して仕上げている。口縁部内面と口縁から胴部上半にかけて黒斑が、胴部上半に煤が付着する。2も、外面はタタキ、口縁部から内面はハケ調整する。口縁部と胴部中位の外面にそれぞれ黒斑がつく。3は、内外面ハケ調整。内面にはコグ、外面には煤と被熱による円形剥離痕がみられる。一方、破断面にも煤が付着していることから、廃棄された後にも火をうけたことがわかる。4も内外面ハケ調整であるが、外面底部のハケは粗く強いもので器面の砂粒が動いている。外底部に黒斑が残る。5は、磨滅が進んでおり調整が不明瞭である。外面はタタキの後ハケ調整され、内面もハケ調整で仕上げている。17・18は、内外面ともにハケ調整される。17は口縁部と胴部中位に黒斑がつく。18は磨滅していて不明瞭であるが、内面も粗いハケ調整である。内面にコグが、外面胴部上半には黒斑が付着している。24は上層から出土したもので、SC22およびSC23から出土した片とも接合している。基本的にタタキで成形した後、内外面ともにハケ調整している。断面形状形をなす突帯が3箇所につきつけられているが、最上部のものは工具を真横に押しつけて施し、残りのものはハケ調整の工具で器面を整えるように施している。胴部中位外面の一部に黒斑がつく。

6・19は壺。6は、住居の南辺中央部で検出した焼土溜より出土したミニチュアである。外面の胴部下半は工具によるナデ、それ以外はハケ調整している。被熱した痕跡はみられない。19は上層からの出土で、口縁部のみ反転復元して実測した。有明海沿岸で出土する形態の壺である。胎土は淡黄褐色を呈する径3mm程度の白色粒を多く含むので、他の土器と変わらない。磨滅が著しく調整は不明瞭である。外面は口縁部には縦方向、胴部上半には横方向の工具痕が観察できるが、ナデなのかハケなのかはつきりしない。内面は指オサエとハケ調整で仕上げている。

7～15は鉢。7・11・15は下層から出土した。口縁部は水平をなさないものがほとんどである。7は、指で成形した後外底部をケズリで整え、内外面をハケや工具でナデしているが、口縁部外面には粘土接合痕が残る。口縁部から坯部上半にかけて外面にうすく煤がつく。8は、内面ハケ調整、外面縦方向のケズリで仕上げている。9・10は、外底部を工具ナデで整え、外面を指オサエ、内面を条線のはいる工具ナデまたはハケで調整する。8・9は全体の約2/3遺存しており、7・8・10の外底部には黒斑がみられる。11は磨滅しており調整は不明である。内面はナデ、外面はケズリか。口縁部に黒斑、外底面に煤が付着している。12は、脚がつく鉢。磨滅が進んでおり、坯部外面下半と脚部内面のハケ調整しか観察できない。13は内外面ハケ調整後、外面のみケズリのような粗い横方向のナデ調整をおこなっている。14は、ほぼ完形。内面はハケ調整、外面はヘラケズリで仕上げている。外面全体に煤が、内面下部には帯状にコグが付着しており、煮炊きに使用した可能性が高い。15は、坯部中位が屈曲する。外底部はケズリ、内底部は工具によるナデで整え、外面はナデ、内面はハケで仕上げている。口縁部から体部にかけて黒斑が残る。

16は高杯である。胎土は橙色を呈し、礫粒を含まない精良なものを用いている。坯部内面の屈曲部以下は逆時計周りに斜め方向のハケで調整され、その後内面全体に丁寧に放射状の暗文をほどこしている。磨滅のため外面の研磨は観察できない。

20は上層から出土した瓦器碗。磨滅が著しいが、外面胴部上半から内面を燻して研磨している。

21は焼土溜の西側の床面直上から出土した器台。外面には成形時の指オサエがそのまま残っている。

22は上層から出土した不明土製品である。胎土はやや褐色を呈し、指で成形した後工具でナデている。匙形土製品の把手と想定して実測した。

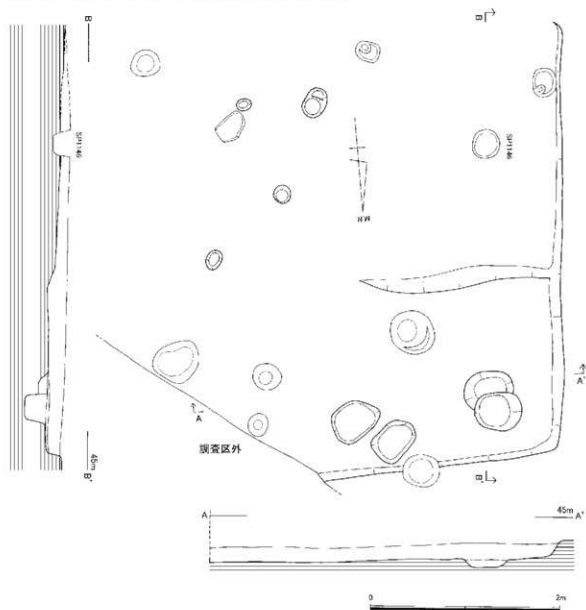
23は支脚で、住居の南辺中央部で検出した焼土溜から出土した。上端には粘土接合痕がみられ、内外面は指オサエ後にハケ調整して仕上げている。

SX25 (第47図)

調査区の北西部、SC16の西側で検出した。当初は、黒色土(10YR2/1)の覆土をもつ竪穴住居と考え、掘削を始めたが、竪穴住居の構造を検出することはできなかった。標高44.7~44.8mで検出し、掘削の範囲は、南北4.6m、東西3.8m、検出面から深さ20cmをはかる。掘形底面まで削平が及んだ竪穴住居である可能性も残されているが、第4・5図に示した4層と弥生時代の遺構の覆土の区別がつきにくい状態となっていた範囲を、竪穴住居と誤認して掘削した可能性が高い。

SX25出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器の小片と黒曜石剥片が出土した。



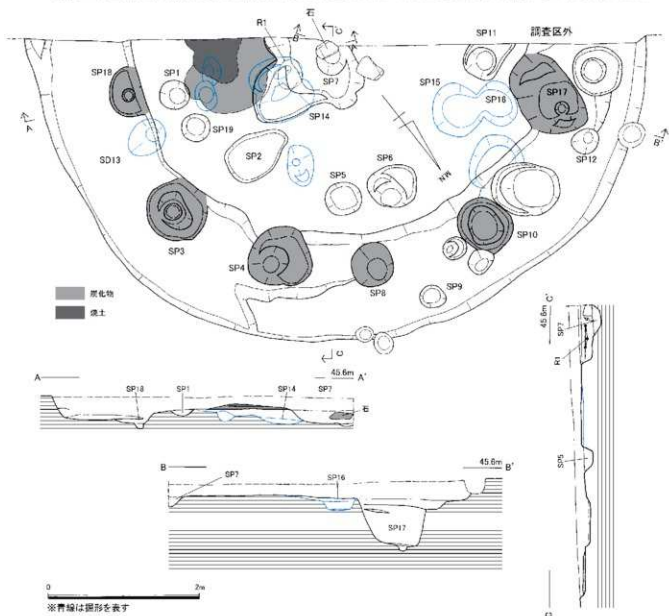
第47図 SX25実測図(1/40)

SC26 (第48図・写真49～51)

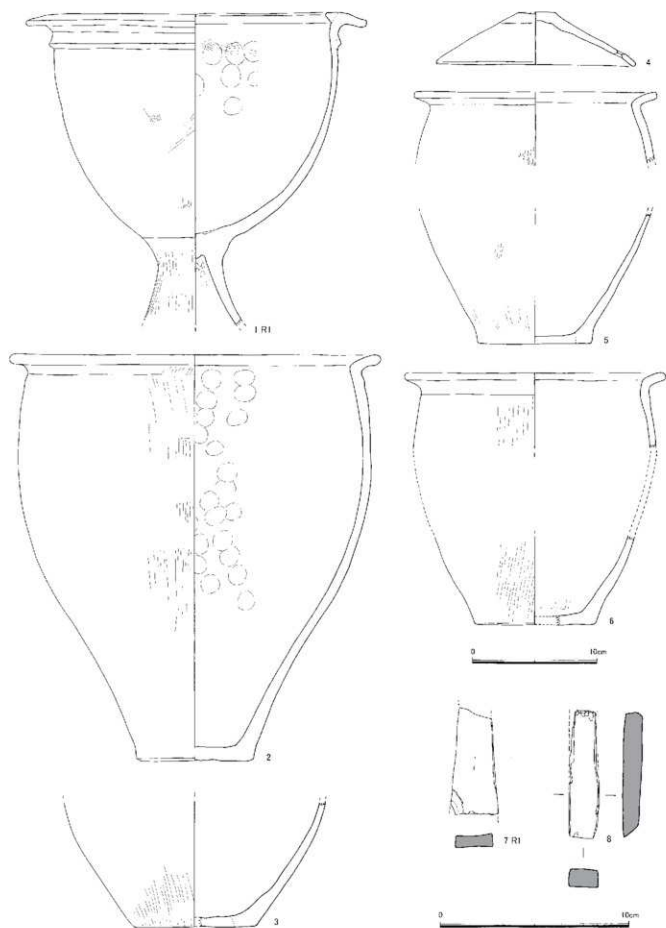
調査区の南端中央部に位置する竪穴住居である。南側半分は調査区外へと続く。平面形は円形で、直径は8.1mをはかる比較的大型の住居である。覆土は、暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3) を主体とし、床面に近くなると、黄褐色土 (2.5Y5/4) ・にぶい黄色土 (2.5Y6/4) がブロック状に混じる。

SC26は、標高45.2m～45.45mで検出したため、検出面からの床面までは最大で25cm程度しか確認することができなかった。しかし、調査区南壁土層を検討したところ、本来は深さ45cmほど残存していたことがわかった (第5図)。これは、第5図土層4と、遺構覆土との区別がつきにくく、古墳時代の遺構の調査が終了した後に調査区全体を下げてから、SC26を検出したためである。

床面は基本的には地山で、掘形に凹凸がある中央部分を中心に、黄褐色土・にぶい黄色土ブロックを含む暗褐色土を貼って整えている。壁際は、一段低くなっており、幅1.4m程度の周溝状の構造をなす。中央部床面と壁際床面の比高差は最大で13cmをはかる。主柱穴は、周溝状の低い部分に沿って、12本配置されていたと考えられ、このうち6本を検出した (SP3・4・8・10・17・18)。柱穴の平面形は不整形円形または楕円形をなし、径は55cm～120cmをはかる。床面からの深さは、SP18が



第48図 SC26実測図 (1/50)



第49図 SC26出土遺物実測図 (1/2・1/3)

最も浅く25cmであるが、他の柱穴はおおむね60cm程度である。柱は、柱穴上面や掘形底面で検出した柱痕跡から、径16cm～20cmの材であったと推測され、これらの柱が、1.5m～1.8mの間隔で配置されて小屋組みを支えていたと考えられる。また、柱痕跡が柱穴上面で確認できたことから、住居廃絶時に柱穴は抜き取られなかったと推測される。なお、6本の主柱穴の内側には、SP1・19・2・5・6・11が主柱穴に沿うように検出されたが、これらのうちSP1・19・2・5は浅いくぼみ状の遺構であり、住居の構造に大きくかわる柱穴であったとは考えにくい。

このほかに、住居の中央部で、SP7・14と焼土・炭化物の集積を検出した。焼土・炭化物は、SP7・14の上面とその南東側を中心に1.25m×1mの範囲に広がっており、さらに調査区外へも続くようである。焼土・炭化物の厚さは7cm程度で、周辺に硬化面等は見られない。SP7は、短軸1m、長軸1m以上、床面からの深さ20cmをはかる平面楕円形の遺構と考えられ、底面には柱痕跡のような一段低いくぼみが設けられている。SP7の掘形からは、第49図1・7に示したR1のほか、第49図4・5が出土した。このうち、第49図5はSP1から出土した破片と接合している。一方、SP14はSP7よりも古く、径85cmの不整形を呈する柱穴である。検出面からの深さは30cmをはかる。

SC26は、本調査区の弥生時代の住居の中では、比較的多くの遺物が出土した。第49図に示した出土遺物より、SC26は弥生時代中期末には埋没を開始したと考えられる。

SC26出土遺物（第49図）

出土した遺物の大半が、遺存状況は1/2以下で、磨滅が進んでいるものばかりである。出土した弥生土器は、胎土に径1～3mm程度の白色粒・黒褐色粒を含むもので、淡黄褐色を呈する。胎土は、古墳時代前期の土師器と同様の傾向にあるといえる。

1～3・5・6は弥生土器の甕である。1はR1として取り上げ、5はSP1・SP7、6はSD13から出土した。1は脚がついており、佐賀県東部地域で出土する形態の甕である。外面はハケ調整後ナデ、内面も指オサエの後ハケ調整を行いナデで仕上げている。胴部から脚部の外面に煤が、内面胴部下半にコゲが帯状に付着する。胎土は、白色粒や褐色粒を含むもので、赤味のある淡黄褐色を呈する。形態以外は他の出土土器と変わらない。2は、調整が不明瞭ではあるが、外面は縦ハケ、内面は指オサエがみられる。外面胴部上半に煤が、内面胴部と内底部にコゲが帯状にめぐっており、底部の器面は被熱のためか磨滅して全体が剥離している。3・5は外面ハケ、内面ナデで調整している。6の内面は磨滅により不明。3・6の外底部には黒斑が残る。これらの土器は中期末に位置付けられる。

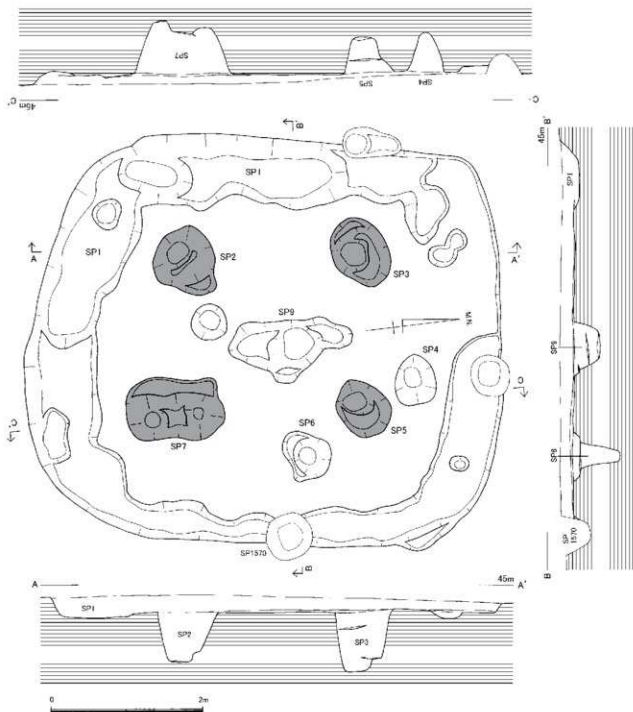
4は壺の蓋である。調整は磨滅により観察できない。外面の一部に黒斑がつく。裾部に2箇所穿孔を有するが、うち1箇所は失われている。

7は、R1としてとりあげた暗灰色を呈する目の細かい砥石。4面すべて使用している。16gをはかる。堆積岩製か。8は扁平片刃石斧。全幅1.6cm、厚さ1cmをはかる。

SC27（第50図・写真52）

調査区の北東部に、SC31の南西側に位置する竪穴住居である。平面形は、南北辺が若干大きい略正方形をなす。主軸を南北方向とすると15°東偏し、長辺6m、短辺5.5mをはかる。標高44.65m～44.85mで検出した。検出面から床面までの深さは、東側で15cm、西側で23cm程度残存している。覆土は、黒褐色土（10YR3/2）を少量含む暗褐色土（10YR3/3）を主体とし、床面に近くなると、にがい黄褐色土（10YR5/4）ブロックを含むようになる。

SC27は、地山を床面とし、壁際に幅35cm～95cm程度の一段低い周溝状の構造を有する。中央部床面と壁際床面の比高差は最大で28cmをはかる。



第50図 SC27実測図 (1/50)

主柱穴は、SP2・3・7・5の4本を確認した。SP7のみ、掘形底面に残る柱痕跡が2つあることから、建て替えの可能性がある。柱穴の平面形は、SP2・3・5は直径80cm～95cmの不整形円形、SP7は長軸125cm、短軸75cmの楕円形をなし、床面からの深さは50cm～80cmである。掘形底面で検出された柱痕跡がそのままの材の径を反映していると仮定すると、柱は径25cmの材であったと推測され、2m～2.6mの間隔で四角形をなすように配置されていた。また、これらの主柱穴の中心では、長軸165cm、短軸85cmをはかる不整形円形のSP9を検出した。SP9は、中央部が床面から35cmと最も深くになっている。このほかに、住居内に地床炉等の遺構は確認できなかった。

SC27から出土した遺物は、時期が判別できるものが少ないため、遺構の時期を推測するのは難しい。ただし、出土遺物中には弥生時代中期の土器が多く、土師器片を含まないことから、SC27は弥生時代中期には埋没を開始した可能性がある。

SC27出土遺物（第53図）

1・2は、縄文土器の浅鉢である。1はSP9から出土した。2は口縁が波状をなす。1・2ともに磨滅が著しいが、黒色磨研されている。また、どちらも胎土に3mm大の白色粒を含んでいる。

3は弥生中期に属する甕である。遺存状況は1/6以下。外面はハケ、内面は縦方向の工具ナデで仕上げている。内面胴部の一部にコゲが付着する。胎土は1mm程度の白色粒を含み、淡褐色を呈する。

14はSP7より出土した比較的目的の細かい砥石。淡褐色の砂岩製で、重量は100gをはかる。4面に使用痕跡がみられるが、上面がくぼんでおり最も使用頻度が高かったとおもわれる。上端下端ともに砥面として使用してはいないが面がつっている。

SC28（第51図・写真53）

調査区の中央部に位置する堅穴住居である。平面形は円形をなすが、住居の南部と西部はSC20・24に破壊されているため、不整形となっている。直径は6.2mと推定される。標高44.5m～44.85mで検出した。遺構の遺存状況は悪く、検出面から床面までの深さは、東側では25cm残存しているが、西側では床面は失われている。覆土は、黒褐色土（10YR3/2）を少量含む暗褐色土（10YR3/3）を主体とする。

SC28は、地山を床面とする。壁際に溝等はめぐるがないが、壁に沿って深さ7cm～10cm程度の小さい柱穴が無数にみられる。配置に規則性などはみられないが、これらの小穴は、住居の壁の構造にかかわる遺構であった可能性が高い。住居の西側では検出できなかったが、これはSC24により床面が削平されたためであろう。

主柱穴は、SP1～8の8本を確認した。それぞれの柱は、狭い所で1.3m、広い所で1.8mの間隔をあけて配置されている。柱穴の平面形はSP4をのぞいて直径45cm～75cmの不整形円形をなし、床面からの深さは45cm～70cmをはかる。SP4だけは、長軸1.35m、短軸1mの平面楕円形の掘形となっており、他の柱穴より大きい。ただし、床面からの深さは他の主柱穴と同様で、65cm程度である。また、これらの主柱穴の中心では、長軸170cm、短軸70cmをはかる楕円形のSP9を検出した。SP9は、南端が床面から35cmと最も深くっており、柱痕跡状となっている。

このほかに、住居内に地床等遺構の確認できなかった。

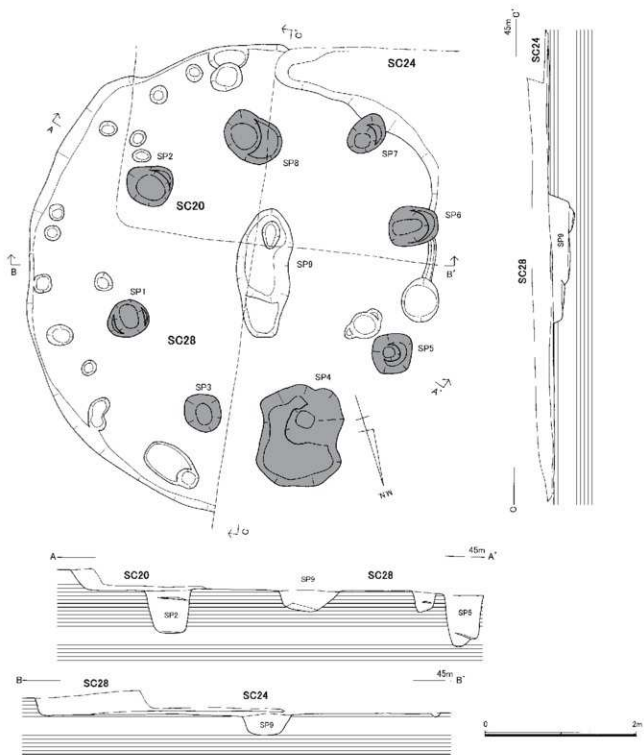
SC28からは黒曜石剥片が多く出土したが、時期が判別できる遺物はごく少量しか出土していないため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、出土遺物には、弥生時代前期末から中期初頭の土器が多く、土師器片を含まないため、SC28は弥生時代前期末～中期初頭には埋没を開始した可能性がある。

SC28出土遺物（第53図）

4～6は弥生土器である。胎土は径1～3mmの礫粒を含み、淡褐色を呈する。4は壺、5は甕で、ともに弥生時代中期初頭に属する。4は、ミガキを意識したような粗い工具ナデによって外面を調整し、内面を工具ナデで仕上げている。外面は暗褐色を呈する。5は、磨滅が進んでおり調整が不明瞭であるが、外面はハケ調整で、煤が付着する。6は弥生時代前期の甕で、SP2から出土した。外面を細かい条線のはいる工具ナデで調整した後に、沈線を2条めぐらせている。内面はハケの後ナデで仕上げている。内面胴部上半の一部に黒斑がつく。4・6ともに、遺存割合は1/6以下である。

7は縄文土器の浅鉢である。磨滅が進んでいるが、黒色磨研している。内面には粘土の接合痕跡が残る。胎土は礫粒を含まず精良である。

15は、比較的目の細かい砥石。淡黄褐色を呈する砂岩製で、重量は237gをはかる。SC27から出土した第53図14の砥石に材質が類似する。図示した2面のみを砥面として使用し、上面のみくぼんでいることから、使用頻度が高かったと推測できる。



第51図 SC28実測図 (1/50)

SC29 (第52図・写真54)

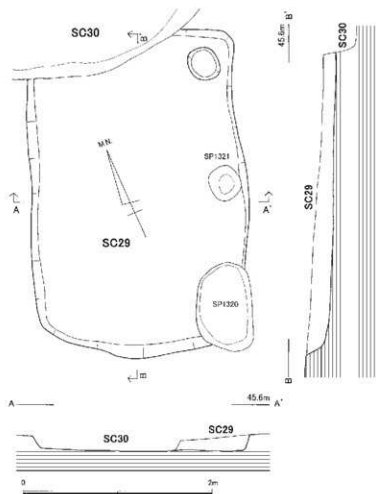
調査区南東部に位置する竪穴住居である。北西隅をSC30にきられている。平面形は、主軸を南北方向(N-22°-E)にとる長方形をなし、長軸3.2m、短軸2.3mをはかる。標高45.25m~45.4mで検出した。床面は地山で、検出面から床面までの深さは25cm程度。覆土は、黒褐色土(10YR3/2)~暗褐色土(7.5YR3/4)を主体とする。検出面から約10cm掘削してからSC30との新旧関係を把握したため、これより上を「検出面」、これより下を「SC29」と区分して、遺物をとりあげた。

床面からは、柱穴、壁溝、地床炉等の遺構は確認できなかった。

SC29から出土した遺物のうち、時期が判別できるものがほとんどないため、遺構の時期を推測するのは難しい。しかし、SC30が掘削される前には、すでに埋没していたことは確実である。

SC29出土遺物

弥生土器片が出土した。



第52図 SC29実測図(1/40)

SC30 (第54図・写真55・56)

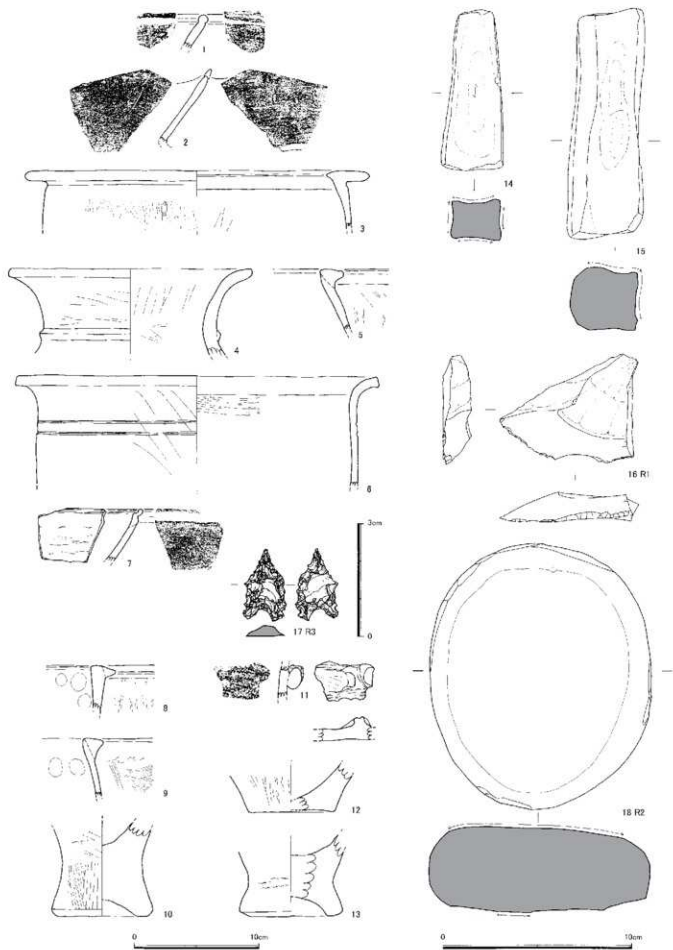
調査区の南東部に位置する竪穴住居である。SC29の埋没後に掘削され、住居の東側はSX12・SC14と攪乱にきられている。平面形は、直径4.7mをはかる円形をなす。標高45m~45.25mで検出した。遺構の遺存状況は比較的良好で、検出面から床面までの深さは35cm残存する。覆土は、黒褐色土(10YR3/2)を少量含む暗褐色土(10YR3/3)を主体とする。

SC30は、地山を床面とする。住居の中央部では、長軸120cm、短軸65cmをはかる楕円形の土坑SP7が検出された。床面からの深さは10cm程度で、浅いくぼみ状のものである。覆土には焼土や木炭粒は含まれない。

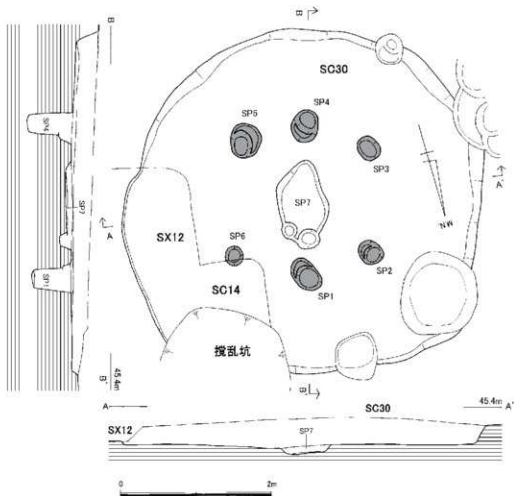
主柱穴は、SP1~6の6本を確認した。6本の柱は、SP7を挟んで、3本ずつ北側(SP1・2・6)と南側(SP3~5)に分かれており、北側は1m間隔、南側は90cm間隔で配置されている。柱穴の平面形は、直径25cm~40cmの不整形をなし、床面からの深さは35cm~60cmをはかる。

このほかに、住居内に壁溝や地床炉等の遺構は確認できなかった。

SC30からは、時期を判別できる土器片はごく少量しか出土していないため、遺構の時期を推定す



第53图 SC27·28·30·31出土遗物实测图 (1/1·1/2·1/3)



第54図 SC30実測図 (1/50)

るのは難しい。ただし、出土遺物には、弥生時代前期末から中期初頭の土器が多く、土師器片を含まないため、SC30は、弥生時代前期末～中期初頭には埋没を開始した可能性がある。

SC30出土遺物 (第53図)

8～10は弥生土器の甕で、弥生時代前期末から中期初頭に属する。8・9はともに、内面に指オサエ、外面はハケで調整する。9の外面には、口縁端部の突帯を貼りつけたときに生じた粘土の接合痕跡が残っている。10は、内面に全面煤が付着し、外底部に黒斑がつく。

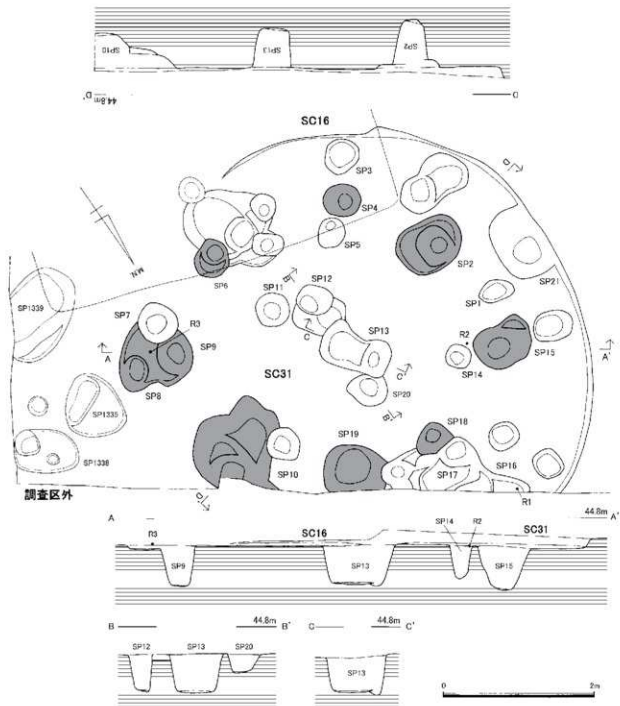
SC31 (第55図・写真57)

調査区の北東隅に位置する竪穴住居である。住居の北半分は調査区外へと続く。また、南側をSC16にきられている上に、全体に遺存状況が悪く、検出面から床面までの深さは、西側では15cm残存しているが、東側では床面が完全に失われている。このため、平面形が円形をなすことはわかるが、住居の正確な規模は分からない。直径は16.6mと推定される。標高44.45m～44.6mで検出した。覆土は、黒褐色土 (10YR3/2) を主体とする。

SC31は、地山を床面とする。支柱穴は、SP2・4・6・8・10・15・18・19の8本を確認した。それぞれの柱は、狭い所で1.2m、広い所で1.8mの間隔をあけて配置されている。柱穴の平面形は、径45cm～125cmの不整円形から不整楕円形を呈するもので、形も規模もばらばらである。ただし、床面からの深さは、42cm～64cmとある程度そうろう。また、これらの支柱穴の周辺には、規模の類似す

る柱穴が多く検出されており、建て替えがあった可能性も考えられるが、まとめきれなかった。

住居の中央部では、平面楕円形のSP13と、これを挟むように配置された円形のSP12・20を検出した。弥生時代前期に事例の多い、いわゆる松菊里型住居の中央土坑に類似している。SP13は、長軸95cm、短軸50cm、床面からの深さ55cm、SP12・20は、径40cm、床面からの深さは25cmと50cmをはかる。これらの柱穴の覆土等に特筆すべき特徴はない。一方、住居の西側では、支柱穴SP2とSP15の間の壁際に接するように設けられたSP21を検出した。長軸1m、短軸65cmの楕円形をなし、床面からの深さは20cmと比較的浅い。出入口の痕跡である可能性もある。



第55図 SC31実測図 (1/50)

このほかに、住居内に壁溝や地床炉等の遺構は確認できなかった。

SC31では、住居の北東部を中心に黒曜石の剥片が多く出土したが、時期が判別できる遺物はごく少量しか出土していないため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、出土遺物には、弥生時代前期末から中期初頭の土器が多く、土師器片を含まないことから、SC31は弥生時代前期末～中期初頭に埋没を開始した可能性がある。

SC31出土遺物（第53図）

11は縄文土器深鉢の胴部の破片である。屈曲せず直線的な破片であるため、傾きが良くわからなかった。誤っている可能性が高い。粘土を突起状に貼りつけて装飾し、条痕で調整する。内面も磨滅しているが条痕調整である。胎土は0.5～3mmの礫粒を少量含むもので、赤色粒や雲母も少量みられる。外面はにぶい褐色、内面は明褐色を呈する。晩期の所産と考えられる。

12・13は弥生土器の甕。胎土は径1～5mmの白色粒を多量に含む。12は中期のもので、外底面は丁寧なナデ、外面はハケで調整する。内面は磨滅がすすみ、調整は不明である。淡褐色を呈する。13は橙色で、内面にコゲが付着する。外面に工具痕がみられるものの、全体が磨滅しており、調整は観察できない。前期末から中期初頭の所産である。

16はR1、17はR3、18はR2としてとりあげた。16は古銅輝石安山岩製削器で、図示した部分を刃部として加工している。重量は51.13gをはかる。17は、漆黒黒曜石製の鎌で、重量は0.63g。剥片鎌のながれをくむもので、屈曲部以下が鋸歯状となる。縄文時代中期の所産である。18は磨石で、重量は1337gをはかる。石材はやや暗い灰色。両端は平坦をなすため、面取り加工したとおもわれる。上面と下面を使用しているが、下面は1/3程度表面が剥離している。

SC32（第56図・写真58・59）

調査区の南部、SC26の東側に位置する竪穴住居である。住居の北端のみ検出し、大半は調査区外へと続く。このため、平面形が円形をなすことはわかるが、住居の正確な規模や構造はわからない。直径は4.8mと推定される。覆土は、暗灰黄色土（2.5Y4/2）を主体とする。

SC32は、標高45.4m前後で検出したため、検出面から床面まで10cm程度しか確認することができなかった。しかし、調査区南壁土層を検討したところ、本来は、深さ40cmほど残存していたことがわかった（第5図）。これは、第4・5図に示した土層4と遺構覆土の区別がつきにくく、古墳時代の住居の調査が終了した後に全体を下げてから、SC32を検出したためである。

住居の大半が調査区外となるため、支柱穴や炉、壁溝等の遺構は検出できなかった。

SC32出土遺物

遺物は出土しなかった。

SX33（第56図・写真60）

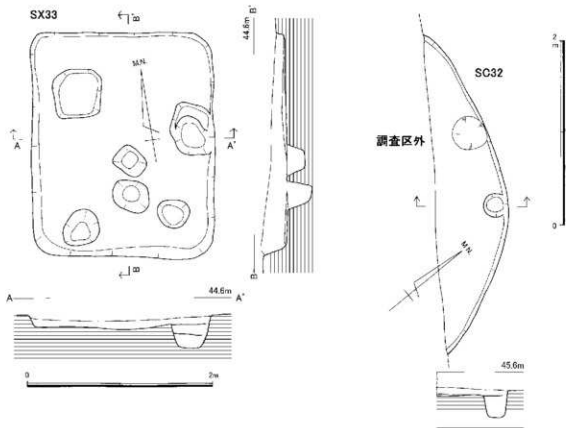
調査区の北部、SC22の西側に位置する遺構である。平面形は、主軸を南北方向（N-8°-E）にとる長方形をなし、長軸2.4m、短軸2mをはかる。標高44.3m～44.5mで検出した。地山を底面とし、検出面から床面までの深さは、北側で10cm、南側で28cm程度残存している。底面では、径40cm、深さ25cm程度の平面円形の柱穴を複数検出したにとどまり、炉や壁溝等は検出されなかった。覆土は、灰黄褐色土（10YR4/2）を主体とする。

弥生時代中期に事例の多い小規模な竪穴住居の可能性も考えられるが、規模があまりに小さいため、土坑の可能性も高い。

SX33から出土した遺物には、時期を判別できるものがほとんどないため、遺構の時期を推測するのは難しい。出土遺物中に土師器片がみられないことから、弥生時代の遺構である可能性は高い。

SX33出土遺物 (第59図)

6は弥生時代中期の壺の底部である。磨滅しており調整は不明であるが、内面に工具の痕跡がみられる。胎土は明赤褐色を呈し、1mm程度の白色粒・赤色粒を含む。



第56図 SC32・SX33実測図 (1/40)

SC34 (第57図・写真61)

調査区の中央部に位置する堅穴住居である。東側はSC20の掘削により失われており、西側と南側もそれぞれSC35・36にきられる。平面形は円形で、直径は4mをはかる。標高44.8m～44.95mで検出し、検出面から床面までの深さは最大20cm残存している。地山を床面とし、覆土は褐色土(10YR4/4)を主体とする。

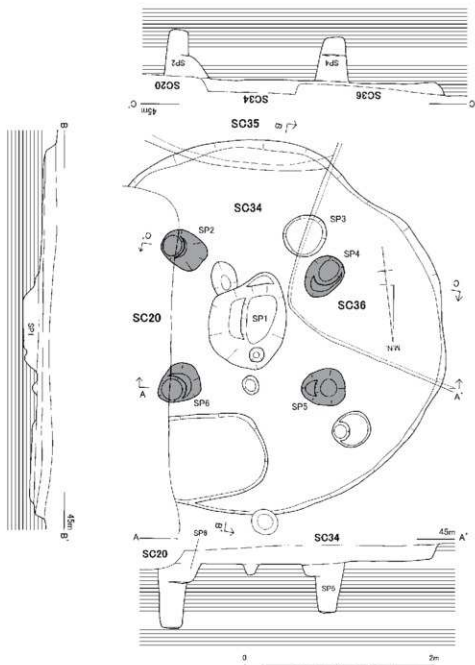
主柱穴は、SP2・4・5・6の4本を確認した。それぞれの柱は、狭い所で1.3m、広い所で1.7mの間隔をあけて配置されている。柱穴の平面形は、直径45cmの不整円形をなし、床面からの深さは50cm～70cmをはかる。柱は、掘形底面で検出された柱痕跡がそのままの材の径を反映していると仮定すると、径20cmの材であったと推測される。

また、住居の中央部では、長軸105cm、短軸80cmをはかる楕円形の土坑SP1が検出された。床面からの深さは15cm程度のくぼみ状のものである。このSP1の覆土には、炭化物が含まれており地床炉であった可能性がある。被熱痕はみられない。

SC34から出土した遺物には、時期を判別できるものがほとんどないため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、出土遺物には弥生時代中期前半の土器が多く、土師器片を含まないことから、SC34は弥生時代中期前半に埋没を開始した可能性がある。

SC34出土遺物（第59図）

1は弥生土器の鉢。胴部上半に断面三角形の突帯を貼りつけている。外面はナデで上半のみ横方向に研磨している。内面から口縁端部は工具によるナデ調整の後に丁寧にヘラミガキされ、口縁端部は放射状の暗文となっている。2は弥生土器の甕で、外面はハケ、内面はナデで調整している。外面に煤が付着している。1・2は、にぶい橙色を呈し、胎土には径1mm以下の白色粒と雲母片が多く含まれているが、精良である。残存率は1/6以下。ともに弥生時代中期前半の所産である。



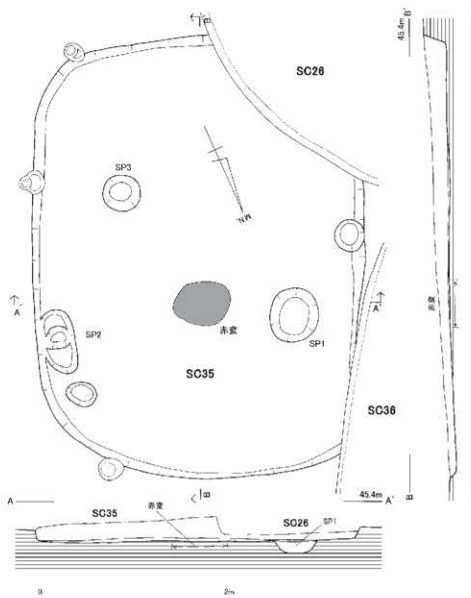
第57図 SC34実測図（1/40）

SC35 (第58図・写真62)

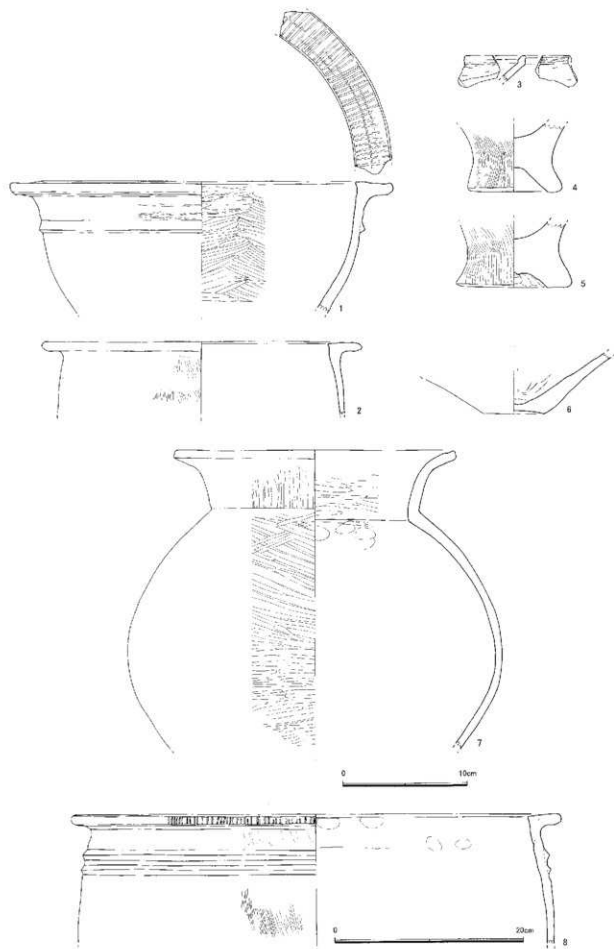
調査区の南部、SC26の北側に位置する竪穴住居である。SC34の埋没後に掘削され、西側をSC36に、南側をSC26にきられる。平面形は、主軸を南北方向 ($N-23^{\circ}-E$) にとる長方形をなし、長辺4.75m、短辺3.5mをはかる。標高45m \sim 45.25mで検出した。検出面から床面までの深さは、北側で8cm、南側で25cm程度である。床面は地山で、覆土は灰黄褐色土 (10YR4/2) を主体とする。

住居の中央部よりやや北側で、直径55cmをはかる不整形円の地床炉を検出した。地山が赤変して硬化しており、上面にわずかに炭化物がひろがっていた。このほかは、深さ10cm \sim 20cm程度のSP1 \sim SP3を検出したにとどまり、壁溝や主柱穴は確認できなかった。

SC35からは、時期が判別できる遺物がごく少量しか出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、弥生時代中期後半には廃絶していたSC26にきられることや、出土遺物に弥生時代中期前半の土器が多く土師器片を含まないことから、SC35は弥生時代中期前半に埋没を開始した可能性がある。



第58図 SC35実測図 (1/40)



第59图 SX33·SC34·35·SX40出土物実測図(1/3·1/4)

SC35出土遺物 (第59図)

7は、前期末から中期初頭に属する弥生土器の壺である。全体の1/6しか遺存していない。外面から口縁部内面はヘラミガキされ、口縁部外面はとくに丁寧で暗文風となっている。内面は工具によるナデ。胎土は径約0.5mmの礫が多く含んでいるが、比較的精良なものである。内面は淡黄褐色、外面にはぶい赤褐色を呈する。胴部中位以下の外面には、黒色顔料が残っている。8は、口径51.8cmをはかる弥生時代中期前半の甕である。外面はハケ、内面は磨滅しているが指オサエが残り、口縁部付近には粘土の接合痕がみられる。残存率は1/8以下で、胎土は白色粒を多く含むものの精良。内面は灰色、外面は橙褐色を呈する。外面には煤か黒色顔料か判断がつかないものが付着している。

SC36 (第60図・写真63)

調査区の中央部、SC26の北側に位置する竪穴住居である。SC34・35の埋没後に掘削されている。平面形は、南北辺が若干大きい略正方形をなす。主軸を南北方向とすると32°東偏し、長辺4.2m、短辺3.75mをはかる。標高44.95m～45.3mで検出した。検出面から床面までの深さは、西側で28cm、北側で10cm程度である。地山を床面とし、覆土にはぶい黄褐色土(10YR4/3)を主体とする。

主柱穴は、SP4・7の2本を確認した。住居の中央部に、主軸に平行するように1.1mの間隔で配置されている。SP4・7はほぼ同じ規模の柱穴で、径25cm～28cmの平面円形をなし、床面からの深さは60cmをはかる。また、SP4・7の60cm～80cm外側には、SP4・7とほぼ同じ軸上にSP10・12を検出した。SP10・12は、床面からの深さが10cm程度しかないくぼみであるが、建物の構造に何らかの役割を果たした柱穴かもしれない。

床面では、主柱穴以外にも複数の遺構を検出したが、SP1・8をのぞいて、すべて深さ5cm～15cmの浅いものであった。このうち、SP1は、長軸1m、短軸75cm、床面からの深さ35cmをはかる平面楕円形の土坑である。住居の北西隅で壁に接するように検出した。弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居に事例の多い壁際土坑のように、一定の機能を有していた可能性がある。竈をとむなう住居の場合、竈に隣接する場合に貯蔵穴とされることがあるが、覆土に特筆すべき特徴はなかった。

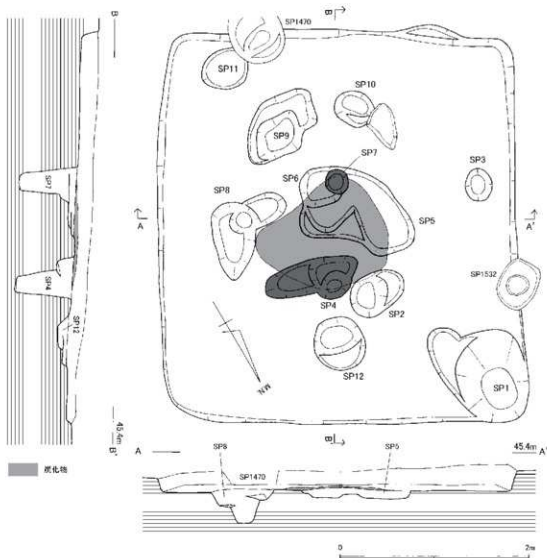
このほかに、住居中央部の床面では、1.2m四方の範囲にわたって、炭化物層を検出した。層厚は5cm程度である。床面に被熱痕はみられないものの、床面直上で確認したことから、単純に炉跡であると考えた。しかし、この炭化物層はSP4・7の上面でも一部検出されており、SP4・7を主柱穴とすると住居の廃絶後に炉が機能したことになり、矛盾が生じる。したがって、この炭化物層を炉跡とすれば、SP4・7は主柱穴ではなく炉に関係する建造物の1つであったと考えられ、SP4・7を主柱穴とすれば、この炭化物層は住居廃絶後になんらかの原因で生じたものと考えられる。なお、覆土中に火災の痕跡等はみられなかった。

SC36からは、時期を判別できる遺物がごく少量しか出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、弥生時代中期前半には廃絶していたSC35の埋没後に掘削されていることや、出土遺物に土師器片がみられないことから、SC36は、少なくとも弥生時代中期前半以降に営まれた住居であると考えられる。

SC36出土遺物 (第63図)

1・2は弥生土器の壺と甕である。全体の1/6程度しか遺存していない。胎土には径1～5mmの白色粒・雲母を含み、淡褐色を呈する。弥生時代中期に属する。

7は石包丁。重量は41.25gをはかる。右端部は、欠損した後に再度整形しなおして刃部をつけ、再利用している。凝灰岩製か。



第60図 SC36実測図 (1/40)

このほかに、第60図SP10の北側から花崗岩製台石が出土した(写真84)。全長47.5cm、全幅31cm、厚さ11.5cmをはかり、重量は20kg以上ある。やや赤味のある淡褐色を呈する。表面は風化がすすんでおり、使用痕は観察できないが、上面は使用した可能性が考えられる。

SC37 (第61図・写真64)

調査区の南西端に位置する平面方形の堅穴住居である。東側のSC02やその他の土坑・柱穴にきられて住居の大半が失われており、正確な住居の規模や内部構造は分からない。第61図に図示したSC37の範囲は、全体が住居の貼床である可能性も否定できない。また、標高45.7m前後で検出したが、全体に削平がおよんでおり、住居の南辺の一部(2.7m)および西辺の一部(4.6m)しか検出できなかった。検出面から床面までは、わずか5cm～15cm程度である。覆土は、にぶい黄色土ブロックを少量含む黄褐色土(2.5Y5/4)～オリーブ褐色土(2.5Y4/1)を主体とする。

床面では、SP1・2を検出した。SP1は幅70cm、長さ1.5m以上の溝状をなしており、検出面からの深さは5cm程度の浅いものである。床を貼っていたとすれば、住居掘形の凹凸であると考えられる。一方、SP2は、直径80cm以上、床面からの深さ40cmをはかる不整形の柱穴である。調査時は、SC37の南東隅をSP2付

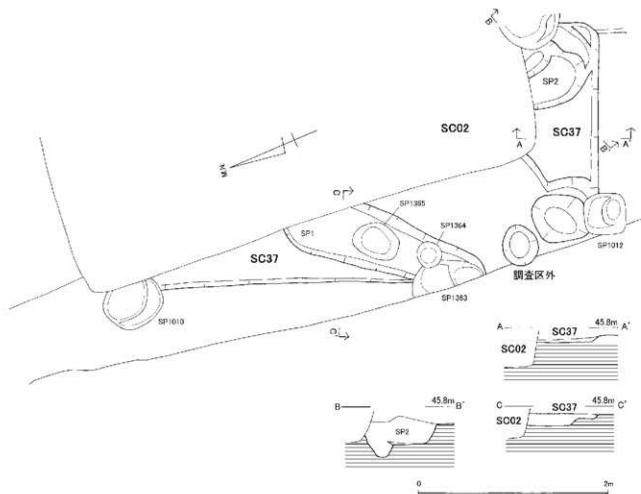
近で確認したが、SP2より東側が一段低くなっていることから、SC37の範囲はSP2より東へ広がっていた可能性もある。

このほかに、壁溝、炉、支柱穴等の遺構は確認できなかった。

SC37からは、時期を判別できる遺物がほとんど出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、古墳時代前期初頭に埋没したSC02にきられることや、出土遺物中に土師器片がみられないことから、SC37は少なくとも弥生時代に営まれた住居であると考えられる。

SC37出土遺物

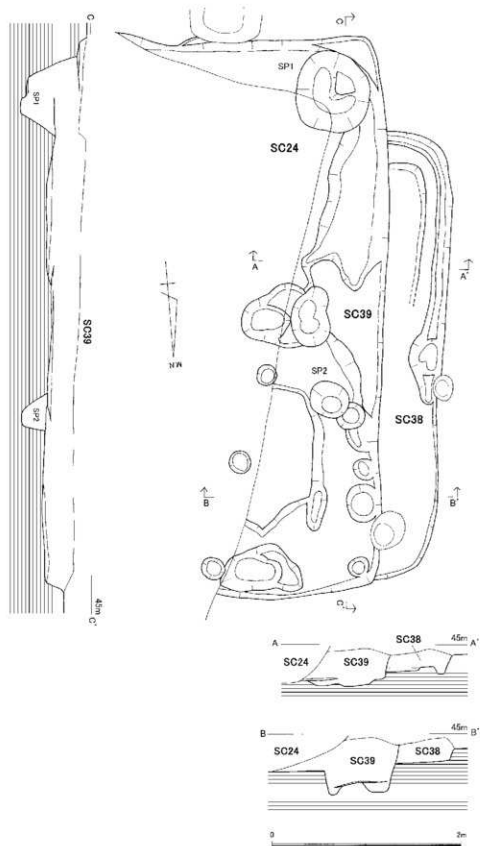
弥生土器片が出土した。



第61図 SC37実測図 (1/40)

SC38 (第62図・写真65)

調査区の中央部に位置する竪穴住居である。東側のSC24・39にきられて住居の大半が失われており、正確な住居の規模や内部構造は分からない。標高44.85m～44.9mで住居の西端を検出し、東西辺は少なくとも0.6m以上、南北辺が4.6mをはかる、平面方形の住居であることがわかった。南北辺を主軸とすると、6°東偏する。検出面から床面までは、20cm程度残存していた。覆土は、灰褐色土(7.5YR4/2)を主体とする。



第62図 SC38・39実測図 (1/40)

床面では、住居南側で、幅15cm、深さ8cm～10cmをはかる壁溝を検出した。またこの壁溝に沿うように、床面が4cm前後低くなっている。住居掘形の凹凸であると考えられ、SC38は一部貼床していたようである。

このほかに、壁溝、炉、支柱穴等の遺構は確認できなかった。

SC38からは、時期を判別できる遺物がほとんど出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、古墳時代前期初頭に埋没したSC24にきられることや、出土遺物中に土師器片がみられないことから、SC38は少なくとも弥生時代に営まれた住居であると考えられる。

SC38出土遺物

弥生土器片・黒曜石剥片が出土した。

SC39 (第62図・写真65)

調査区の中央部に位置する堅穴住居である。西側のSC38が埋没した後に掘削されている。東側のSC24にきられて住居の大半が失われており、正確な住居の規模や内部構造は分からない。標高44.7m～44.95mで住居の西端を検出し、東西辺は少なくとも2.4m以上、南北辺が5.9mをはかる、平面方形の住居であることがわかった。南北辺を主軸とすると、4°東偏する。検出面から床面までは、25cm～35cm程度残存していた。覆土は、やや暗い灰褐色土(7.5YR4/2)を主体とする。

SC39は検出範囲が限られており、炉や支柱穴等を検出できなかった。このため、調査時に貼床上面を把握することができず、第62図に図示した床面は、SC39の掘形底面となっている。掘形底面は、北側を中心に凹凸が著しく、住居の西端から北側にかけては、壁沿いがやや低い構造となっている。また、地山が床面となっていた住居南西隅において、壁に接するようにSP1を検出した。径80cm程度、深さ56cmをはかる平面不整形の土坑である。SC36においても、住居の隅に同様の遺構を確認しており、住居内で一定の機能を有している可能性が考えられるが、覆土に特筆すべき特徴はなかった。

SC39からは、時期を判別できる遺物がごく少量しか出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、古墳時代前期初頭に埋没したSC24にきられることや、出土遺物に弥生時代中期後半の土器が多く、土師器片を含まないことから、SC39は弥生時代中期後半には埋没した住居である可能性が高い。

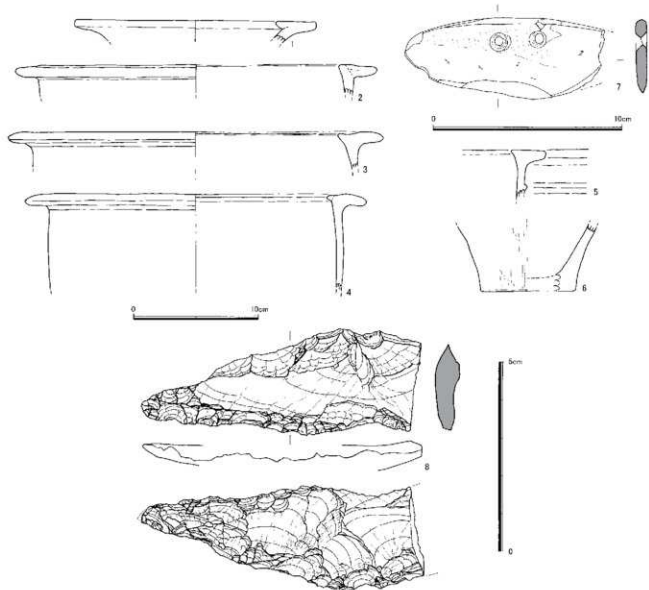
SC39出土遺物 (第63図)

3・4・5・6は弥生時代中期の甕である。全体の1/6以下しか遺存していない。胎土には径1～2mm程度の白色粒が多く含まれ、淡橙褐色を呈する。3の外面には煤が付着している。4は内外面ともにナデで仕上げている。5は磨滅が著しく調整を観察できない。6は、外面をハケ調整しているが、被熱しており器面は剥落している。外底部に黒斑が残る。

8は、つまみ部分が欠損した石匙である。石槍の未製品の可能性もあるが、翼状剥片を素材として表裏から二次加工しており、かえりをもつことや加工がやや粗いことなどから、石匙の可能性が高い。石材は古銅輝石安山岩で、重量は16.55gをはかる。縄文時代早期～前期の所産か。

SX40 (第64図)

調査区の南西部に位置する遺構である。南側のSC01、北側のSC04にきられて大半が失われており、標高45.7m前後で遺構西端の一部1.3m程度を検出しただけで、平面形や規模、内部構造等は不明である。検出面から底面までは30cm程度である。覆土は、にぶい黄色土ブロックを少量含む黄褐色土(2.5Y5/4)～オリーブ褐色土(2.5Y4/1)を主体とする。



第63図 SC36・39出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/3)

底面では、柱穴と溝状遺構を検出した。溝状遺構は床面からの深さ15cm程度の浅いもので、掘形の凹凸であると考えられる。

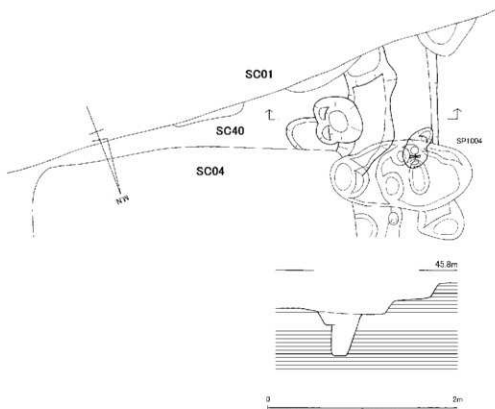
堅穴住居である可能性も考えられるが、遺存状況が悪いため、判断できない。

SX40からは、時期を判別できる遺物がごく少量しか出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、古墳時代前期初頭に埋没したSC01にきられることや、出土遺物中に土師器片がみられないことから、SX40は少なくとも弥生時代に営まれた遺構であると考えられる。

SX40出土遺物 (第59図)

3は細文土器の浅鉢。胎土は雲母片を少量含むのみで、精良である。磨滅が進んでいるが、内外面ともに黒色磨研されている。

4・5は弥生土器の甕である。前期末から中期初頭に属する。胎土には1～3mmの白色粒を多く含む。ともに外面はハケ調整で、内面にコゲが残っている。5は破面が被熱しており、廃棄後に火をうけたことがわかる。4は浅黄橙色、5はにぶい橙色を呈する。



第64図 SX40実測図（1/40）

（2）掘立柱建物

SB21（第65図・写真66）

調査区西端に位置する、1間×1間の掘立柱建物である。建物の南東側を、SC05にきられる。主軸をほぼ南北方向にとり（ $N-18^{\circ}-E$ ）、東西方向の柱間は2.8m～2.9m、南北方向の柱間は3.6m～3.7mとなるよう、柱を配置している。標高45.3m～45.75mで検出した。

建物を構成する柱穴（SP1030・1031・1032・1564）は、径80cm～90cmの不整円形または隅丸方形で、検出面からの深さは45cm～70cm程度残存している。柱の掘形底面には柱痕跡が残っており、柱の下端の標高は44.8m～45mをはかる。柱は、この柱痕跡がそのままの材の径を反映していると仮定すると、径20cm～25cmの材であったと推測できる。

SB21からは時期を判別できる遺物がほとんど出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、古墳時代に属するSC05にきられることや、出土遺物中に土師器片がみられないことから、SB21は少なくとも弥生時代に属する遺構であると考えられる。

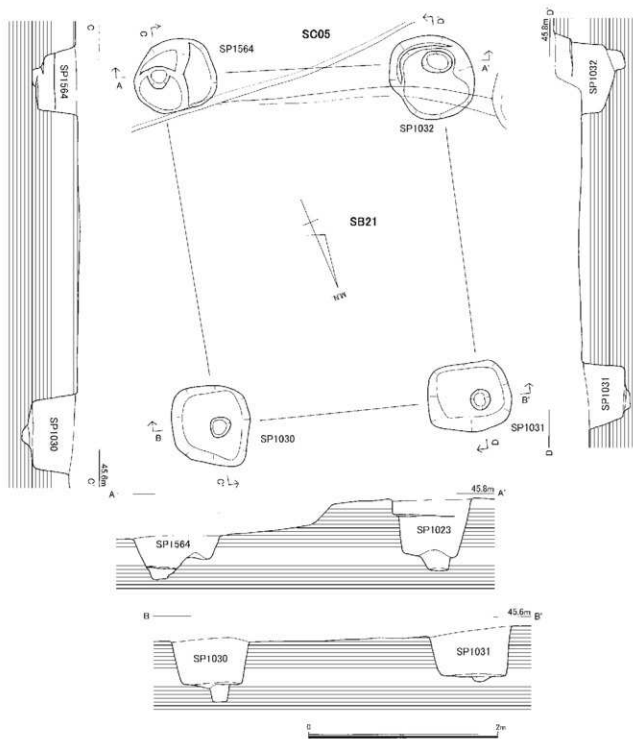
SB21出土遺物

SP1030・1031・1032より弥生土器片が出土した。

（3）土坑

SK17（第66図）

調査区東端に位置する土坑である。拳大の礫を含む粗砂を基盤とし、標高45m前後で検出した。



第65図 SB21実測図 (1/40)

平面形は径1.5mをはかる不整形で、検出面から底面までの深さは55cm、底面の標高は44.5mである。土坑の北側には、検出面からの深さ35cmのところ、幅25cm、長さ80cmの段を有する。覆土は、礫を含む黒褐色土(10YR2/2)を主体とする。

遺構の規模や覆土は、SK17の北側4mに位置するSK19と類似する。

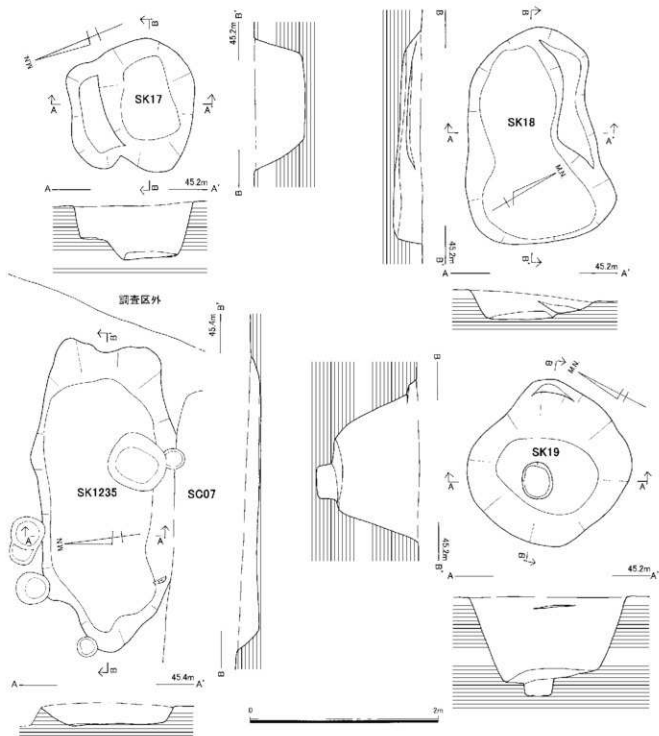
時期を判別できる遺物がほとんど出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。

SK17出土遺物

弥生土器片・土師器片が出土した。

SK18 (第66図)

調査区東端、SK17の北西側に位置する土坑である。SC13の埋没後に掘削されている。拳大の礫を含む粗砂を基盤とし、標高44.9m～45.05mで検出した。平面形は長軸2.3m、短軸1.4mをはかる不整楕円形で、検出面から底面までの深さは約30cm、底面の標高は44.7mである。北壁には、幅30cm、



第66図 SK17・18・19・1235実測図 (1/40)

長さ130cmの段をもうけている。覆土は、礫を含む黒褐色粘質土（10YR2/2）を主体とする。

時期を判別できる遺物がほとんど出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、古墳時代前期前半には埋没していたSC13をきることから、少なくとも古墳時代前期前半以降に掘削された遺構であることは確実である。

SK18出土遺物

弥生土器片・土師器片が出土した。

SK19（第66図）

調査区東端、SK17の北側に位置する土坑である。拳大の礫を含む粗砂を基盤とし、標高45m前後で検出した。平面は、径1.75mをはかる不整形円形をなす。土坑の底面中央部には、径40cmの円形の柱穴のように一段低くなっている。検出面から底面までの深さは90cm～110cmで、底面の標高は最も深いところで43.9m。覆土は黒褐色土（10YR2/2）を主体とし、上層には人頭大の礫が多く含まれていた。

遺構の規模や覆土は、SK19の南側4mに位置するSK17と類似する。

出土遺物から、中世前半には使用を終えた、あるいは、埋没していた遺構であると考えられる。

SK19出土遺物（第67図）

1・2は土師器碗。全体の1/2しか残存していない。胎土は白色粒を含むもので、淡褐色から淡赤褐色を呈する。1は磨減が著しく調整は観察できない。2は、外面は回転ナデ調整、内面は不定方向のナデで仕上げている。2の内面は火周りが悪かったせいか黒褐色となっている。

このほかに、滑石製石鍋片等も出土している。

SK1235（第66図）

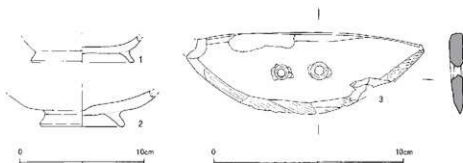
調査区東端、SC06の北側に位置する土坑で、SC07にきられる。拳大の礫を含む粗砂を基盤とし、標高45.2m前後で検出した。平面は、長軸3.2m、短軸1.5mをはかる不整形円形をなし、検出面から底面までの深さは10cm～20cmである。

時期を判別できる遺物がほとんど出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、古墳時代前期に埋没したとおもわれるSC07にきられることから、少なくとも古墳時代前期以前に掘削された遺構であることは確実である。

SK1235出土遺物（第67図）

3は凝灰岩製の石包丁である。第66図に示した位置から出土した。両面に整形にともなう斜方向の研磨痕が残っている。刃部は表面のみ砥ぎ直しており、裏面の残りは良くない。重量は46.66gをはかる。

このほかに、弥生土器片・土師器片が出土した。



第67図 SK19・1235出土遺物実測図（1/2・1/3）

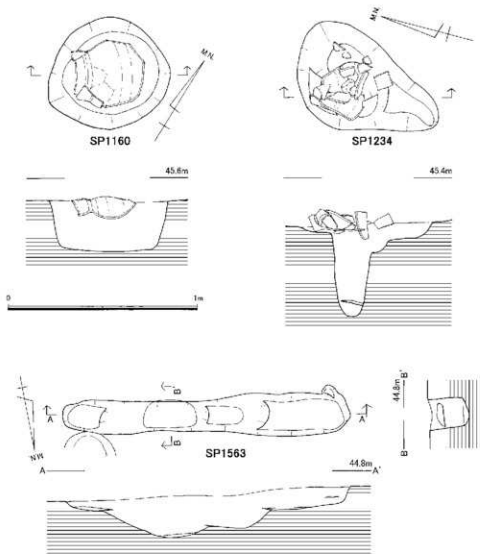
(4) そのほかの遺構と遺物

SP1160 (第68図・写真67)

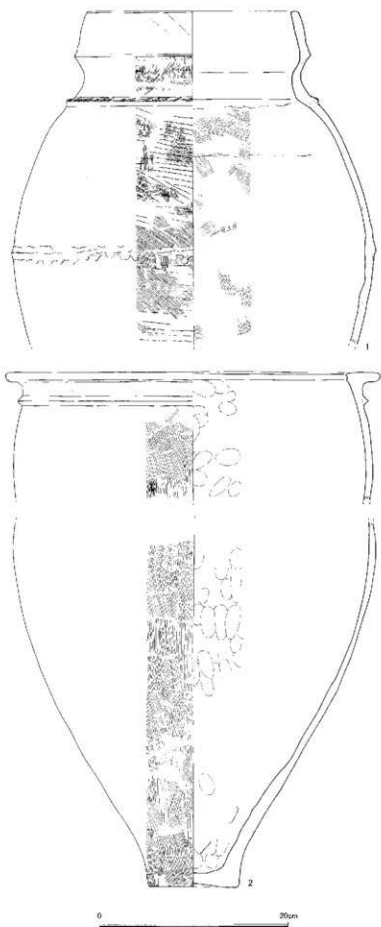
調査区南側中央部で検出した小穴である。標高45.5m前後で検出した。平面形は直径60cmをはかる不整形円形をなし、検出面から底面までは25cm残存している。第68図に示したとおり、検出面において、第69図1に示した壺が横倒しになった状態で出土した。この壺をとりあげた後は、小穴として遺構を掘りあげたが、ちょうどSP1160の下にはSC26が存在しており、本来のSP1160の底面を掘りすぎでSC26の覆土を掘削した可能性が高い。したがって、本来は深さ25cmも残存する小穴ではなく、深さがより浅い遺構であったとおもわれる。土器棺墓であった可能性が高い。

SP1160出土遺物 (第69図)

1は豊前系の壺である。残存率は全体の1/2程度。胎土には径1～5mmの白色粒・黒褐色粒が多く含まれ、白味強い淡褐色を呈する。外面はタキで形を整えた後にハケ調整し、内面はハケで仕上げている。口縁部から頭部にかけては内外面ともに横ナデあるいは斜方向のナデ調整。内面には粘土接合痕が残る。外面の調整が終わった後に、断面三角形の突帯を、頭部と胴部の境界と胴部中央位の2箇所に貼っている。とくに下部の突帯は、突帯の上端と下端を再度上下へハケ調整してナデつけており、突の低いものとなっている。古墳時代前期初頭から前期前半の所産である。



第68図 SP1160・1234・1563実測図 (1/20)



第69図 SP1160・1234出土遺物実測図(1/4)

SP1234 (第68図・写真68)

調査区南西部に位置するSC04の、南東隅の床面で検出した遺構である。標高45.1m前後で検出した。平面形は長軸80cm、短軸50cmをはかる不整形円形をなす。覆土は、灰褐色土を主体とする。

SC04の床面精査中に、第69図2に示した甕が横倒しになった状態で出土したことによって、SP1234を検出した。遺構検出時に、平面形をしっかりと把握できないまま、掘り進める結果となり、最終的には底面に径20cm、深さ50cmをはかる円形の柱穴を有することがわかった。SP1234は甕棺墓が集中する4区に近い位置で検出されたが、1区では甕棺墓は検出されていない。第69図2の甕が属する遺構と底面で検出した柱穴状の遺構は、別の遺構である可能性もある。

SP1234出土遺物 (第69図)

2は弥生時代中期前半の甕である。全体の1/3程度遺存している。外面はハケ、内面は指オサエ後にナデで調整する。胎土は径約1mmの白色粒を含んでいるが、比較的精緻である。にぶい橙褐色を呈する。外面には胴部上半・中位・下半に帯状に煤が付着し、内底部にはコゲが残る。黒斑は外面胴部上半の一部にみられる。

SP1563 (第68図・写真69・70)

調査区北西部、SC38・39の北側に位置する溝状の遺構である。標高44.7m前後で検出した。平面は、幅約20cm、長さ約1.5mをはかる直線的な溝状をなす。底面は階段状の凹凸があり、最も深いところで検出面から底面までの深さは25cmである。覆土は、上層で黒褐色土(10YR3/2)、下層で灰黄褐色土(10YR4/2)を主体とし、下層には拳大の礫を多く含んでいた。

SP1563からは、時期や器形がわかる遺物がほとんど出土しなかったため、遺構の時期を推定するのは難しい。ただし、出土遺物には土師器片が含まれないことから、弥生時代の遺構の可能性が高いと考えられる。

SP1563出土遺物 (第70図)

6は弥生土器甕の底部。前期末から中期初頭に属する。磨滅が進んでいるが、外面はハケ調整である。外面は被熱しており器表が剥落している。内底部には黒斑がつく。胎土には径1～5mmの白色粒が多量に含まれる。

このほかに弥生土器片・黒曜石剥片が出土している。

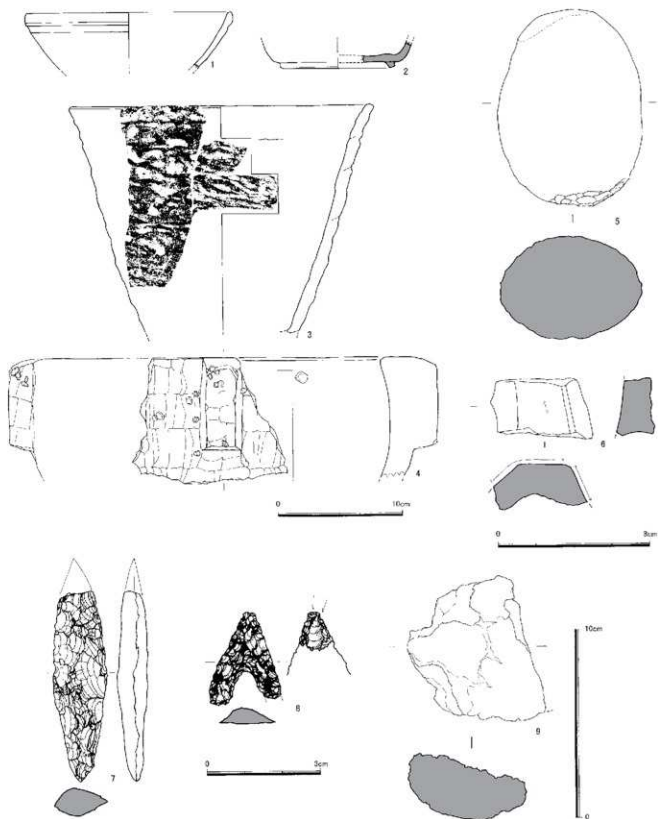
そのほかの柱穴の出土遺物 (第70図)

1はミニチュアの鉢で、全体の約1/2残存する。指オサエ・ナデにより成形する。胎土には径1～3mm程度の白色粒を含んでおり、明橙褐色を呈する。2は土師器器台で、全体の1/2程度遺存している。磨滅が進んでおり調整は観察できない。古墳時代前期初頭のものに比べて器壁は厚く、胎土は径1～5mm程度の白色粒を含む粗いものである。3は土師器高杯。全体に細かい条線のはいる工具ナデで仕上げられており、研磨は省略されている。口縁端部内面の一部に黒斑がつく。4は土師器壺。磨滅がすすんでいるが、外面にはハケ調整後のヘラミガキが観察でき、胴部中位から下半には黒斑がつく。残存率は1/2程度。2～4の胎土は類似しており、淡赤褐色から黄褐色を呈する。

5・13～17は弥生土器。5・16・17は甕。5は内外面ともに磨滅が著しく調整は不明瞭である。内面にコゲ、外面には煤が付着しており、外底部は被熱して器壁が赤変する。16は、外面を胴部上半は横方向、胴部下半を縦方向のナデで調整し、内面は指オサエ後に斜方向のナデで仕上げている。17は



第70図 そのほかの柱穴出土遺物実測図(1/1・1/3)



第71図 遺構検出時の出土遺物実測図(1/1・1/2・1/3)

内外面ハケ調整，口縁部外面下に成形時の痕跡とおもわれる指オサエが残る。残存率は16・17ともに1/3程度である。13～15は器台である。外面はハケ調整するが，13のハケはとくに目が粗い。内

面は指オサエ後に縦方向のナデで仕上げているが、15の裾部には横方向の工具ナデがみられる。5・13～17は、胎土に径1～5mm程度の白色粒と赤褐色粒・黒褐色粒・金雲母等を含んでおり、色調が赤味のある淡黄褐色である点で共通する。

7は縄文時代早期の押型文土器である。胎土に砂粒が多く含まれており、赤褐色を呈する。内面はナデで調整する。9は突帯文土器で、内外面は条痕により調整される。突帯の刻目は、器面調整に用いた工具によるもの。外面には煤がうすく付着している。胎土には砂粒を多く含まれ、焼成は良好である。

8は土鍾の一部である。胎土は礫を含まない精良なもので、褐色味のある白色を呈する。横断面をとった位置での復元径は5.2cmをはかる。

10は土師器小皿。磨滅が進んでおり調整は不明である。底部の切り離しはヘラ切りか。11は輸入陶器の四耳壺。口縁端部内面には目跡が4箇所残る。胎土は黒色粒を含み灰色を呈する。内外面に濃緑褐色の釉薬がかけられている。12は瓦器碗。口縁部は磨滅しているものの、内外面ともに燻し研磨する。

18・19は漆黒黒曜石製の織である。18は、先端と脚部が欠損しており、少なくとも全長は2.75cm以上、重量は1.53g以上となる。18は第10図26のチャート製のものに類似するが、18より脚が長くなると考えられ、後出するものと考えられる。19も先端から右半分を欠損するが、全長は2.38cm以上、重量は1.05g以上をはかる。18・19ともに縄文時代早期の所産である。

遺構検出時の出土遺物（第71図）

1は白磁碗で、全体の1/8残存している。全体に黄味のある灰白色の釉をかけている。胎土はやや粗く黒色粒を含むもので、器表には気泡が目立つ。2は須恵器碗で、外面は回転ナデ調整する。3は土師質の鉢。全体に磨滅しているが、内面はナデ、外面は条痕調整している。つくりが粗く、粘土の接合痕が外面にも内面にも残っている。胎土は白色粒や褐色粒を含むもので、器表は淡黄褐色から褐色を呈する。4は滑石製石鍋。4箇所につく耳のうち1箇所のみ残存している。内面には不規則な工具痕跡がみられるが、使用痕の可能性もある。外面下部には煤が付着する。

5は花崗岩製の叢石。風化が顕著で、上端をのぞく大部分の表面が失われている。下端に使用痕が残る。重量は557g。6は目の細かい砂岩製の砥石である。断面は多角形をなしていたと考えられ、3つの砥面が残る。7は古銅輝石安山岩製の檜。風化が進んでおり表面は灰色を呈する。表裏は丁寧な押圧剝離に近い二次加工を加えて、断面形が菱形となるように仕上げている。基部は柄に装着するために、身をやや薄く整えている。先端部を欠損するが、器長5.1cm以上、器幅1.52cm、最大厚0.76cm、重量5.84gをはかる。縄文時代早期の所産と考えられる。8は縄文時代早期に属する黒曜石製の織である。先端部と脚の一部を欠損する。器長は2.5cm以上で、重量は1.33gをはかる。

9は碗形滓。全体の1/4程度が遺存する。全面が気泡でおおわれており、網掛け部分はガラス化している。底面は粗砂の付着が顕著である。鍛造剥片等の付着はみられない。

(5) 小結（第2表・第72図）

1区では、弥生時代前期末から中期末の堅穴住居9棟（最大13棟）、弥生時代の掘立柱建物1棟、弥生時代終末期から古墳時代中期後半までの堅穴住居14棟（最大18棟）を中心とする遺構を確認した。

このほかに、古代・中世前半の遺物が出土する柱穴・土坑等も検出したが、遺構の在り方は、弥生時代・古墳時代に比べて相対的に散漫である。遺物は、これらの遺構からの出土が中心で、縄文時代早期～晩期、弥生時代前期後半～中期末、弥生時代終末期～古墳時代中期後半、古代、中世前半に属する遺物が、コンテナケース約100箱分出土した。

本調査区で検出した集落は、弥生時代前期末に開始し、断続的に集落が営まれ、古墳時代後期には消滅する。集落の盛行期は、①弥生時代前期末～中期末、②弥生時代終末期～古墳時代前期前半、③古墳時代中期初頭～中期前半の3時期に分けられる¹¹⁾。以下に、竪穴住居の変遷と概要をまとめる。

①弥生時代前期末～中期末—竪穴住居9棟(最大13棟)

この時期の住居群は、古墳時代以降の住居に比べて出土遺物が少ないため、第2表に示した竪穴住居の時期は、切り合い関係や覆土から出土した破片資料から推測したもので、精度は低い。この前提にたつたうえで変遷をたどると、前期末をさかのぼるものが1棟、前期末～中期初頭の住居が3棟、中期前半の住居が2棟、中期後半～末の住居が3棟、弥生時代のものではありそうだが詳細な時期がわからないものが4棟となる。

これらの竪穴住居群は、円形プランのものと方形プランのものが混在しており、平面形に関係なく、床面積 $13\text{m}^2\sim 18\text{m}^2$ 前後のタイプ(円形SC30・32・34・方形SC35・36)と、床面積 30m^2 前後のタイプ(方形SC27・円形SC28・31)に分類することができる。岸田遺跡に近接して展開する松木田遺跡や東入部遺跡、岩本遺跡等の同時期の住居群と比べると、本調査で検出した竪穴住居群は、円形住居に直径4m超・床面積 13m^2 前後のやや小規模なものが含まれること、方形住居と円形住居の規模の分化が明確でないこと、床面積 10m^2 程度の小型の方形住居がほとんどないことが、違いとして挙げられる。一方で、方形住居が竪穴内に支柱等を設けずに建てられていることや、直径 8.1m ・床面積 51.5m^2 をはかるやや大型の住居SC26が存在すること等は、松木田遺跡や東入部遺跡、吉武遺跡群にも共通する特徴であるといえる(星野1998・長家2012)。

室見川東岸に同時期の集落が展開する東入部遺跡周辺では、前期後半～中期初頭にかけて集落が解体・廃絶し、中期後半になると大規模な集落が出現して(重留村下遺跡1次調査・東入部遺跡4・5・8次調査)、集落の再編成が生じることがわかっている。このなかで、東入部遺跡2次調査8区・13区・15区では、掘立柱建物をもとに竪穴住居群(住居約40棟)が、金属器副葬が行われた墓域(埋葬施設約200基)とともに、前期末から中期末まで継続しており、拠点的な集落であったと考えられている(長家2012)。また、四箇船石遺跡においても、前期末中頃から中期初頭の住居群と中期後半の住居群では地点を違えているものの集落は継続しており、中期後半の住居群には甕棺墓群をもとにすることがわかっている(3・4次調査)。

本調査区の集落は、前期末から中期末まで継続して竪穴住居が営まれ(住居最大13棟以上)、金属器を副葬する墓域ももっている(埋葬施設約90基)。1区で検出した住居群はさらに南側にひろがるのが確実であり、また、4区の墓域と1区・4区の住居の関係性も含めて検討が必要であるため、本報告で集落規模やその内容を明確に評価することはできない。しかし、同時期の近隣集落の在り方を手掛かりとすると、岸田遺跡1次調査で検出した集落は、ある程度まとまった規模の集落であった可能性が高いといえる。

②弥生時代終末期～古墳時代前期前半(久住ⅡA～ⅡB)—竪穴住居8棟(最大12棟)

当該期の竪穴住居群は、平面形が長方形で、床面積が $25\sim 35\text{m}^2$ のものが主流を占め(SC01・02・11・13)、これに、平面形が略正方形で比較的小規模なものが少数混在する状況である(SC14・15)。前者の住居は、短辺側に2本の支柱とベッド状遺構を持ち、南側長辺中央部に壁際土坑を配置しており、

内部構造が明らかなのが多い。これに対して、後者の堅穴住居は、主柱穴が堅穴内で検出されず、内部構造が判然としない。このような集落の構成や住居の構造は、岸田遺跡に近接して展開する松木田遺跡や岩本遺跡の同時期の住居群と共通している。

本調査区で検出した集落の特徴は、堅穴住居の配置である。本調査区では、SC11をのぞく堅穴住居群のすべてが、 $10^{\circ} \sim 20^{\circ}$ 北に偏る東西方向に主軸をとって比較的整然と配置されている。その配置のなかでも、SC23・24と2区SC0201の3棟は、長軸10m・床面積75㎡程度をはかる非常に大型の住居で、かつ、約5m間隔で並びたっている。SC23では、弥生時代終末期にさかのぼる遺物が出土しており、3棟が同時併存していたかは明確にできないが、その存在が相互に意識されて計画的配置されていたことは明らかである。これらの大型住居は、近隣の遺跡に類例を求めることはできず¹⁴、かつ、特別な遺構や遺物等が検出できなかったため、その性格を推測するのは難しい。共同作業場等の特別な意味をもった住居であったのだろうか。

このように整然と住居が配置されている集落構造は、近接する長峰川を隔ててすぐ南東側の松木田遺跡2・3次調査・4次調査1・5・6区の堅穴住居群においても確認できる。松木田遺跡の住居は、主軸を 10° 前後東に偏る南北方向にとるように配置されており、本調査区の住居群の主軸とはちょうど 90° 異なっている。松木田遺跡では、本調査区のSC23・24・2区SC2001のような大型住居は確認されていないが、住居の構成や配置は本調査区の集落と共通しており、岸田遺跡と松木田遺跡の当該期の住居群は、堅穴住居の配置に共通するアイデアをもった集団が形成した集落であるのかもしれない。

早良平野の同時期の集落では、有田遺跡群において、4～5棟単位の堅穴住居のまとまりが80m～100mの間隔で配置されることが指摘されており（井澤1987）、岩本遺跡では、25棟前後の住居が3時期にわたって営まれる大規模集落の周辺に（1・2次調査）、4～5棟単位のまとまりの小集落が配置されたことがわかっている（清末3次調査・2次調査1区・6区・東入部1次調査4区ほか）（濱石1995）。本調査区で検出された集落は、南側に広がるのが確実であるため、どのような規模の集落であったのかは断言できないが、大規模集落の周辺に位置する衛星的な小規模集落ではなく、比較的まとまった規模の集落であった可能性がある。

③ 古墳時代中期初頭～中期前半（重藤ⅢA～ⅢB）—堅穴住居5棟

当該期の堅穴住居群は、略正方形プランをなし、床面積は $13 \text{ m}^2 \sim 16 \text{ m}^2$ で小規模のもの3棟と（SC04・06・10）、床面積 35 m^2 の比較的大型のもの1棟（SC20）から構成されており、どれも主柱穴等は判然としない。②の時期と同様に、堅穴住居は主軸を $10^{\circ} \sim 20^{\circ}$ 東に偏る南北方向にそろえて、比較的大型のSC20を囲むように配置されている。隣接する松木田遺跡では、この時期の堅穴住居は検出されておらず、近隣でも当該期の住居の検出例はほとんどない。有田遺跡群や樋井川B遺跡等で検出された住居と比べると、本調査区で検出した住居は、規模がやや小さく、内部構造が堅穴内で明瞭でない傾向にある。

本調査区で検出したこの時期の堅穴住居群の特徴は、床面から10cm～20cm浮いた状態で土器がまとまって出土することである。縄文時代から古墳時代前期の住居廃絶祭祀事例を分析した宮内克己氏は、廃絶した住居を集落内でそのまま放置することの危険性を考慮し、積極的に埋め戻しを行ったという前提にたち、本調査区の堅穴住居群のように住居床面から完全にういた状態でまとまって出土する土器は、住居廃絶祭祀にともなう可能性が高いと指摘している（宮内2004）。宮内氏は、焼失住居の建築材や特殊な遺物、土器の出土状況等から、住居廃絶の過程を、(a) 再利用材を撤去し片づけた後にある程度埋め戻し、(b) 建築材が部分的に残ったままで焼却あるいは内部で火を焚き、(c) 遺物

による祭祀を行って、(d) さらに埋め戻すと復元している。SC04は、床面から15cm～20cm埋まった状態で建築材の一部が焼け落ちた痕跡が検出され、ここから数cmういた状態で甕・鉢・壺等の土器が計7点ままとって出土しており(p.21～25)、宮内氏が復元した住居廃絶の過程に合致している。また、SC20も、床面から15cm～20cm浮いた状態で、高杯・小型丸底壺・鉢および赤色岩石が計23点出土しており(p.51～57)、(b)の過程は検出されなかったものの、住居廃絶後の埋め戻しにもなって祭祀が行われたといっていようであろう。このような事例の存在を考慮すると、本調査区の堅穴住居SC06やSC10のように、特殊な遺物の出土や建築材の焼失痕跡の検出がなくても、住居廃絶の際に祭祀を行っていた可能性が高いことがわかる。¹³⁾ それを証明することは難しいが、堅穴住居を調査する際は、土器の出土状況や覆土の堆積に十分注意する必要がある。

本調査区の集落の盛行期①～③について簡単にまとめてきたが、最後に、早良平野のなかでの位置づけについて検討しておく。同時期の早良平野では、④弥生時代後期、⑤古墳時代前期後半～中期前半に、大規模集落が断絶し(有田遺跡群・東入部遺跡・吉武遺跡群等)、堅穴住居数・集落数ともに減少することから、この時期に全体的な人口の減少が指摘されている(石井2009)。このような早良平野の状況と比較すると、本調査の集落は、集落開始期から古墳時代前期後半までは、早良平野の集落動態に沿った形で盛行と断絶を繰り返した、比較的まとまった規模の集落であったといえる。①の時期には比較的大型の円形住居SC26(弥生時代中期後半～末)が存在し、②の時期には大型方形住居SC23・24・2区SC2001を中心に住居群が整然と配置される様相は、これを裏付けられるものと考えたい。さらに、これらの時期に、SC15・CS24・SC26およびその他の遺構から、吉備系の搬入土器(第32図7)および佐賀平野・有明海沿岸・豊前の各地の影響を受けた土器(第46図19・第49図1・第69図1)が出土していることも、集落の盛行ぶりを示した遺物といえるだろう。しかし、古墳時代前期後半～前期末に一時的な断絶を経ると、③の時期には計5棟の堅穴住居群から構成される集落に規模を縮小し、古墳時代中期後半になると堅穴住居は1軒のみとなり、古墳時代後期になると集落は消滅する。古墳時代後期は早良平野において再び人口が増加に転じる時期であり、本調査区は何らかの理由で集落としての選地の対象から外されたものと考えられる。

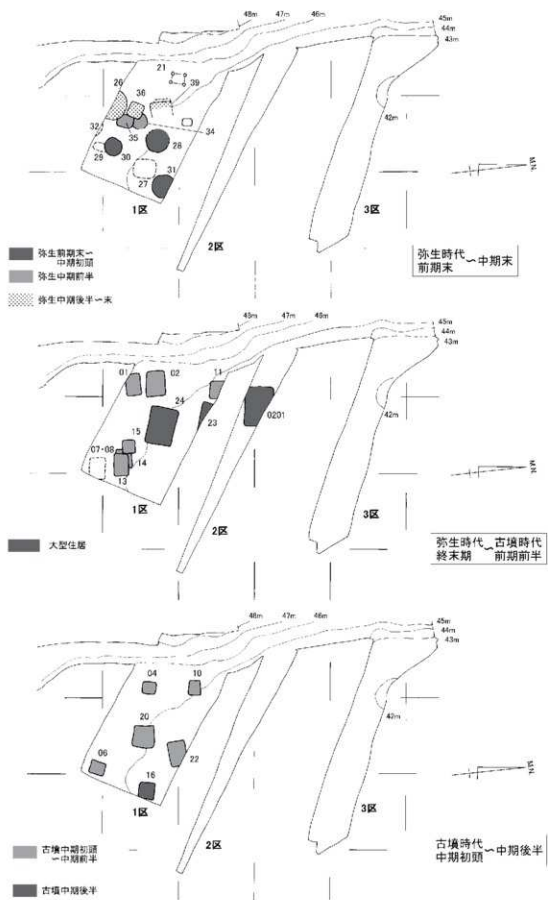
- (1) 堅穴住居の時期は、あくまでも埋没開始の時期であるため、実際のその住居の存続期間はそれ以前ということになるので、集落の盛行期を考える際には注意が必要である。
- (2) 久留米市水分遺跡第5・7次調査では、古墳時代前期初頭の一边10mを超える大型堅穴住居が検出されており、ガラス小玉や赤色顔料、翡翠製勾玉、鉄製品等が出土したとのことである。
- (3) ②の時期に属するSC15、SC24においても住居廃絶にともなう祭祀を行っていた可能性がある。SC15では、床面からういた状態で高杯・鉢・壺等の土器がままとって出土しており、SC24では、ベッド状遺構を検出した前後の覆土に焼土と木炭の集中がみられた。

【参考文献】

- 石井陽子2009「博多湾沿岸地域における古墳時代の集落動態」『九州考古学』第84号
井澤洋一1987『有田・小田部第8集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集
久住基雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究XIX』庄内式土器研究会
重藤輝行2010「北部九州における古墳時代中期の土師器編年」『古文化叢書』第63集
長家伸2012『入部XIV』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1140集
濱石哲也1995『入部V』福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集
星野恵美1998『松木遺跡群—第2次・第3次調査—』福岡市埋蔵文化財調査報告書第578集
宮内克己2004「堅穴住居の廃絶」『九州考古学』第79号

第2表 1区検出の竪穴住居一覧

	埋没開始時期	平面形	主柱穴	炉	主軸	規模 (m)	面積 (m ²)	建替	切合	
弥生時代前期末～中期末	SC29	前期末～中期初頭以前	長方	無	無	N-22°-E	2.3×3.2	7.36	無	SC30より古
	SC30	前期末～中期初頭か	円	6本	無	-	直径4.7	17.34	無	中央土坑
	SC28	前期末～中期初頭か	円	8本	無	-	直径6.2	30.2	無	中央土坑
	SC31	前期末～中期初頭か	円	8本	無	-	直径6.6	34.19	有?	中央土坑
	SC34	中期前半か	円	4本	無	-	直径4	12.56	無	中央土坑
	SC35	中期前半	長方	無	中央 地床炉	N-23°-E	3.5×4.75	16.63	無	SC34より新
	SC26	中期後半～未 やや大型住居	円	12本	中央 地床炉	-	直径8.1	51.5	無	SC35より新 外系系土器
	SC36	中期後半か	略正方	2本	中央 地床炉	N-32°-E	3.75×4.2	15.75	無	SC34より新 SC35より新
	SC39	中期後半か	方	不明	不明	N-4°-E	5.9×2.4以上	14.16以上	有?	
	SC27	弥生中期か	略正方	4本	無	N-15°-E	5.5×6	33	無	中央土坑
	SC32	弥生か	円	不明	不明	-	直径4.8	18.08	不明	
	SC38	弥生か	方	不明	不明	N-6°-E	4.6×0.6以上	2.76以上	不明	
	SC37	弥生か	長方	不明	不明	不明	2.7×4.6以上	15.12以上	不明	
弥生時代終末～古墳時代前期前半	SC01	久住ⅡA	長方	2本	無	N-87°-W	4.3×6.1	26.23	無	SC03より新 中央土坑
	SC02	久住ⅡA	長方	2本	地床炉	N-86°-W	5.3×6.8	36.04	有?	SC05より新
	SC13	久住ⅡA～ⅡB	長方	2本	無	N-84°-W	4×推定6.1	24.1	無	中央土坑
	SC11	久住ⅡA～ⅡB	長方	不明	不明	N-8°-E	5.1以上×4	20.1以上	不明	
	SC14	久住ⅡAか	略正方	不明	無	N-7°-E	推定5× 推定5	推定25	不明	
	SC15	久住ⅡA	略正方	無	無	N-9°-E	3.7×3.7	13.5	無	SC14より新 搬入土器
	SC23	不明(弥生終末か) 大型住居	長方	不明	不明	N-64°-W	2.8以上 ×9.1以上	25.48以上	不明	
	SC24	久住ⅡA 大型住居	長方	2本	焼土溜	N-69°-W	7.5×10.2	76.5	有	中央土坑 外系系土器
	SC07・08	不明(古墳前期)	長方	不明	不明	N-84°-W	4.5×6	27	不明	
	SC03	不明 (弥生終末～古墳初頭)	方形	不明	不明	N-62°-W	1.1以上 ×1.3以上	不明	不明	
SC05	不明 (弥生終末～古墳初頭)	方	不明	不明	N-94°-W	1.8以上×5.8	不明	不明		
SC09	不明(古墳)	略正方	無	中央 地床炉	N-44°-E	4.05×3.7以上	15以上	無		
古墳時代中期初頭～中期前半	SC04	重藤ⅢA	略正方	無	無	N-17°-E	3.4×4	13.6	無	中央土坑
	SC06	重藤ⅢA～重藤ⅢB	略正方	無	無	N-28°-E	3.7×4.3	15.91	無	中央土坑
	SC10	重藤ⅢA～ⅢB	略正方	無	地床炉	N-10°-E	3.3×4.3	12.9	無	
	SC20	重藤ⅢA	略正方	無?	中央 地床炉	N-11°-E	約5.5×6.3	34.65	無	
	SC22	重藤ⅢA	長方	2本	無	N-85°-E	4.9×7.1	34.79	無	SC24より新 中央土坑
	SC16	重藤V	正方	4本	無	N-19°-E	4.5×4.5	20.25	無	



第72図 1区竪穴住居変遷図(1/1,000)

岸田遺跡第1次調査出土の「赤色岩石」について

足立達朗¹・田尻義彦¹・中野伸彦²・小山内康人²・松尾奈緒子³

¹九州大学アジア埋蔵文化財研究センター ²九州大学大学院比較社会文化研究院 ³福岡市経済観光局

1. はじめに

岸田遺跡第1次調査において、古墳時代中期初頭～中期前半の時期に所属する堅穴住居SC20から、赤色の岩石群が出土した。この赤色岩石は、SC20の床面より約20cmういた状態で出土し、共伴する土器は、古墳時代中期初頭に位置づけられる高坏やミニチュアの鉢、小型丸底壺などで(図1a)、祭祀に用いる器種が多いのが特徴である。このような堅穴住居からの土器の出土状況は、住居廃絶祭祀にともなう可能性が高いことが指摘されている(宮内, 2004)。「赤」は、縄文時代以来、さまざまな祭祀行為に用いられてきた色であるため、「赤色岩石」自体にも祭祀を構成する重要な役割を与えられた可能性が考えられる。「赤色岩石」は、岸田遺跡およびその周辺の遺跡でも出土例がないとみられ、他地域から搬入されたと考えられる。そのため、分析対象資料の原産地に対し、何らかの制約が与えられれば、当時の岸田遺跡を営んだ人々の交流範囲を解明するうえで重要な手掛りとなる。

本報告では、九州大学大学院比較社会文化研究院設置の装置群を使用した地球科学的分析を実施し、「赤色岩石」の岩石学的特徴を明らかにし、その原産地の地質を推定した。

2. 「赤色岩石」の観察および分析

本報告では、遺跡出土の「赤色岩石」について、ポリエステル樹脂にて包埋後、岩石薄片を作成し、顕微鏡観察および電界放出型電子プローブマイクロアナライザー(FE-EPMA, JEOL製JXA-8530F)を用いた微細組織観察および鉱物化学組成分析を実施した。また岩石粉末を作成し、X線粉末回折装置(XRD, リガク製RINT-2000V)を用いた鉱物相解析、波長分散型蛍光X線分析装置(XRF, リガク製ZSX primus II)とレーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計LA-ICP-MS(レーザー: New wave research製UP-213, ICP-MS: Agilent Technologies製 Agilent 7500cx)を用いた全岩主要・微量・希土類元素分析を実施した。

分析対象の「赤色岩石」は、厚さ1~2mmの黄白色および赤色の層が互層した縞状構造を呈している(図1b)。基質は、極微細な白色鉱物および赤褐色鉱物で構成され、その量比の差異による不均質によって縞状構造が形成されている(図1c)。FE-EPMAによる後方散乱電子(BSE)像(図1d)では、基質は極めて細粒な物質からなる不均質な組織を示す。まれに50 μ m程度の粒径で板状かつ著しい劈開を持つ層状鉱物が含まれ、この層状鉱物の粒間には、BSE像で輝度が高い鉱物が認められる。この他に、数~数十 μ m程度の粒径を持つ破片状の石英が散在しているのが認められる(図1d)。またBSE像において最も輝度が低い(暗灰色)部分は、空隙を充填した樹脂であり、赤色岩石が多孔質であることが分かる。

各鉱物の化学組成(表1)から、層状鉱物(分析点1, 3, 6)は、Si, Al, Feを主成分として含むことが分かる。また重量濃度の総量が100%に満たない場合、その不足分はH₂Oなどとして含有されると考えられる。このことから層状鉱物は多量のH₂Oを含む粘土鉱物に特徴的な化学組成を持っていることが認識できる。また、これらの層状鉱物に伴う高輝度の鉱物(分析点4, 5)は、層状鉱物に含まれる元素に加え、多量の鉄およびH₂Oを含むことから、鉄水酸化鉱物と粘土鉱物の集合体であると考えられる。

微細・微量の鉱物相同定を行うため、XRD分析を実施した。得られたスペクトルからは、石英、層状粘土鉱物であるスメクタイトおよび鉄水酸化鉱物である針鉄鉱のスペクトルが検出された(図2)。スメクタ

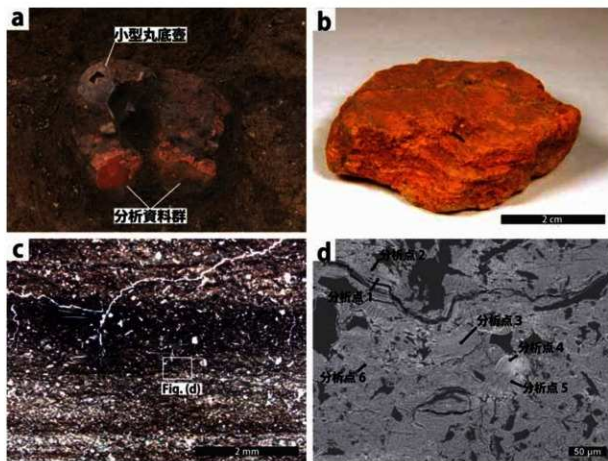


図1. 「赤色岩石」の出土状況および岩石組織。

表1. EPMA分析結果

鉱物名	スメクタイト	石英	スメクタイト	針鉄鉱+ スメクタイト	針鉄鉱+ スメクタイト	スメクタイト
分析点	1	2	3	4	5	6
SiO ₂	44.17	98.32	47.11	15.25	6.43	49.07
TiO ₂	0.10	-	0.11	0.10	0.16	0.04
Al ₂ O ₃	31.45	0.86	26.52	12.58	6.38	31.98
Cr ₂ O ₃	-	0.05	0.06	0.01	-	0.03
FeO	10.91	0.40	15.82	51.75	49.00	4.96
MnO	0.02	0.04	-	0.09	0.05	0.05
MgO	0.40	0.01	0.91	0.23	0.08	1.01
CaO	0.37	0.09	1.31	0.37	0.26	0.57
Na ₂ O	0.03	0.08	0.04	-	-	0.02
K ₂ O	0.39	0.06	0.63	0.10	0.02	0.39
total	87.86	99.91	92.50	80.49	62.37	88.11
O=	22	2	22	12	12	22
Si	6.29	0.99	6.57	1.89	1.17	6.69
Ti	0.01	-	0.01	0.01	0.02	0.00
Al	5.28	0.01	4.36	1.83	1.37	5.14
Cr	-	0.00	0.01	0.00	-	0.00
Fe	1.30	0.00	1.84	5.35	7.47	0.57
Mn	0.00	0.00	-	0.01	0.01	0.01
Mg	0.09	0.00	0.19	0.04	0.02	0.21
Ca	0.06	0.00	0.20	0.05	0.05	0.08
Na	0.01	0.00	0.01	-	-	0.00
K	0.07	0.00	0.11	0.02	0.01	0.07
total	13.10	1.01	13.30	9.20	10.12	12.77

イトや針鉄鉱は、既存の鉱物が著しい加水などによる変質作用を受けて形成される鉱物である。

ここまでの観察および鉱物分析に基づくと、「赤色岩石」は縞状構造を示し、また円磨度の低い破片状の石英が含まれることから、火山性堆積物などの降下堆積物を起源とし、それが粘土化したものであると考えられる。

次にXRFおよびLA-ICP-MSによる全岩主要・微量・希土類元素分析の結果を表2に示す。主要元素では、Si, Al, Feが認められ、Naなどのアルカリ元素、Mgなどのアルカリ土類元素は微量に含まれるのみである。これは強い変質作用のため、元素が溶脱したと考えられる。そのため、全岩化学組成に基づく原岩の推定には、変質作用で移動しにくく原岩の情報を保持

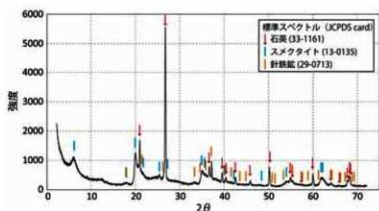


図2. 「赤色岩石」のX線回折スペクトル。

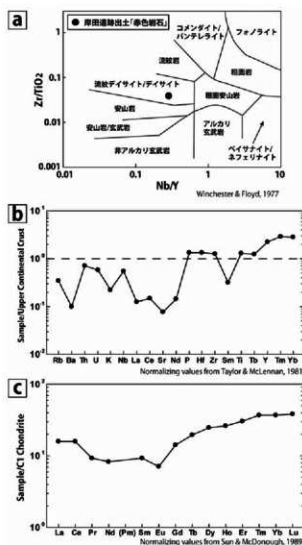


図3. 「赤色岩石」の全岩化学組成

する元素を用いる必要がある。これにはTi, Nb, Zrや希土類元素など、イオンの価数が大きく、難水溶性の微量元素であるHFS (High Field Strength) 元素を用いた解析が有効である。HFS 元素を用いた Winchester and Floyd (1977) による火成岩の区分図において、「赤色岩石」は流紋デイサイト・デイサイトに区分され、珪長質岩であると推察される。

これまでの分析結果を総合すると、「赤色岩石」は珪長質凝灰岩が、変質作用を受けて粘土化した岩石であると考えられる。

3. 「赤色岩石」の原産地推定

「赤色岩石」の被った変質作用の特徴を検討するため、微量元素と希土類元素を上部地殻平均化学組成 (Taylor & McLennan, 1981) で規格化すると (図3b), RbやBa, SrなどのいわゆるLLI (Large Ion Lithophile) 元素は著しく低いことが分かる。これらは流体によって移動しやすい元素であるため、変質に伴って溶脱していると考えられる。難水溶性のHFS 元素は、多くの元素で上部地殻と同様の値を示しており、原岩の情報を保持していると考えられる。しかし、HFS 元素のうち、La, Ce, Smなどの軽希土類元素は明瞭に低い値を示す。「赤色岩石」の希土類元素濃度をC1コンドライトの化学組成 (Sun & McDonough, 1989) で規格化すると、図3cのように軽希土類元素よりも重希土類元素に富む右上がりのパターンを示す。一般的に、珪長質岩は軽希土類元素に富み、重希土類元素に乏しい右下がりのパターンを持つことから、軽希土類元素が選択的に減少していることが分かる。Haas et al. (1995) は熱水流体中における希土類元素の化合物種を明らかにし、軽希土類元素は塩素 (Cl) と結びつくこ

とで塩化物として流体中に溶解しているが、重希土類元素は塩化物になりにくい傾向が認められた。このことは、塩素を含む流体による変質を受けた場合、軽希土類元素のみが選択的に溶脱することを示唆する。

塩素を含む流体は、一般に火山性熱水あるいは海水・海底熱水であると考えられるが、海洋中で形成された粘土（海成粘土）の場合、石膏や黄鉄鉱などの硫酸化合物を含み、アルカリ元素の溶脱がみられないことが多い（例えば、Melson et al., 1968；市原, 1993）。そのため、「赤色岩石」を形成した変質作用は、陸域における火山性熱水によるもので、地熱地帯などで起きたと考えられる。「赤色岩石」の主要構成鉱物であるスメクタイトは、比較的低温条件下で安定な粘土鉱物であり、およそ150℃前後を境にイライトに変化することが知られている（白水, 1988）。これらのことから、「赤色岩石」の原産地は、「珪長質火山堆積物が、塩素を含む流体による低温の熱水変質作用を受けている地熱地帯」であると考えられる。岸田遺跡の位置する北部九州における地熱地帯は、例えば島原、阿蘇、九重などが挙げられる。今後、共伴遺物の特徴など考古学的証拠と組み合わせることでさらに絞り込みを行い、加えて天然採取岩石の分析と比較することで原産地が特定できると期待される。

謝辞

九州大学大学院比較社会文化研究院の桑原義博先生にはX線粉末回折分析装置の使用について便宜を図っていただいた。深く感謝申し上げます。

引用文献

Haas, J.R., Shock, E.L. and Sassani, D.C. 1995, Rare earth elements in hydrothermal systems: Estimates of standard partial molal thermodynamic properties of aqueous complexes of the rare earth elements at high pressures and temperatures. *Geochim. Cosmochim. Acta.*, 59, 4329-4350.

市原優子, 1993, 大阪層群の泥質堆積物中の有機物と硫黄. 市原実（編）大阪層群, 創元社, pp273-282.

JCPDS card 33-1161.

JCPDS card 13-0135.

JCPDS card 29-0713.

Melson, W.G., Thompson, G. and Andel, T.J. H. van, 1968, Volcanism and metamorphism in the Mid-Atlantic Ridge 22° N latitude. *Jour. Geophys. Res.*, 73, 5925-5941.

宮内克己, 2004, 竪穴式住居跡の廃絶. *九州考古学*, 79, 1-17.

白水靖雄, 1988, 粘土鉱物学. 朝倉書店, pp.185.

Sun, S.S. and McDonough, W.F., 1989, Chemical and isotope systematics of oceanic basalts: implications for mantle composition and processes. In: Saunders A.D. and Norry, M.J.(eds.), *Magmatism in ocean basins*. *Geol. Soc. London. Spec. Pub.* 42, pp313-345.

Taylor, S.R. and McLennan, S.M., 1981, The composition and evolution of the continental crust: rare earth element evidence from sedimentary rocks. *Phil. Trans. R. Soc.*, A301, 381-399.

Winchester, J.A. and Floyd, P.A., 1977, Geochemical discrimination of different magma series and their differentiation product using immobile elements. *Chem. Geol.*, 20, 325-343.

表2. 「赤色岩石」の全岩化学組成

出土地点	岸田遺跡
試料番号	岸田XF7
wt.%	
SiO ₂	56.44
TiO ₂	0.77
Al ₂ O ₃	20.37
Fe ₂ O ₃	10.37
MnO	0.05
MgO	0.98
CaO	0.96
Na ₂ O	0.01
K ₂ O	0.74
P ₂ O ₅	0.22
LOI	9.05
Total	99.97
ppm	
V	100.81
Cr	28.86
Co	4.31
Ni	4.36
Cu	21.25
Zn	63.64
Ga	24.18
Rb	38.43
Sr	27.08
Y	48.69
Zr	302.87
Nb	13.70
Ba	69.32
La	3.79
Ce	9.65
Pr	0.88
Nd	3.82
Sm	1.41
Eu	0.41
Gd	2.92
Tb	0.73
Dy	6.21
Ho	1.46
Er	5.05
Tm	0.94
Yb	6.21
Lu	0.98
HF	7.70
Ta	0.98
Pb	9.32
Th	7.38
U	1.44

Note: LOI, 焼失質量

写真12

1区～3区より
早良平野をのぞむ
(南から)

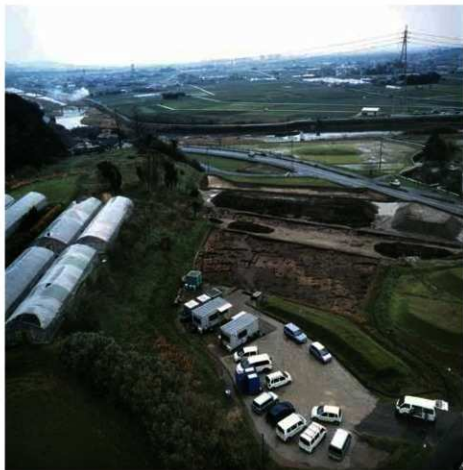


写真13

1区・2区上面全景
(上空から)





写真14 1区下面全景（北から）



写真15 1区下面西半（北から）

写真16

1区南壁東半土層
(北から)



写真17

1区南壁西半土層
(北から)



写真18

1区南壁沿いトレンチ
(北から)





写真19
SC01 (西から)



写真20
SC01 (南から)



写真21
SC02・04・05 (西から)

写真22

SC04 (西から)



写真23

SC04 (北から)



写真24

SC04火災痕跡
(西から)





写真25
SC06・07・08
(西から)



写真26
SC06・07・08
(東から)



写真27
SC09 (西から)

写真28

SC10 (西から)



写真29

SC10 (北から)



写真30

SC10完掘 (西から)





写真31
SC11 (西から)



写真32
SC11 (北から)



写真33
SX12・SC13・14・15
(北から)

写真34
SC15 (西から)



写真35
SC16 (西から)



写真36
SC20 (東から)





写真37
SC20 R1 出土状況
(東から)



写真38
SC22 (東から)



写真39
SC22 (北から)

写真40
SC23 (東から)

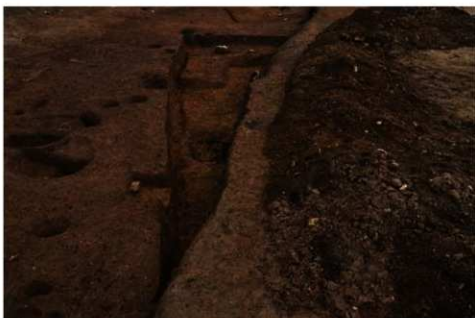


写真41
SC23 (南から)



写真42
SC24 (東から)





写真43
SC24 (上空から)



写真44
1区SC23・24
2区SC2001
(上空から)

写真45

SC24 SP19 (西から)



写真46

SC24 SP19石組
(西から)



写真47

SC24焼土溜
(北から)





写真48
SC24焼土溜土層
(北から)



写真49
SC26 (北から)



写真50
SC26土層 (北から)

写真51

SC26炉周辺（北から）



写真52

SC27（北から）



写真53

SC28（北から）





写真54
SC29 (西から)



写真55
SC30 (西から)



写真56
SC30 (北から)

写真57
SC31 (北から)



写真58
SC32 (北から)



写真59
SC32土層 (北から)





写真60
SX33 (東から)



写真61
SC34 (北から)



写真62
SC35 (北から)

写真63
SC36 (北から)



写真64
SC37 (東から)



写真65
SC38・39 (東から)





写真66
SB21 (西から)



写真67
SP1160 (南から)



写真68
SP1234 (南から)

写真69
SP1563 (西から)

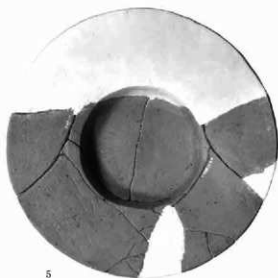


写真70
SP1563 (北から)





1 第9图1



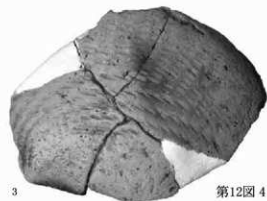
5



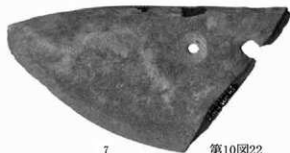
2 第10图14



6 第10图15



3 第12图4



7 第10图22



4 第12图5



8 第12图6



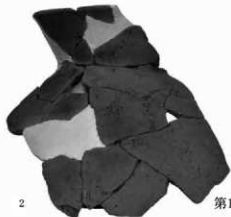
1

第16图 9



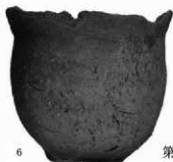
5

第16图 8



2

第16图11



6

第16图10



3

第15图 6



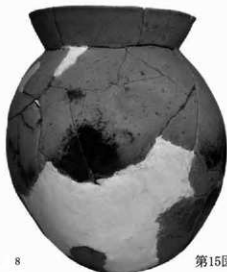
7

第15图 2



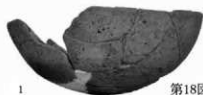
4

第15图 7



8

第15图 3



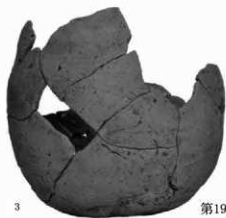
1

第18图 4



2

第19图17



3

第19图16



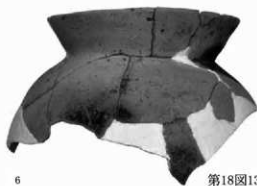
4

第18图 6



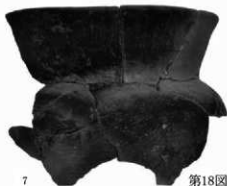
5

第19图19



6

第18图13



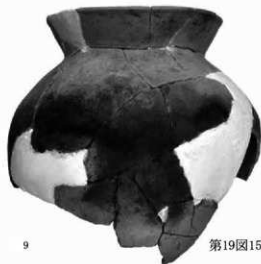
7

第18图 3



8

第18图 2



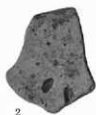
9

第19图15



1

第19図14



2



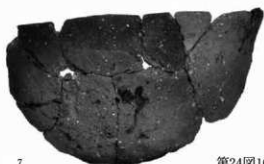
6

第19図21



3

第24図14



7

第24図16



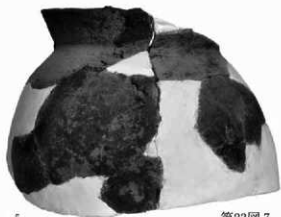
4

第24図12



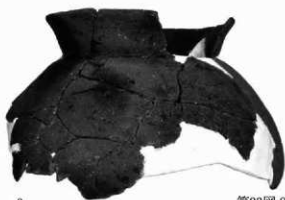
8

第24図13



5

第23図7



9

第23図8



1

第24図11



5

第24図10



2

第24図18



6

第23図1



3

第23図2



7

第23図3



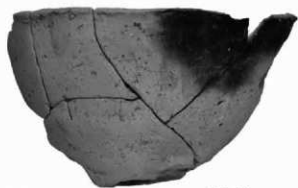
4

第26図7



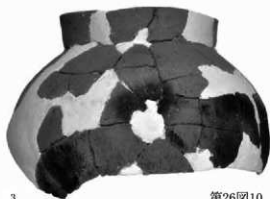
8

第26図5



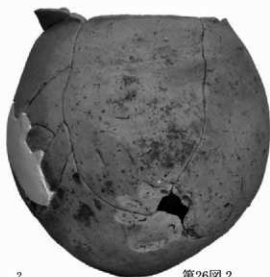
1

第26図11



3

第26図10



2

第26図 2



4

第26図 1



5

第27図21



1

第29図 1



6

第29図 2



2

第29図 3



7

第29図 4



3

第29図 6



8

9

第30図 12



4

第29図 8



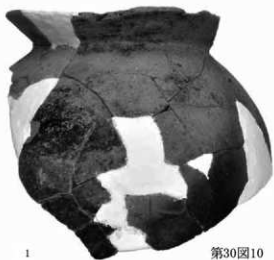
10

第29図 7



5

第30図 13



1

第30图10



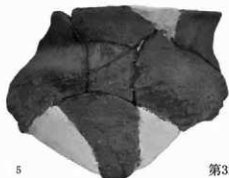
4

第33图16



2

第32图7



5

第32图6



6

第33图12



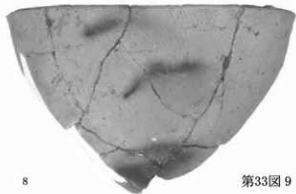
3

第32图3



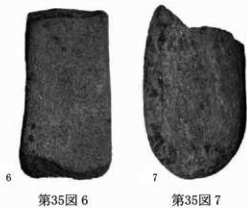
7

第33图15



8

第33图9





1

第37图5



2

第37图7



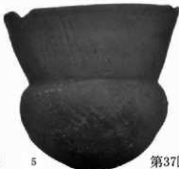
3

第37图8



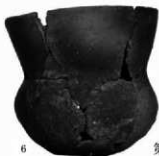
4

第37图9



5

第37图10



6

第37图11



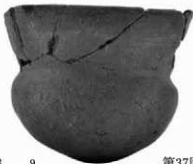
7

第37图12



8

第37图13



9

第37图14



10

第37图15



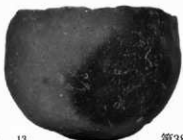
11

第37图16



12

第38图24



13

第38图25



14

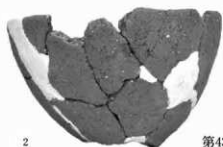
第39图33





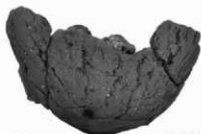
1

第41図10



2

第43図 3



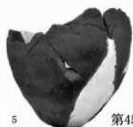
3

第43図 6



4

第43図 5



5

第45図 7



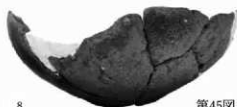
6

第45図 8



7

第45図 9



8

第45図11



11

第45図10



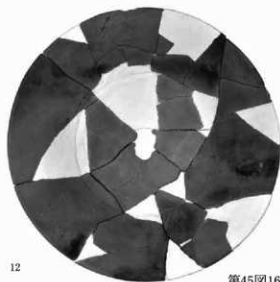
9

第45図14



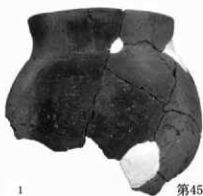
10

第45図15



12

第45図16



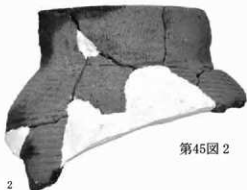
1

第45图 1



3

第46图 19



2

第45图 2



4

第46图 23



5

第46图 21



6

第49图 1



7

第49图 2



8

第49图 4



9

第59图 6



10

第59图 1



1 第49図 7



2 第49図 8



3 第53図 14



4 第53図 15



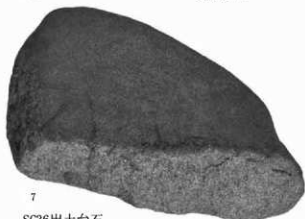
5 第53図 18



6 第63図 7



8 第59図 7



7 SC36出土台石



9 第59図 8

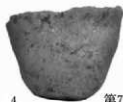


1

第69図1



2



4

第70図1



5

第70図8



3

第69図2



6

第70図10



7

第70図11



8

第70図16



9

第70図13



10

第70図15



11

第70図17



12

第70図5



1

第71図 1



2

第71図 2



3

第67図 3



4

第71図 4



5

第71図 3



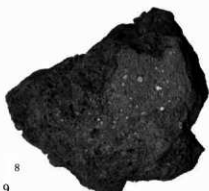
6

第71図 5



7

第71図 9



8



9

第43図 9



10

第13図 18



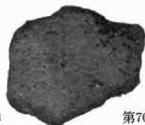
12

第53図 11



14

第41図 12



11

第70図 7



13

第19図 18



15

第41図 11



1 第10図26



2 第13図19



3 第13図20



4 第16図12



5 第16図13



6 第33図17



7 第35図8



8 第39図34



9 第53図17



10 第70図18



11 第70図19



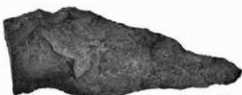
12 第71図8



13 第71図7



14



15

第63図8

報告書抄録

ふりがな	ながみねちくとうちかいりょうじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょうく きしだいせきいち							
書名	長峰地区土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書6 岸田遺跡1							
副書名	ー 第1次調査1区の報告 ー							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1256集							
編著者名	松尾奈緒子							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番地1号 TEL092-711-4667							
発行年月日	2015年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
きしだいせき だいいちじ ちょうさ 岸田遺跡 第1次調査	ふくおかしきわらく さわら よんちょうめ 福岡市早良区 早良4丁目	40137	0788	33° 30' 37"	130° 19' 54"	20091027 ～ 20101019	5775	記録保存調査
				(世界測地系)				
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
岸田遺跡 1次調査1区	集落	弥生時代～中世		竪穴住居 掘立柱建物 土坑 柱穴		縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器 陶磁器 石器・石製品		
要約	<p>本書は、岸田遺跡1次調査のうち、1区を報告するものである。</p> <p>1区では、弥生時代前期末から中期後半、弥生時代終末期から古墳時代前期前半、古墳時代中期初頭から中期後半の、3時期を中心とする竪穴住居群を検出した。とくに、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭に属するSC23・24は、2区のSC0201とともに、一辺7m×10mをはかる大型の住居で、3棟が主軸をそろえて整然と配置されており注目される。また、弥生時代前期末から古墳時代前期に属する住居からは、佐賀平野系や豊前系、吉備系の遺物がごく少量出土しており、他地域との断続的な交流が推測できる。</p> <p>このほかに、古代・中世に属する柱穴・土坑等も検出したが、遺構のあり方は相対的に散漫である。</p> <p>なお、1区では、縄文時代の遺物はそれ以降の遺構から少量出土するものの、包含層や遺構の存在は確認できなかった。</p>							

岸田遺跡 1

—第1次調査1区の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1256集

2015年（平成27年）3月25日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 陽文社印刷所
福岡市南区大橋2丁目4-10
